





第五條 別種ノ勳章ハ之ヲ併佩ス其大綬章ハ之ヲ併佩セス

●勳章記章佩用心得 明治二十二年二月 賞勳局告示第一號

第一款 一等勳章ヲ有スル者更ニ別種ノ一等勳章ヲ受ケタル時ハ旭日桐花章ト旭日章トハ同種ナリ併佩スルコト後ニ受ケタル一等勳章ノ正章並ニ其副章ト前ニ受ケタル一等勳章ノ副章トヲ併佩スヘシ

第二款 二等以下ノ勳章ヲ有スル者更ニ同種上級ノ勳章ヲ受ケタル時ハ其下級ノ勳章ヲ佩フルコトヲ止ム別種ノ同級若クハ上級ノ勳章ヲ受ケタル時ハ之ヲ併佩スヘシ

第三款 二等勳章若クハ一等ノ副章兩箇以上ヲ併佩スル時ハ後ニ受ケタルモノヲ前ニ受ケタルモノ、位置ニ付テ其上位ニ列佩スヘシ

第四款 三等勳章兩箇以上ヲ併佩スル時ハ後ニ受ケタルモノヲ前ニ受ケタルモノ、位置ノ上ニ佩フヘシ

第五款 四等勳章以下兩箇以上ヲ併佩スル時ハ後ニ受ケタルモノヲ前ニ受ケタルモノ、位置ノ右ニ佩ヒ其從軍記章若クハ褒章ヲ有スル者ハ之ヲ勳章ノ位置ノ左ニ列佩スヘシ

第六款 勳章ハ男子ハ大禮服及ヒ通常禮服(燕尾服)着用ノ時佩フヘシ從軍記及ヒ褒章ヲ有スル者亦同シ  
通常禮服着用ノ時ハ大綬章ヲ上衣ノ下ニ佩ヒ其副章ヲ上衣ノ上ヘ其位置ニ佩フ又大綬章ヲ胴衣ノ下襯衣ノ上ニ佩ヒ副章ヲ上衣ノ上ヘ其位置ニ佩フルコトアリ時宜ニ依リ大綬章ヲ省キ其副章ノミヲ佩フルコトアルヘシ

第七款 勳章ハ婦人ハ大中小禮服着用ノ時佩フヘシ  
一等勳章ヲ有スル者大禮服ニハ大綬章及ヒ副章ヲ佩フ中小禮服ニハ時宜ニ依リ大勳章ヲ省キ副章ノミヲ佩フルコトアルヘシ又通常禮服ニハ時宜ニ依リ副章ノミヲ佩フルコトアルヘシ

二等以下ノ勳章ヲ有スル者ハ通常禮服着用ノ時ニ於テモ時宜ニ依リ之ヲ佩フルコトアルヘシ

外國勳章記章

第八款 外國勳章佩用方ハ各彼ノ規則ニ依ル  
第九款 我勳章ヲ有スル者我勳章ヲ佩ヒスニテ彼ノ勳章ノミヲ佩フヘカラス  
第十款 彼我ノ大綬章ヲ有スル者ハ彼ノ大綬章ヲ佩ヒズ之ニ屬スル副章ノミヲ我



副章ノ位置ノ下若クハ次ニ列佩スヘシ  
但外交ノ時宜ニ依リ彼ノ大授章及ヒ其副章ヲ佩フル時ハ我大授章ヲ省キ我副章  
ハ併佩スヘシ

第十一款 彼我ノ綬ヲ用ヒサル勳章ヲ併佩スル時ハ彼ノ勳章ヲ我勳章ノ位置ノ下  
若クハ次ニ列佩スヘシ

第十二款 彼我ノ喉下ニ佩フル勳章ヲ併佩スル時ハ彼ノ勳章ヲ我勳章ノ位置ノ下  
ニ佩フヘシ

第十三款 彼我ノ左肋ニ佩フル勳章ヲ併佩スル時ハ彼ノ勳章ヲ我勳章ノ位置ノ左  
ニ列佩スヘシ

第十四款 彼ノ左肋ニ佩フル勳章ヲ我從軍記章及ヒ褒章ト併佩スル時ハ我從軍記  
章及ヒ褒章ヲ彼ノ勳章ノ位置ノ左ニ列佩スヘシ

第十五款 彼ノ記章ト我從軍記章及ヒ褒章ト併佩スル時ハ之ヲ我從軍記章及ヒ褒章  
ノ位置ノ左ニ列佩スヘシ

●略章略綬佩用心得

明治二十二年二月  
賞勳局告示第二號

一 各種勳章ノ略章(凡ソ經曲尺五六分若クハ其以下ノ大サニシテ勳章ノ形ト彩色トヲ備ヘタル略小勳章ヲ謂フ)ハ通常禮服用ノ時或ル

場合ニ於テ連鎖或ハ小綬ヲ以テ左肋ニ佩用スルヲ得外國勳章ノ略章モ亦同シ

二 略綬ハ通常禮服用通常服用ノ節左襟見返シノ鈕孔ニ掛ケ佩フヘシ

三 略綬ハ別種二箇以上ノ勳章ヲ有スル者各其綬ト同色ナル絹ヲ以テ二箇若クハ  
數箇合併ノモノヲ製シ之ヲ佩用スルヲ得又内外數種ノ勳章ヲ有スル者ハ内外  
數箇合併ノ略綬ヲ製シ之ヲ佩用スルコトヲ得

四 我略綬ヲ佩ヒテ外國ノ勳章ヲ佩フルコトナシ

(略章略綬佩用圖零ス)

(參照)

○明治二十一年十二月海軍省達第五百一十一號

寶冠章ノ外各種勳章ヲ佩フル者ニ對スル海軍番兵ノ敬禮ハ左ノ式ニ依ルヘシ

但明治十一年一月三十一日達ハ廢ス

海軍番兵敬禮式

大勳位菊花大綬章

勳一等旭日桐花大綬章  
勳二等旭日重光章及ヒ瑞寶章

勳三等旭日中綬章及ヒ瑞寶章



右捧銃シテ敬禮ナ行フ

勳四等旭日小綬章及ヒ瑞寶章

勳五等雙光旭日章及ヒ瑞寶章

勳六等單光旭日章及ヒ瑞寶章

右肩銃シテ敬禮ナ行フ

勳七等青色桐葉章及ヒ瑞寶章

勳八等白色桐葉章及ヒ瑞寶章

右建銃ノ儘姿勢ヲ正シテ敬禮ナ行フ

武官ニシテ勳章ニナスヘキ敬禮ヨリ重キ敬禮ヲ受クヘキ官職アル者ハ重キニ從テ敬禮ナ行フ

略綬ヲ着ル時ハ此限ニアラス

●勳等進敘シ同種ノ上級勳章ヲ受ケシ者ハ其下級勳章

ヲ賞勳局ヘ還納セシム

明治二十二年三月 勅令第三十八號

朕勳章還納ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

勳等進敘シ同種ノ上級勳章ヲ受ケタル者ハ其下級ノ勳章ヲ賞勳局ヘ還納スヘシ  
但勳記ハ還納スルノ限ニアラス

●勳章還納

明治二十二年三月 勅令第三十八號

朕勳章還納ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

勳章進敘シ同種ノ上級勳章ヲ受ケタル者ハ其下級ノ勳章ヲ賞勳局ヘ還納スヘシ  
但勳記ハ還納スルノ限ニアラス

●勳章還納手續

明治二十二年三月 勅令第九號

勳章還納手續ヲ定ムルコト左ノ如シ

勳章還納手續

第一條 同種上級ノ勳章ヲ授與セラレタル者ハ一週間以内ニ其下級ノ勳章ヲ賞勳局ヘ還納スヘシ

第二條 同種上級ノ勳章ヲ賞勳局ノ送達ニヨリ受領シタル者ハ直ニ其領票ト共ニ下級ノ勳章ヲ同局ヘ差出スヘシ  
官廳ヲ經テ受領シタル者ハ其官廳ヘ差出シ官廳ハ之ヲ賞勳局ヘ送付スヘシ



第三條 外國人ノ勳等進級シ同種上級勳章ヲ受ケタル者モ亦此手續ニ從ヒ下級ノ勳章ヲ還納スヘシ其外國ニ在ル者ハ最寄我公使館又ハ領事館ヘ差出スヘシ

第四條 公使館又ハ領事館ニ於テ前條勳章ヲ領收シタルトキハ外務省ヘ送付シ同省ハ之ヲ賞勳局ヘ送付スヘシ

第五條 勳章還納ニ關スル費用ハ受章者ノ自辨トス又官廳ヨリ賞勳局ヘ送付スルモノハ其官廳ニ於テ支辨スヘシ

附則

一從前同種勳章ニ進級シタル者ハ東京ハ二週間以內各地方ハ三十日以內ニ下級ノ勳章ヲ還納スヘシ我國在留ノ外國人亦同シ其外國ニ在ル者ハ手續第五條ニ依ルヘシ但進級者既ニ死亡シタルトキハ本文ノ限ニアラス

勳章及從軍記章紛失等ノ節購求方

明治二十三年四月 陸軍省總務局ヨリ通牒

別紙寫之通賞勳局ヨリ通牒相成候條爲御心得此段申進候也

(別紙) 明治二十年三月三十日 第六四一號賞勳局ヨリ通牒

勳章及從軍記章拂下手續明治十三年一月中及御通牒置候處自今當局ノ拂下ヲ廢止候

但本文諸章ヲ遺失又ハ毀損シタル節ハ佩章者各自ノ便宜ニヨリ製造人ニ付購求候様三月二十九日官報ニ掲載候條此段爲念中添候也

勳章年金褫奪及佩用停止

明治十六年六月 第二十二號布告(太政官)

勳章ヲ有スル者其榮譽ヲ汚辱スルノ所爲アル時ハ賞勳及年金ヲ褫奪ス外國勳章ハ其佩用免許狀ヲ沒收ス

勳章ヲ有スル者重罪輕罪ノ訴ヲ受ケ拘留若クハ保釋責付セラレタル時ハ勳章ヲ佩用スルコトヲ得ス又之ニ屬スル禮遇特權及ヒ年金ヲ受クルコトヲ得ス

勳章年金褫奪及停止取扱手續改正

明治十九年七月 閣令第十九號

各官廳

明治十六年九月第三十九號達勳章年金褫奪及停止取扱手續ヲ改正スルコト左ノ如シ  
勳章年金褫奪及停止取扱手續

第一條 勳章ヲ有スル者左ノ項目ニ觸ル、トキハ榮譽ヲ汚辱シタル者トス

第一項 重罪輕罪ノ刑ニ處セラレタル者



但輕禁錮以下ノ刑ニ處セラレタル者ハ其所犯ノ情狀ニヨル

第二項 賭博犯ノ處分ヲ受ケタル者

第三項 懲戒例及免黜條例ニヨリ免官セラレタル者

第四項 素行修ラマス帶勳者タルノ面目ヲ汚ス者

第二條 第一條第一項ニ觸ル、者輕罪ヲ犯シタルモノナルトキハ裁判確定ノ後裁判

管轄長官ヨリ司法大臣又ハ陸海軍大臣ヲ經由シテ宣告書寫ヲ添ヘ其旨ヲ賞勳局總

裁ヘ具申スヘシ其重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ普通刑法第三十一條第三十二條陸

軍刑法第二十八條第二十九條海軍刑法第十七條ニ依リ處分ス

第三條 第一條第二項第三項第四項ニ觸ル、者アルトキハ所轄長官又ハ地方官ヨリ

其情狀ヲ賞勳局總裁ヘ具申スヘシ

第四條 賞勳局總裁ハ其具申ヲ審査シ重禁錮ノ刑ニ處セラレタル者ハ直ニ上奏シ其

輕禁錮以下ノ刑ニ處セラレタル者及ヒ第一條第二項第三項第四項ニ觸ル、者ハ議

定官ノ會議ニ於テ其褫奪ノ當否ヲ論定シ褫奪スヘキ者ハ奏請ス

第五條 褫奪ノ裁可アリタルトキハ賞勳局總裁ハ褫奪狀ヲ作り褫奪ノ具申ヲ爲シタ

ル長官ヲ經由シテ本人ヘ傳達セシム

褫奪ニ及ハサルトキハ賞勳局總裁ヨリ褫奪ノ具申ヲ爲シタル長官ヘ通知スヘシ

第六條 勳位進級セシ者ナルトキハ前級ノ勳賞勳記ヲモ褫奪スヘシ年金票モ亦同シ

第七條 褫奪シタル勳章勳記年金票ハ褫奪ヲ行ヒタル官廳ヨリ賞勳局ヘ還納スヘシ

但其重罪ノ刑ニ處セラレタル者ニ係ルトキハ其宣告書寫ヲ添フヘシ

第八條 勳章ヲ有スル者重罪輕罪ノ訴ヲ受ケ拘留セラレタルトキハ其年月日及ヒ事

由ヲ裁判管轄長官ヨリ司法大臣又ハ陸海軍大臣ヲ經由シテ賞勳局總裁ヘ具申スヘ

シ

但公訴權消滅シタルトキ若クハ放免ノ言渡ヲ爲シタルトキハ亦其事情ヲ詳記シ

テ之ヲ申告スヘシ

第九條 重罪輕罪ヲ犯シ未タ其訴ヲ受ケスト雖モ現ニ拘留セラレタルトキハ檢察官

ヨリ前條ノ手續ニ從ヒ賞勳局總裁ヘ具申スヘシ

第十條 外國勳章佩用免許狀ヲ沒收スルトキモ亦總テ此手續ニ準據スヘシ



第十四類

○褒賞

●褒章條例

明治十四年十二月  
布告第六十三號(太政官)

褒章條例別紙ノ通相定來明治十五年一月一日ヨリ之ヲ施行ス  
右奉 勅旨布告候事  
(別紙)

褒章條例

第一條 凡ソ自己ノ危難ヲ顧ミス人命ヲ救助セシ者又ハ德行卓絶ナル者孝子順孫節婦義僕ノ類又ハ公衆ノ利益ヲ興シ成蹟著明ナル者疏河築堤修路墾田ノ業或ハ貧院學校設立ノ類ヲ云フノ褒章ヲ定ム  
紅綬褒章  
右自己ノ危難ヲ顧ミス人命ヲ救助セシ者ニ賜フモノトス  
綠綬褒章  
右德行卓絶ナル者ニ賜フモノトス







第一條 凡ソ勳章ヲ賜フヘキ者アルトキハ其管轄長ヨリ内務卿又ハ農商務卿ニ具申

シ内務卿又ハ農商務卿ハ其當否ヲ審査スヘシ

但官吏職務上ニ於テ人命ヲ救助シ又ハ公益ヲ興シタルハ褒章ヲ賜フノ限リニア  
ラズ

第二條 内務卿又ハ農商務卿ニ於テ褒章ヲ賜フヘキモノト思量スルトキハ之ヲ賞勳

局總裁ニ申牒スヘシ賞勳局總裁ハ其申牒ニ據リ勅奏任官並ニ從六位以上及勳六等

以上ノ者及ヒ華族ノ戶主ニハ褒章ヲ直授シ其他ノ者ハ内務卿又ハ農商務卿ヲ經由  
シ其管轄長官ヲシテ之ヲ傳達セシムヘシ

但外國人ニ危難救助ノ褒章ヲ賜フヘキトキハ外務卿ヨリ賞勳局總裁ニ申牒スヘ  
シ授與ハトキモ亦同卿ヲ經由シテ之ヲ傳達セシムヘシ其公私備ニ係ル者ハ本條  
ニ同シ

第三條 褒狀ハ管轄長官ヨリ與フルモノトス然レトモ勅奏任官并ニ從六位以上及ヒ

勳六等以上ノ者及ヒ華族ノ戶主ハ内務卿又ハ農商務卿ニ具申スヘシ内務卿又ハ農

商務卿ハ之ヲ太政官ニ上申シ太政官ニ於テ之ヲ賜フヘシ

●黃綬褒章制定

明治二十年五月  
勅令第十六號

朕黃綬褒章臨時制定ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 私財ヲ獻納シ防海ノ事業ヲ贊成スルモノニ授與スル爲メ黃綬褒章ヲ制定シ

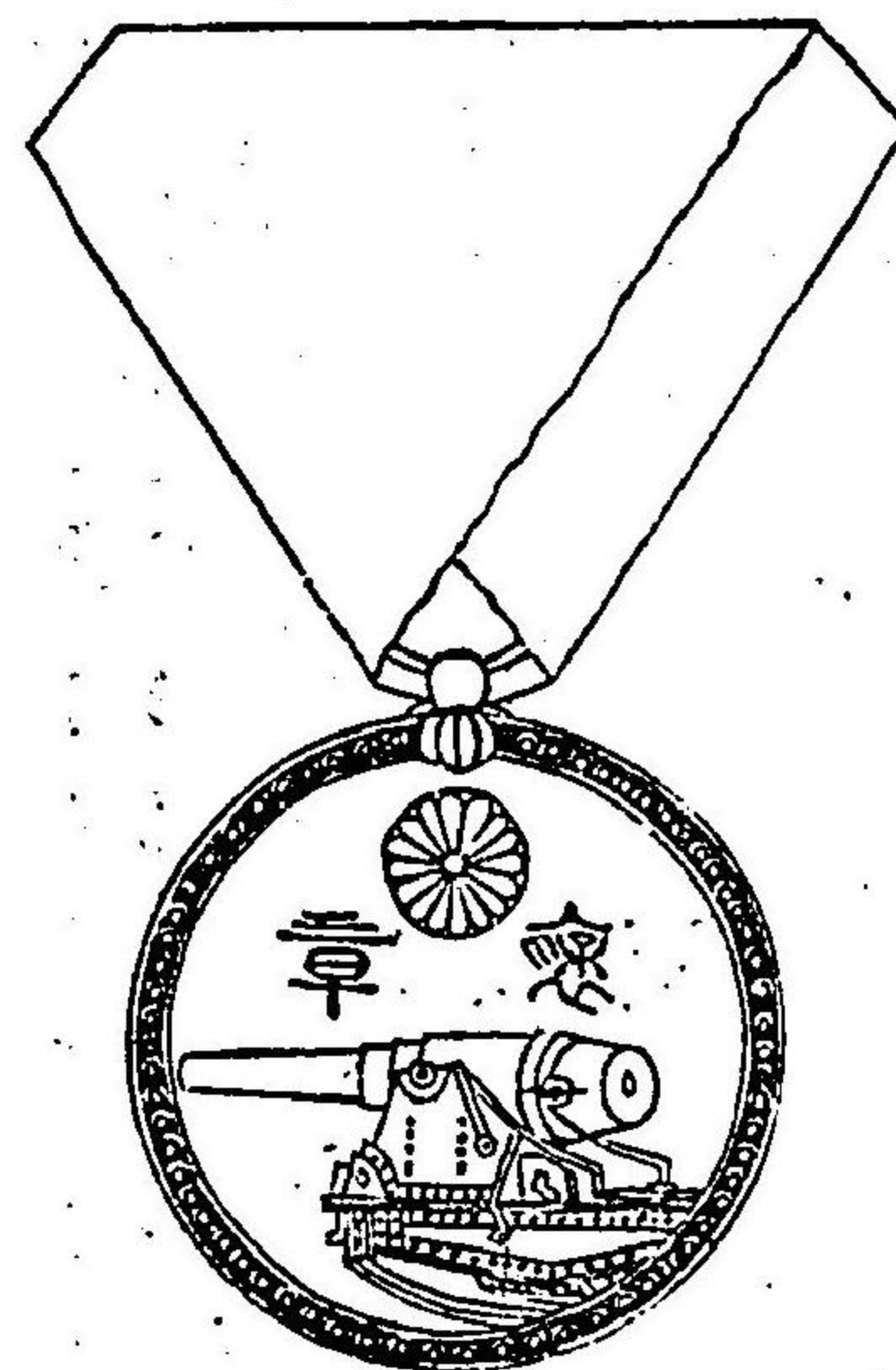
分テ金章銀章ノ二種トス

第二條 黃綬褒章ヲ佩用シ又ハ沒收スルノ事項ハ明治十四年<sup>十二</sup>月<sup>十二</sup>第六十三號褒章條

例ニ據ル

第三條 黃綬褒章ノ圖式左ノ如シ

章	金及銀圓形表面ニ菊ノ徽章褒章ノ二字大砲ノ圖裏面ニ贊成防海事業ノ六字ヲ刻出ス
綬	橙黃色





●大日本帝國憲法發布記念章制定

明治二十二年八月 勅令第三百三號

朕帝國憲法發布記念章制定ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 大日本帝國憲法發布記念章ハ金銀ノ兩種トス

第二條 記念章ヲ頒賜スルハ憲法發布式ニ關リタル親王以下ノ諸員ニ限ル列任官以下ヲ除ク

第三條 記念章ノ圖式左ノ如シ

章

圓形徑九分餘金若クハ銀  
輪廓内表面ニ菊御紋ト高御座位大勳位菊花頭飾章ノ圖裏面ニ明治  
二十二年二月十一日大日本帝國憲法發布記念章ノ二十三字ヲ識ス

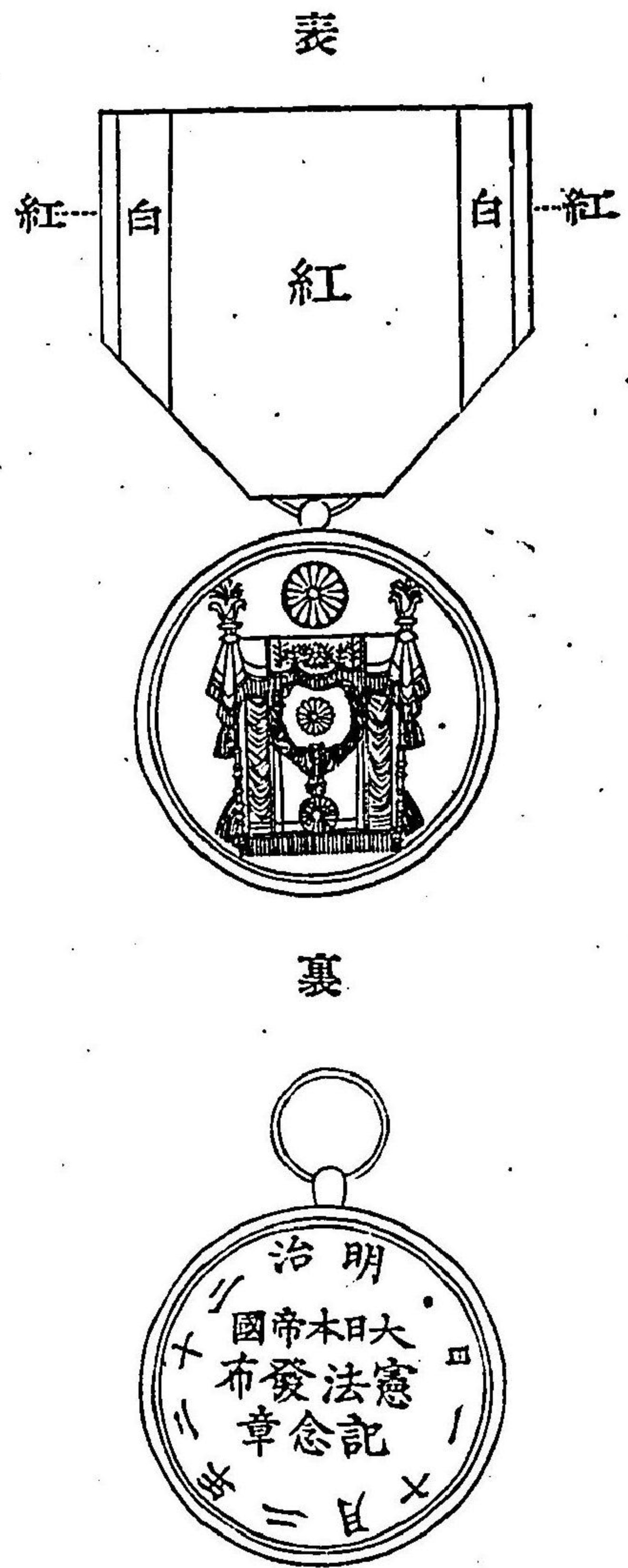
環 圓形金若クハ銀

綬 幅一寸二分旭日桐花章ノ綬ヲ用フ

第四條 記念章ハ本人ニ限り終身之ヲ佩用シ子孫之ヲ保存スルヲ許ス其ノ之ヲ沒收

スルノ事項ハ明治十四年第六十三號布告褒章條例ニ依ル

記念章ノ圖



佩用式

- 一 綬ヲ用テ左胸ニ佩フ
- 一 記念章ヲ四等以下ノ勳章若クハ記章褒章ト併佩スル時ハ勳章ノ左記章褒章ノ右ニ列シテ佩フヘシ

●褒章及金銀木杯、金圓等賜り方

明治十六年一月 布告第一號(太政官)



明治十四年<sup>十二</sup>月<sup>十二</sup>第六十三號布告褒章條例ニ依リ褒章ヲ賜フヘキ者又ハ公益ノ爲メニ  
 金穀財産等ヲ寄付シタル者ハ金銀木杯若クハ金圓ヲ賜ヒ又ハ褒章ト金銀木杯金圓ヲ  
 併セ賜フコトアルヘシ  
 右奉 勅旨布告候事

●金銀木杯金圓賜與手續

明治十六年三月  
 達第十七號(太政官)

官省院廳府縣

本年第一號布告ノ旨ニ依リ金銀木杯又ハ金圓賜與手續別紙ノ通相定候條此旨相達候  
 事

(別紙)

金銀木杯金圓賜與手續

第一條 褒章ヲ賜フヘキ者ニ金銀木杯又ハ金圓ヲ賜ヒ又ハ褒章ト之ヲ併セ賜フトキ  
 ハ其等差左ノ如シ

定例

- 第一等 木杯三組<sup>品格ヲ三  
等ニ分ツ</sup>又ハ金拾圓ヨリ多カラヌ六圓ヨリ少カラス
- 第二等 木杯三組<sup>品格ヲ三  
等ニ分ツ</sup>又ハ金五圓ヨリ多カラヌ二圓五拾錢ヨリ少カラス

(明治十七年第二  
 十二號達ヲ以テ第  
 二條中但書追加セ  
 ラル)

第三等 木杯壹個<sup>品格ヲ三  
等ニ分ツ</sup>又ハ金貳圓ヨリ多カラヌ壹圓ヨリ少カラス  
 但賜與賜金ニ及ハサルモノハ褒狀ヲ與フルコトアルヘシ

特例

- 第一等 金杯壹個又ハ三組又ハ金圓
- 第二等 銀杯壹個又ハ三組又ハ金圓
- 第二條 公益ノ爲メニ金穀財産等ヲ寄付シタル者ニ金銀木杯ヲ賜ヒ又ハ褒章ト之ヲ  
 併セ賜フトキハ其等差左ノ如シ

奇附金額又ハ價格

拾圓未滿

褒狀

但壹圓未滿ハ褒詞ヲ以テ褒狀ニ換フルコトアルヘシ

木杯壹個

拾圓以上百圓未滿 但五拾圓未滿ハ拾圓毎ニ五圓以上ハ貳拾五圓毎ニ品格ニ等差アリ

木杯三組

百圓以上五百圓未滿 但三百圓未滿ハ五拾圓毎ニ三百圓以上ハ百圓毎ニ品格ニ等差アリ

銀杯壹組

五百圓以上貳千圓未滿 但千圓未滿ハ貳百五拾圓毎ニ千圓以上ハ五百圓毎ニ品格ニ等差アリ











- 第二條 善行證書ハ滿期若クハ退營ノ際之ヲ附與ス
- 第三條 善行證書ヲ附與スヘキ者アルトキハ中隊長若クハ直屬ノ長官ヨリ順序ヲ經テ聯隊長若クハ之ト同等以上ノ權アル長官ニ具狀シ同官ハ近衛都督又ハ師團長若クハ之ト同等以上ノ權アル長官ノ認可ヲ得テ附與スヘシ
- 第四條 善行證書ヲ附與スルニハ隊附ニ在テハ該隊長兵隊整列ノ前ニ於テシ隊外ニ在テハ直屬ノ長官ヲシテ傳達セシムヘシ
- 第五條 事故ニ由リ現役ヲ免スル者ニハ善行證書ヲ附與セス但再服役以上ニシテ本條ニ該ル者ハ此限ニ在ラス (證書離形略ス)

●海軍善行章條例改正

明治十五年五月 海軍省達丙第二十九號

海軍一般

海軍下士以下善行章條例別紙ノ通改正候條此旨相達候事

(別紙)

善行章條例

- 第一條 善行章ハ海軍定員下士以下ニシテ行狀方正職務勉勵ノ者ヲ賞スル袖標トス
- 第二條 此章ハ幅三分ノ山形赤夏服ハ線ニシテ一線ヨリ五線ヲ限リ之ヲ左袖ノ上部

●海軍善行章條例第四條改正

明治十五年五月 海軍省令第九號

ニ附著ス

- 第三條 此章一線ヲ受ケタル者ニハ日ニ金壹錢ヲ給シ以上每一線ニ壹錢ヲ增加ス
- 第四條 此章與奪ノ權ハ本管長鎮守府司令長官或ハ艦隊指揮長官兵學校長等ヲ云フニ在リ而シテ該長ハ之ヲ與奪スル毎ニ受章者ノ履歷書ヲ添ヘ其事由ヲ本省ニ届出軍務局及ヒ鎮守府ヘ報告スヘシ尤モ外國航海中ハ船艦限り仮リニ與奪シ歸朝ノ上本管ニ於テ成規ノ手順ヲナスヘシ
- 但シ刑罰ニ處セラレタル者ノ章ハ宣告スル應或ハ艦船營長假リニ之ヲ剝奪シ追テ成規ノ手順ヲ爲スヘシ
- 第五條 此條例ニ於テ刑ト稱スルハ海軍刑法陸軍刑法及普通刑法ノ禁錮以上ノ刑ヲ謂ヒ罰ト稱スルハ海軍ノ諸懲罰及ヒ普通刑法ノ罰金過料及拘留ヲ謂フ
- 第六條 善行章ヲ授與スル左ノ如シ
  - 第一 三箇年以上勤仕シ其終ノ一箇年半續テ一等行狀ノ者ニハ一線ヲ授與ス
  - 第二 六箇年以上勤仕シ其終ノ二箇年間續テ一線ヲ有スル者ニハ更ニ一線ヲ增加ス
  - 第三 九箇年以上勤仕シ其終ノ二箇年間續テ二線ヲ有スル者ニハ更ニ一線ヲ增加ス

明治十五年五月 海軍省令第九號  
 丙第二十九號  
 行章條例第四條改正  
 所屬長官ニ在リ而シテ  
 條ノ章與奪ノ權ハ本管長  
 二其由ヲ所管長  
 二屆出軍務局及ヒ鎮守府  
 ヘ報告スヘシ  
 尤モ外國航海中ハ船艦限り  
 仮リニ與奪シ歸朝ノ上本管  
 ニ於テ成規ノ手順ヲナスヘシ







月ノ後ニ非レハ復授スルコトヲ得ス三線以上ノ與奪モ亦之ニ準ス

第五 二線ヲ有スル者罰ニ處セラル、時ハ其一線ヲ剝奪シ其期滿ルノ翌日ヨリ六箇月間刑罰ヲ受ケサルトキハ之ヲ復授スルコトヲ得若シ六箇月以内再ヒ刑罰ニ處セラル、時ハ更ニ一線ヲ剝奪シ且其期滿ルノ翌日ヨリ六箇月間ハ先ニ剝奪シタル一線ヲ復授スルコトヲ得ス其他後ニ剝奪シタル一線ヲ復授スルト三線以上ノ與奪トハ第四項ニ同シ

第六 二線ヲ有スル者刑罰ノ故ニ非ラサルモ三等行狀ニ降サレタルトキハ其一線ヲ剝奪シ十二箇月以内ニ一等行狀ニ復スルトキハ直ニ之ヲ復授スルコトヲ得二等行狀ニ復スル時ハ其日ヨリ六箇月ノ後復授スルコトヲ得若シ十二箇月以内ニ二等行狀ニモ復セサルトキハ更ニ一線ヲ剝奪シ其日ヨリ十二箇月以内ニ一等行狀ニ復スル時ハ直ニ先ニ剝奪シタル一線ヲ復授スルコトヲ得二等行狀ニ復スルトキハ其日ヨリ六箇月ノ後之ヲ復授スルコトヲ得後ニ剝奪シタル一線ハ先ノ一線ヲ復授セシ日ヨリ十二箇月ノ後ニ非レハ復授スルコトヲ得ス三線以上ノ與奪モ亦之ニ準ス

第七 二線以上ヲ有スル者ノ其線ヲ刑罰若シクハ行狀ノ故ヲ以テ逐次悉皆剝奪シ其復授ノ前再ヒ刑罰ニ處セラル、カ或ハ剝奪ノ日ヨリ十二箇月以内ニ二等

行狀ニモ復セサルトキ初テ其一線ヲ復授スルヲ得ヘキ定限ハ第一項第二項第三項ノ例ニ準ス

第八 凡有線者四等行狀ニ降シタルトキハ悉皆其線ヲ剝奪スヘシ

第九 前項ノ者ニ初テ一線ヲ復授スルヲ得ヘキ定限ハ左ノ如シ

- 一 刑ノ故ヲ以テ剝奪シタルトキハ其期滿ルノ翌日ヨリ二十四箇月間刑罰ヲ受ケサルトキ
- 一 行狀降等ノ故ヲ以テ剝奪シタルトキハ一等行狀ニ復シタル日ヨリ十八箇月ノ後

第十條 前諸項ニ適合セサルモ此章ヲ剝奪シ或ハ二線以上一時ニ剝奪シ或ハ復授ノ期限ヲ伸縮スル相當ナリト其長ノ思考スル時ハ先ツ詳細ニ其意見ヲ本管長ニ具狀シ本管之ヲ許可シ本省ヘ届出ル者トス

第十一條 善行章ヲ授與或ハ復授スル爲メノ年月計算ニハ處刑罰或ハ拘留中有罪ニ決シタル者日數及ヒ公務ニ原因セサル傷痍疾病ニテ入院中ノ日數并自己ノ願ニ依テ歸省シタル日數ハ之ヲ算入スルヲ得ス

但公暇中ハ此限ニアラス

第十二條 善行章ヲ有スル者退隱或ハ解役スルトキハ其章ヲ收メ之ニ屬スル日給ヲ



止ム但退隱者ハ五箇年以内解役者ハ三箇年以内ニ復役スル時ハ曾テ有スル所ノ章及ヒ之ニ屬スル日給ヲ復スルヲ得ヘシ

第十三條 此章與奪ノ事由及ヒ日附等ハ本人所持ノ手帳ニ詳記シ其長或ハ副長之ニ捺印スヘキ者トス

第十四條 下士卒ノ行狀ニハ等級ヲ設ケ之ヲ行狀簿ニ登記シ以テ此章與奪ノ準則トス

第十五條 行狀簿ハ艦船營長之ヲ管掌シ六箇月毎ニ其行狀勤怠等ヲ調査シ行狀等級ヲ昇降シテ各行中ニ登記及捺印シ艦船或ハ營内士官以下ノ面前ニ於テ之ヲ朗讀ス

第十六條 前條ニ掲クル如ク行狀等級ヲ昇降スルモノハ毎六箇月ニ於テスルヲ通例トスト雖モ該長ノ意見ヲ以テ臨時之ヲ行フコトアリ

第十七條 行狀或ハ職務等ニ於テ衆人ノ模範トナルヘキモノアルカ或ハ刑罰ニ處セラル、時ハ毎ニ之ヲ行狀簿中ニ登記シ該長捺印スルモノトス

第十八條 行狀等級ヲ分ツ左ノ如シ

- 第一 一等行狀
- 第二 二等行狀
- 第三 三等行狀

第四 四等行狀

第十九條 下士卒ニ行狀等級ヲ附スル左ノ如シ

第一 行狀方正舉動勇壯職務勉勵及ヒ擔保ノ技藝卒業ノ者ニシテ六箇月間一回モ刑罰ヲ受ケサルトキハ一等行狀トス

第二 行狀方正職務勉勵ニシテ六箇月間一回モ刑罰ヲ受ケサル者ハ二等行狀トス

第三 六箇月間無刑ニシテ行狀平常ノ者ハ三等行狀トス

第四 六箇月中ニ刑ニ處セラレ或ハ怠慢甚シキ者ハ四等行狀トス

第二十條 艦船或ハ營等ニ入籍ノ者ニシテ曾テ行狀等級ヲ有スル者ハ從前ノ等級トシ其等級ヲ有セサル者ハ三等行狀トス

第二十一條 第十二條ニ掲グル者復役スル時ハ其等ヲ復シ又曾テ善行章ヲ有セサルモ一等或ハ二等行狀ノ者ニテ退隱者ハ五箇年解役者ハ三箇年以内ニ復役スルトキハ其等ヲ復シ其以後復役スル者ハ三等行狀トス

第二十二條 刑罰ヲ受ル者ノ行狀等級ヲ降スハ左ノ如シ  
第一 一等行狀ノ者重禁錮ニ處セラル、時ハ四等ニ降シ輕禁錮ニ處セラル、時ハ三等ニ降シ罰ヲ受クル時ハ二等ニ降ス  
第二 二等行狀ノ者重禁錮ニ處セラル、時ハ四等ニ降シ輕禁錮或ハ罰ニ處セラル



ル時ハ三等ニ降ス

第三 三行狀ノ者刑罰ヲ受クル時ハ四等ニ降ス

第二十三條 刑罰ニ處セラル、者ノ行狀降等ハ其時々之ヲ行フ者トス

第二十四條 艦船營長行狀等級ヲ昇降スルニハ成ルヘク准士官以上ト會議シ公平ニシテ權衡ヲ失セサルヲ要ス

第二十五條 他ノ所轄ニ轉移スル者ハ本人ト共ニ行狀簿ノ寫ヲ送附スヘキモノトス  
(別表並圖式略ス)

●射擊教範中射擊ノ褒賞徽章ヲ定ム

明治二十一年一月  
陸軍省達第十四號

射擊教範第一部第六章ニ掲クル射擊ノ褒賞徽章別紙圖面ノ通定ム

(別紙圖面略ス)

●砲兵射擊演習教令ニ掲クル競點射擊及照準褒賞徽

章  
明治二十一年三月  
陸軍省達第五十七號

砲兵射擊演習教令ニ掲クル競點射擊及照準褒賞徽章別紙圖面ノ通定ム

(別紙圖面略ス)

●警察賞與規則

明治二十一年十月  
內務省訓令第二十一號

廳 府 縣

警察賞與規則左ノ通相定ム

警察賞與規則

第一條 警察上功勞アル者ハ本則ニ依リ賞與スヘキモノトス

第二條 警察賞與ヲ分テ左ノ三種トス

甲種 金三圓以上拾五圓以下

乙種 金五圓以下

特別賞 金拾五圓以上三拾圓以下

特別賞ハ事ノ重要ニ涉リ功勞ノ特ニ著明ナルモノニ限リ之ヲ給スルコトヲ得

第三條 犯罪事件ニ關スル功勞ノ賞與ハ左ノ各項ニ依ル

第一項 左ノ罪犯ヲ現行ノ場合ニ於テ捕獲シ又ハ容易ニ捕獲スルヲ得センメタル

者

甲種



- 一 國事ニ關スル重罪犯
- 二 兇徒聚衆ニ關スル重罪犯
- 三 貨幣偽造變造ニ關スル重罪犯
- 四 人命ニ關スル重罪犯
- 五 放火ニ關スル重罪犯
- 六 強盜ニ關スル重罪犯

乙種

- 一 貨幣偽造變造ニ關スル輕罪犯
- 二 竊盜ニ關スル罪犯
- 第二項 前項ノ罪犯ヲ分明ニ訴出タル者亦前項ノ區別ニ同シ
- 第三項 第一項ノ場合ニシテ罪犯暴行強迫ヲ以テ抗拒シタルトキハ其難易ニ因リ及第一項ニ掲クル罪犯ニシテ其未遂ノ時ニ訴出タル者ハ其乙種ハ金三圓以上拾圓以下甲種ハ五圓以上貳拾圓以下ノ金額ヲ賞與スルコトヲ得
- 第四項 前數項ノ外其功勞ノ前數項ニ比シ相下ラサルモノハ其適度ニ應シ賞與スルコトヲ得
- 第五項 前數項ニ該當スルモノト雖モ事ノ最モ輕キモノ又ハ功勞ノ最モ尠キモノ

若シハ金圓ヲ賞與シ難キ事情アル者ハ賞詞ヲ與フルコトヲ得

第四條 水火災其他犯罪ニ關セサル功勞ハ乙種ノ賞ヲ給與スヘシ但其功勞ノ大ナル者ハ甲種ノ賞ヲ與フルコトヲ得

第五條 罪犯判決前ニ逃亡又ハ死去シタル場合若シハ賞與スヘキ事件ノ完結セサル前ト雖モ其疑ナキモノハ賞與ヲ施行スルコトヲ得

第六條 賞與ハ何等ノ場合ヲ問ハス一旦施行シタル後ハ之ヲ變更スルコトヲ得ス

第七條 本則ニ定メタル賞與ノ金額ハ一事件ノ賞トス但第三條第一項ノ場合ハ一罪犯ニ付テノ賞トス

數事件數罪犯ニテ功勞者一人ナルトキハ數事件數罪犯ノ賞ヲ各別ニ給與スヘシ一事件若シハ數事件一名若シハ數名ノ罪犯ニシテ功勞者數人ナルトキハ之ニ賞與スルニハ一事件若シハ一罪犯ニ對スル金額又ハ數事件若シハ數罪犯ニ對スル金額適宜功勞者ノ人員ニ配當給與スヘシ

第八條 功勞者賞與施行前ニ死去シタルトキハ賞與ノ金額ハ親屬ノ最近ナル者ニ給ス若シ親屬ナキトキハ戶長ニ交付シテ祭祀料ニ充用セシムヘシ其所在不明ナルトキ亦同シ但親屬ナキ者ニシテ三十六ヶ月ヲ經過シタルトキハ賞與ヲ施行セス



第九條 公權ヲ剝奪セラレタル者ニハ賞ヲ與ヘス

第十條 自己又ハ親屬ノ利害ニ關スル事件ニ付テハ賞ヲ與ヘス但其功勞ノ特ニ著明ニシテ一般ニ洪益ヲ及ホスモノハ時宜ニヨリ之ヲ賞與スルコトヲ得其被害者ト利害ヲ共ニスル者亦同シ

第十一條 罪犯其親屬ニ係ルトキハ總テ賞與スルコトヲ得ス

第十二條 第八條第十條第十一條ニ於テ親屬ト稱スルハ刑法第百十四條第百十五條ニ記載シタル者ヲ云フ

第十三條 巡查ニシテ左ノ各項ニ該當スル者ハ本則ニ定ムル賞與ノ區別ニ從ヒ甲種以上及特別賞ヲ與フルコトヲ得

第一項 第三條ニ掲クル罪犯ヲ捜査シ又ハ捕獲シ其功勞著シキ者

第二項 前項該當セスト雖モ其功勞ノ前項ニ比シ相下ラサル者

第三項 第四條ニ掲クル事項及流行病ニ付其功勞著シキ者

第四項 自己ノ危難ヲ顧ミス人命ヲ救援シタル者

第十四條 巡查罪犯ヲ捕獲シ功勞アリト雖モ未タ拘留セサル前ニ逃走セシメタルモノハ賞與スルコトヲ得ス

護送中逃走セシメ其護送者ニ於テ捕獲シタルトキ亦同シ

●警察賞與規則第二十一條改正  
 明治二十二年一月  
 內務省訓令第二  
 號  
 廳府縣  
 明治二十一年十月  
 內務省訓令第二十  
 一號警察賞與規則  
 第二十一條ハ左ノ  
 通り改正ス  
 第二十一條特別賞  
 與テ行フタルトキ  
 ハ其都度狀ヲ具シ  
 報告スヘシ

第十五條 巡查私事旅行中其管内ニ於テ賞與スヘキ功勞アリタルトキハ其職務上ニ於テ爲シタルモノト同一ノ賞ヲ與フヘシ

第十六條 巡查ニシテ一般人民共ニ人命ヲ救援シタルトキハ賞與スヘキ金額ヲ救援者ノ全數ニ分賦シ其巡查ニ屬スル金額ヲ賞與スヘシ

第十七條 本則第七條乃至第十一條ハ巡查ノ賞與ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第十八條 巡查ノ賞與ハ其所屬廳ニ於テ施行シ其他ハ左ノ區別ニヨリ各管轄廳東京府ハニ於テ施行スヘシ

第一項 訴ヲ受タル地ノ管轄廳

第二項 罪犯ヲ最初ニ受取タル地ノ管轄廳

第三項 犯罪事件ニ屬セサルモノハ其事件ノ生シタル地ノ管轄廳

第十九條 賞與スヘキ事件若クハ功勞者ノ數官廳ニ牽連スルモノハ互ニ協議ヲ盡シ其金額ヲ定メ之ヲ差分シ又ハ功勞ノ多少ニ依リ適宜分割シ各其廳ニ於テ賞與スヘシ

第二十條 警部其他警察事務ニ從事スル者ニシテ功勞アルトキハ巡查ノ例ニ準シ賞與スルコトヲ得

第二十一條 賞與ヲ行フタルトキハ一箇年取纏翌年一月二十日マテニ當省ニ報告ス



ヘシ但特別賞與ニ屬スルモノハ其都度報告スヘシ  
第二十二條 賞與ノ費額ハ各其所屬ノ經費ヲ以テ支辨スヘシ

●看守押丁賞與方

明治二十二年一月  
內務省訓令第一號

廳府縣 隻治監 假留監

看守押丁ニシテ左ノ各項ニ該當スル者ハ明治二十一年十月內務省訓令第二十一號警  
察賞與規則ニ據リ功勞ノ適度ニ應シ金拾五圓以下ヲ賞與スヘシ  
一 反獄ヲ鎮制スルニ當テ其功勞著シキ者  
二 自己ノ監守ニ非ラサル在監人ニシテ逃走スル者ヲ捕獲シ其功勞著シキ者  
三 監獄内ノ水火風震及ヒ流行病ニ付其功勞著シキ者  
四 自己ノ危難ヲ顧ミス在監人ノ性命ヲ救援シタル者

●第十五類

○救恤

●棄兒養育米下賜方

明治四年六月  
布告無號

從來棄兒救育ノ儀所預ノ分ハ養育米被下貰受人有之分ハ不被下候處自今預リ貰受ニ  
不拘棄兒當歲ヨリ十五歲迄年々米七斗宛被下候間實意養育可致事

●三子出產困窮ノ者へ養育料支給方

明治六年三月  
布告第七十九號

三子出產ノ者其家困窮ニテ孳養行届兼候向ハ以來養育料トシテ一時金五圓給與致シ  
候間地方官ニ於テ速ニ施行致シ追テ請取方大藏省へ可申出候事

●棄兒養育米下賜年限及年齡見定方

明治六年四月  
布告第三百二十八號

棄兒養育米ノ儀辛未六月中相達候通十五歲迄年々米七斗宛下渡候處自今滿十三年ヲ  
限リ被下候條生年月日見定ノ儀ハ其所戸長等立合身体骨格等篤ト検査シ本年第三十  
六號布告ニ照シ年齡相定候様可致事

但從前ノ棄兒ニテ今日ニ至リ出生年月檢定シ難キ分ハ一千支一年ノ割合ヲ以テ年  
齡通算可致事

●參照 明治六年  
二月十六號  
布告第三  
十六號  
自今年齡計  
儀幾年但舊  
數事ハ千支  
儀ハ一千支  
月數ハ本年  
ト通算シ年  
ナ以テ一年  
ト可致事



十八號但書刪

明治六年十月  
布告第三百四十  
號  
本年第三百三十八號  
棄兒養育米云々布  
告但書取消候條此  
旨布告候事

●棄兒養育米代金下渡

明治七年九月  
內務大藏兩省達乙第五十六號

棄兒養育米ノ儀正米無之節ハ貢納石代直段ヲ以テ代金渡可致旨壬申年大藏省第四十  
五號ヲ以テ相達候處自今正米無之節ハ其他前月下米平均相場ヲ以テ渡方可取計此旨  
相達候事

但本年十月一日ヨリ渡方本條ノ通可相心得事

●恤救規則

明治七年十二月  
舊太政官達第百六十二號

府 縣

濟貧恤窮ハ人民互ノ情誼ニ因テ其方法ヲ設ヘキ筈ニ候得共目下難差置無告ノ窮民ハ  
自今各地ノ遠近ニヨリ五十日以内ノ分左ノ規則ニ照シ取計置委曲內務省ヘ可伺出此  
旨相達候事

恤救規則

一極貧ノ者獨身ニテ癡疾ニ罹リ產業ヲ營ム能ハサル者ニハ一箇年米一石八斗ノ積ヲ  
以テ給與スヘシ

但獨身ニ非スト雖モ餘ノ家人七十一年以上十五年以下ニテ其身癡疾ニ罹リ窮迫ノ  
者ハ本文ニ準シ給與スヘシ

一同獨身ニテ七十一年以上ノ者重病或ハ老衰シテ產業ヲ營ム能ハサル者ニハ一箇年米  
一石八斗ノ積ヲ以テ給與スヘシ

但獨身ニ非スト雖モ餘ノ家人七十一年以上十五年以下ニテ其身重病或ハ老衰シテ  
窮迫ノ者ハ本文ニ準シ給與スヘシ

一同獨身ニテ疾病ニ罹リ產業ヲ營ム能ハサル者ニハ一日米(男ハ二合女ハ二合)ノ割  
ヲ以テ給與スヘシ

但獨身ニ非スト雖モ餘ノ家人七十一年以上十五年以下ニテ其身病ニ罹リ窮迫ノ者  
ハ本文ニ準シ給與スヘシ

一同獨身ニテ十三年以下ノ者ニハ一箇年米七斗ノ積ヲ以テ給與スヘシ  
但獨身ニ非スト雖モ餘ノ家人七十一年以上十五年以下ニテ其身窮迫ノ者ハ本文ニ  
準シ給與スヘシ

一救助米ハ該地前月ノ下米相場ヲ以テ石代下ケ渡スヘキ事

●窮民救助申請方

明治八年七月  
內務省達乙第八十五號

府 縣

窮民救助ノ儀ニ付テハ昨七年第百六十二號ヲ以テ御達ノ趣モ有之候處爾後右等ノ者



共救助申請ノ砌ハ左ノ箇條ニ照シ篤ト調査ノ上可伺出此旨心得トシテ相違候事

第一條 恤救規則ニヨル可キモノハ獨身老幼癱疾等ニテ何等ノ業モ爲ス能ハス事實赤貧ニシテ曾テ他ニ保育スル者モ無之全ク無告ノ窮民而已ニ限ルヘシ然ルニ唯年齡癱疾等ノ名義ニヨリ救助伺出ツル等ノ儀コレアリテハ恤救規則ノ趣旨ニモ乖戻可致ニ付假令七十以上又ハ癱疾ノ者タリトモ其業ニヨリテハ生産ノ道可相立者ナシトモサレハ篤ト現場ノ實況ヲ査定シ眞ニ不得已者而已具狀致スヘシ

第二條 同上ニヨリ是迄其市村内或ハ隣保ノ情誼ヨリ互ニ協救仕來ル如キハ別段官ノ給與ヲ乞ハサルヲ以本旨トスヘシ

第三條 同上ニヨリ互ニ協救スルト雖若シ其手當不足ニシテ其内幾分ヲ官ヨリ仰カサレハ補助スル等ノ能ハサル等ノ如キハ其幾分給助ノ次第及ヒ石數金員ニ至ル迄詳悉記載申出ヘシ

第四條 同上ニヨリ十三年以上七十年以下ノ者疾病中救助米賜ルト雖全快ノ期ヲ篤ト調査シ在昔支給等無之様注意イタスヘシ

第五條 同上ニヨリ疾病或ハ病者トノミ記載申請ノ向モ有之候得共爾後左ノ雛形ニ準シ詳悉記載別紙ニ製シ具申イタスヘシ  
但規則協書ニコレアル餘ノ家人アラハ本文雛形ニ記載スル本人名前ノ左傍ニ委

詳書記スヘシ

第六條 同上ニヨリ五十日以内給與シ申請ノ節何月幾日ヨリ何日分ト記載伺出ヘシ

第七條 同上ニヨリ伺濟ノ上其石割ヲ以給與セシムルハ勿論ナレト譬ハ一箇年一石八斗ヲ目途ニ立テ其以内ヲ以足レリトスルカ如キハ其數量實地至當ニ斟酌シ適宜ノ處分不苦候間其旨精細具狀イタスヘシ

第八條 老幼癱疾々病等ニテ獨身ニ非スト雖餘ノ家人七十年以上十五年以下タレハ本人ノミヘ獨身ニ準シ給與スヘキ成規ノ處若シ餘ノ家人癱疾疾病老幼ニテ事實難捨置情故アラハ其者共ヘモ救助セシムルコトアルヘキニ付其旨趣ヲ以具狀スヘシ併シ右様ノ場合ニオイト一家數人ノ救助ニ及フトキハ各自給與ヲ致サストモ其適度ニ斟酌シ可成丈減省ヲ見込ミ伺出可シ

用紙美濃紙

恤救名簿

某

縣府

(括弧内ハ朱書)

某縣下何大區何小區



某國某郡某村

農或ハ誰亡長男女歟  
工又ハ元何藩士族亡其父母兄弟姊妹ノ類  
商(當時平民歟其外厄介歟)

一癡疾

誰 何歳

但生來<sup>癡</sup>疾ニテ其名稱及ヒ年月日親戚或ハ市村内隣保等ノ情誼ヨリ助力ヲ受ケ  
シ處右不行届ノ次第又ハ醫ハ跋躓盲目ノ類ニテ手業ヲ以生計營ミ來リシカ終ニ  
爲ス能ハス去リ迎他ニ保養スヘキ者無之云々等其事實詳悉記載スヘシ何月何日  
ヨリ何ノタメ同斷事故同斷

肩書右ニ倣フ

一疾病

誰

但何年何月ヨリ何症ニ罹リ前同斷

何歳

同斷

一幼弱

誰

何歳

但何年何月ヨリ父母親戚等ニ離別ノ事故等前同斷

同斷

一老衰

誰

何歳

但前ニ倣フ

右ノ通有之候也  
何年何月日

府長官名印

●大赦令

明治二十二年二月  
勅令第十二號

朕憲法ヲ發布スルニ當リ此盛典ヲ表シ惠澤ヲ施サンカ爲ニ特ニ命シテ左ノ條項ニ依  
リ大赦ヲ行ハシム

- 第一條 本令發布以前ニ於テ左ノ罪ヲ犯シタル者ハ之ヲ赦免ス
- 一 刑法第一百七十七條第一百十九條ノ罪
- 二 刑法第二百一十一條第二百二十三條第二百二十五條第二百二十六條第二百二十七條ノ罪
- 三 刑法第二百二十九條第三百十條第三百一十一條第三百二十二條第三百二十三條第三百三十四條ノ罪



- 四 刑法第三百三十六條第三百七十七條第三百七十八條ノ罪
- 五 刑法第四百一十一條ノ罪
- 六 陸軍刑法第五十條第五十三條第五十四條第五十五條第五十六條第五十七條第五十八條第五十九條第六十條第六十一條第六十二條第六十三條第六十四條ノ罪
- 七 陸軍刑法第六十六條第六十七條ノ罪
- 八 陸軍刑法第六十九條第七十條第七十一條ノ罪
- 九 陸軍刑法第九十三條第九十四條ノ罪
- 十 陸軍刑法第九十九條第一百條ノ罪
- 十一 海軍刑法第五十六條第五十九條第六十條第六十一條第六十二條第六十三條第六十四條第六十五條第六十六條第六十七條第六十八條第六十九條第七十條第七十一條ノ罪
- 十二 海軍刑法第八十六條第八十七條ノ罪
- 十三 海軍刑法第一百條第一百一條ノ罪
- 十四 海軍刑法第一百十條第一百十一條ノ罪
- 十五 海軍刑法第二百二十六條ノ罪

- 十六 保安條例ノ罪
- 十七 集會條例ノ罪
- 十八 治安ヲ妨害スルノ目的ヲ以テ爆發物取締罰則ヲ犯ス罪
- 十九 新聞紙條例第二十一條第二十二條ニ違ヒ第三十條第三十一條ニ該ル罪及ヒ第三十二條ヲ犯ス罪但第三十條ニ該ル者ノ内風俗ヲ壞亂スルカ爲メ發賣頒布ヲ禁セラレタル新聞紙ヲ發賣頒布シタル者ハ赦免セス
- 政治ニ關スル意思ヲ以テ同條例第一條第三條ニ違ヒ第二十七條ニ該ル罪及ヒ第十六條第十七條第十八條ニ違ヒ第二十九條ニ該ル罪
- 二十 出版條例第十六條第十七條第十八條ニ違ヒ第二十七條ニ該ル罪及ヒ第二十四條ヲ犯ス罪但第二十七條ニ該ル者ノ内風俗ヲ壞亂スルカ爲メ發賣頒布ヲ禁セラレタル文書圖畫ヲ發賣頒布シタル者ハ赦免セス
- 政治ニ關スル意思ヲ以テ同條例第三條ニ違ヒ第二十一條ニ該ル罪第六條第七條ニ違ヒ第二十二條第二十三條ニ該ル罪及ヒ第十五條第十九條第二十條ニ違ヒ第二十七條ニ該ル罪
- 第二條 舊法ニ依リ處斷セラレタル罪ト雖モ其性質前條ニ記載シタル罪ト同一ナル者ハ之ヲ赦免ス



第三條 數罪俱發例ニ依リ處斷セラレタル者最重ノ罪赦免ヲ得タル場合ト雖モ他ノ罪ニ其効ヲ及ホサス

第四條 赦免ヲ得ルト雖モ既ニ徵收シタル罰金科料及ヒ沒收シタル物件ハ還付セス

第五條 陸軍大臣海軍大臣司法大臣ハ本令ノ施行ニ關シ必要ノ指揮ヲ爲ス可シ

●大赦施行手續

明治二十二年二月  
陸軍省訓令甲第二號

各師團及應府縣除東京府

勅令第十二號ニ依リ施行手續相定候條右手續ニ據リ施行ス可シ

大赦施行手續

第一條 勅令第十二號第一條ニ記載スル罪ヲ犯シタル者ハ既ニ判決ヲ經タルト否トナ問ハス又既ニ刑ノ執行ヲ終ハリタルト否トナ別タス總テ赦免ヲ得ル者トス

第二條 赦免ヲ得ヘキ罪ニ付キ刑ノ宣告ヲ受ケ其執行ヲ終ヘサル者衛戍監獄ニ在ルトキハ監獄長裁判宣告ヲ爲シタル軍法會議ヲ管轄スル師團長若クハ旅團長ニ申報シ陸軍裁判所若クハ軍團裁判所ニ於テ裁判宣告ヲ爲シタルモノハ第一師團長ニ申報ス可シ  
罰金ノ宣告ヲ受ケ未タ納完セサル者アルトキハ理事長官ノ認可ヲ得赦免ヲ得タル

旨ヲ本人ニ通知ス可シ

第三條 赦免ヲ得ヘキ者戍衛前監獄以外ノ監獄ニ在ルトキハ司獄官條ニ記載シタル長官ニ申報ス可シ

第四條 赦免ヲ得ヘキ者假出獄ヲ許サレ管内ニ在ルトキハ所屬隊長第二條ニ記載シタル長官ニ申報ス可シ

第五條 赦免ヲ得ヘキ罪ニ付キ監視若クハ特別監視執行中ノ者ハ執行地ノ警察官第二條ニ記載シタル長官ニ申報ス可シ

第六條 師團長旅團長前數條ニ記載シタル申報ヲ受ケタルトキハ理事ニ付シ其調査ヲ爲サシメ赦免ヲ得タルニ付キ釋放スヘキ旨ヲ通知ス可シ

第七條 赦免ヲ得ヘキ罪ニ付キ審問若クハ判決ニ著手中ノ者ハ陸軍治罪法ニ從ヒ免訴ノ處分ヲ爲ス可シ

第八條 數罪俱發例ニ依リ處斷セラレタル者若クハ數罪併科セラレ若クハ刑期限内再ヒ罪ヲ犯シ刑ノ宣告ヲ受ケタル者現ニ執行ヲ受ケタル罪ノ赦免ヲ得タルニ因リ更ニ赦免ヲ得サル罪ノ刑ヲ執行スヘキトキハ赦免ヲ得タル罪ニ付キ執行シタル刑ヲ通算ス

前項ノ場合ニ於テ更ニ執行スヘキ刑期金額裁判宣告書ニ疑點アルモノハ理事訴訟



書類及ヒ例證等ヲ調査シ長官ノ認可ヲ得刑期金額ヲ定ム可シ

第九條 勅令第十二號ニ照シ治安ヲ妨害スルノ目的ニ出テ若クハ政治ニ關スル意思ニ出テタル等ノ區別ヲ審辨スヘキ犯罪ニ付テハ理事發行シタル新聞紙又ハ出版シタル文書圖畫ノ性質其他裁判宣告書ニ記載シタル事實ノ摸樣ニ因リ之ヲ査定ス可シ

第十條 師團長旅團長大赦ノ施行ニ付キ疑議アルトキハ陸軍大臣ニ具狀シテ指揮ヲ請フ可シ

第十一條 遠隔ノ地ヨリ大臣長官ニ稟請若クハ申報ヲ爲シ及ヒ長官遠隔ノ地ニ通知スルトキハ電報ヲ用ユ可シ但電報ニテ事情ヲ悉クス能ハサルモノハ此限ニ在ラズ

第十二條 大赦施行ノ處分ヲ爲シタル者ハ第二條ニ記載シタル長官ニ申報ス可シ長官ハ之ヲ陸軍大臣ニ申報ス可シ

第十三條 赦免ヲ得ヘキ罪ニ付キ刑ノ言渡ヲ受ケ既ニ執行ヲ終ハリタル者ヨリ赦免ヲ得タルノ證明ヲ請フトキハ理事事實ヲ調査シ長官ノ認可ヲ得證明ヲ與フ可シ

●大赦ニ依リ赦免ヲ得ヘキ罪ニ付キ刑ノ宣告ヲ受ケ其執行ヲ終リシ者ニテ赦免ノ證明ヲ望ム者申出方

勅令第十二號ニ依リ赦免ヲ得ヘキ罪ニ付キ刑ノ宣告ヲ受ケ既ニ其執行ヲ終リタル者ニシテ赦免ヲ得タルノ證明ヲ得ント欲スルトキハ刑ノ宣告ヲ爲シタル軍法會議ノ理事ニ申出テ陸軍裁判所若クハ軍團裁判所ニ於テ其宣告ヲ受ケタル者ハ第一師管軍法會議ノ理事ニ申出ツ可シ

明治二十二年二月  
陸軍省告示第一號

●大赦ニ依リ赦免ヲ得ヘキ罪ニ付キ刑ノ宣告ヲ受ケ其執行ヲ終リシ者ニテ赦免ノ證明ヲ望ム者申出方

明治二十二年二月  
海軍省告示第三號

勅令第十二號ニ依リ赦免ヲ得ヘキ罪ニ付キ海軍法衙ニ於テ刑ノ宣告ヲ受ケ其執行ヲ終リタル者ニシテ赦免ヲ得タル旨ノ證明ヲ得ント欲スルトキハ横須賀鎮守府軍法會議ノ主理ニ申出ツヘシ

●大赦ニ依リ赦免ヲ得ヘキ罪ニ付キ刑ノ宣告ヲ受ケ其執行ヲ終リシ者ニテ赦免ノ證明ヲ望ム者申出方

明治二十二年二月  
司法省告示第二號



本年勅令第十二號ニ依リ赦免ヲ得ヘキ罪ニ付刑ノ言渡ヲ受ケ既ニ其執行ヲ終リタル者ニシテ赦免ヲ得タル旨ノ證明ヲ得ント欲スルトキハ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ申出ツヘシ

但明治十四年以前司法省佐賀、萩、九州、其他ノ臨時裁判所ニ於テ處斷ヲ受ケタル者ハ大審院檢察長ニ申出ツヘシ

○特赦表差出ニ及ハス特赦具申書記載方

明治十九年一月  
司法省達丁第二號

大審院 裁判所

明治十五年五月第三十二號達特赦表ハ自今具申書類ニ就キ本省於テ直ニ編纂候條昨十八年分ヨリ差出スニ及ハス此旨相達候事

但自今特赦具申ノ時々該囚徒氏名ノ頭上ニ其所在監名(何府縣何監獄)ヲ附記スヘシ

○迷兒ハ棄兒ニ準シテ取扱ヒ家元發見スルモ費用辨償

ノ資力ナキトキハ養育費ヨリ支辨セシム

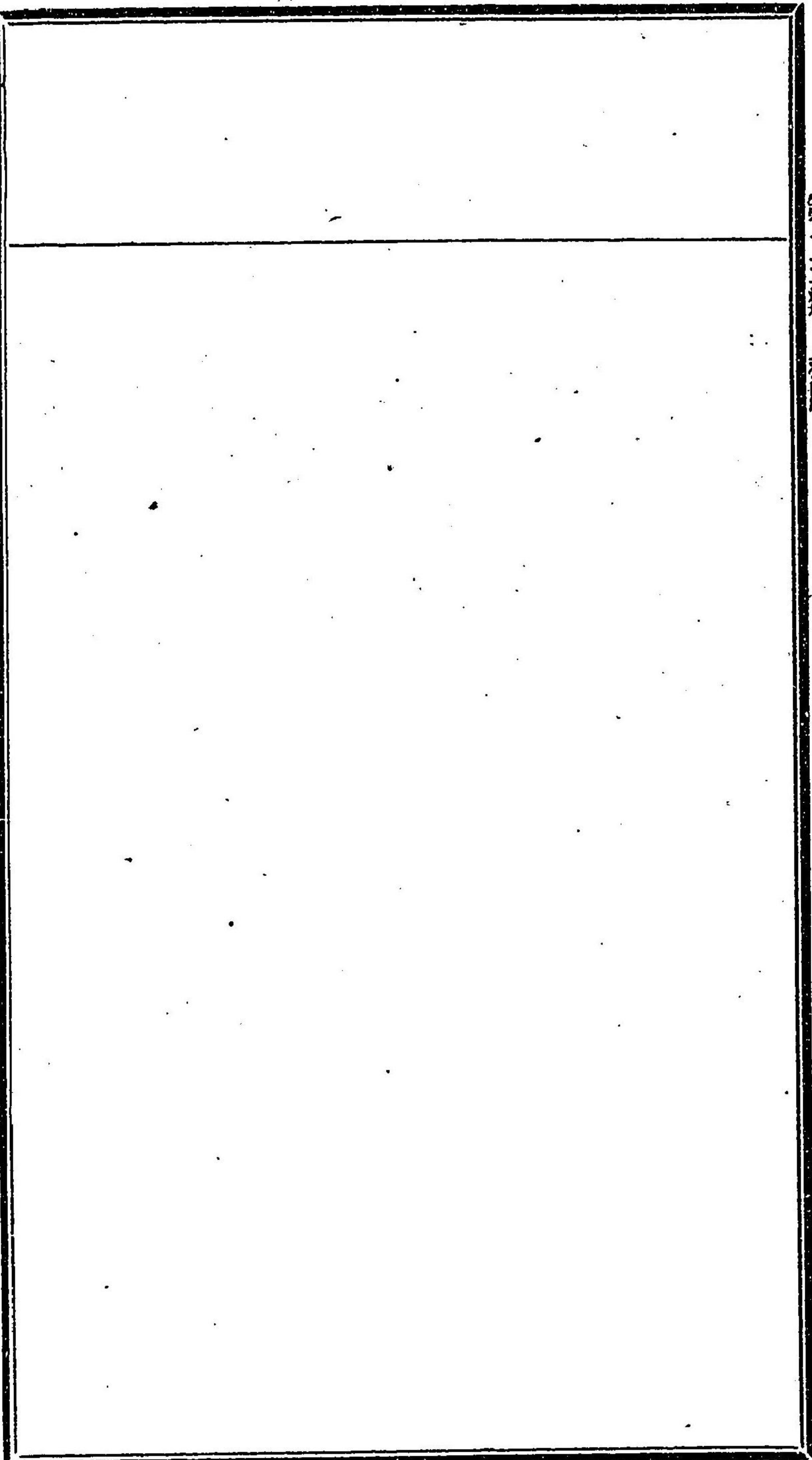
明治二十二年二月  
内務省訓令第五號

迷兒ハ棄兒ニ準シテ取扱ヒ家元發見シ若シ其費用辨償ノ資力ナキトキハ養育費ヨリ支辨スヘシ

北海道廳 府縣

但本文ニ抵觸スル從前ノ指令等ハ取消ス





第十六類 公文

●伺請訓

○公文

●公文式

明治十九年二月 勅令第一號

朕法律命令ノ格式ヲ制定スルノ必要ヲ認メ茲ニ公文式ヲ裁可シ之ヲ公布セシム  
公文式

第一 法律命令

第一條 法律勅令ハ上諭ヲ以テ之ヲ公布ス

法律ノ元老院ノ議ヲ經ルヲ要スルモノハ舊ニ依ル

第二條 法律勅令ハ内閣ニ於テ起草シ又ハ各省大臣案ヲ具ヘテ内閣ニ提出シ總テ内

閣總理大臣ヨリ上奏裁可ヲ請フ

第三條 法律勅令ハ親署ノ後御璽ヲ鈐シ内閣總理大臣之ニ副署シ年月日ヲ記入ス其

各省主任ノ事務ニ屬スルモノハ内閣總理大臣及主任大臣之ニ副署ス

第四條 内閣總理大臣及各省大臣ハ法律勅令ノ範圍内ニ於テ其職權若クハ特別ノ委

任ニ依リ法律勅令ヲ施行シ又ハ安寧秩序ヲ保持スル爲メニ閣令又ハ省令ヲ發スル

コトヲ得

第五條 閣令ハ内閣總理大臣之ヲ發シ省令ハ各省大臣之ヲ發ス

●公文式第三  
條改正  
明治二十二年  
勅令第三百十  
九號  
朕公文式改正ノ  
件ヲ裁可シ茲ニ之  
ヲ公布セシム  
公文式第三條左ノ  
一級ノ行政ニ係ル



勅令ハ親署ノ後御  
大任年日ヲ俱ニ入  
之ニ副署ス其各省  
専任ノ事務ニ關ス  
ルモノハ主任大臣  
ニ署名ス  
年日ヲ記入シ之  
ニ署名ス

第六條 閣令ハ年月日ヲ記入シ内閣總理大臣之ニ署名ス

第七條 省令ハ年月日ヲ記入シ主任大臣之ニ署名ス

第八條 各官廳一般ニ關スル規則ハ内閣總理大臣之ヲ定メ各廳處務細則ハ其主任大臣之ヲ定ム

第九條 内閣總理大臣及各省大臣ノ所轄官吏及其監督ニ屬スル官吏ニ達スル訓令モ亦第六條第七條ノ例ニ依ル

第二 布告

第十條 凡ソ法律命令ハ官報ヲ以テ布告シ官報各府縣應到達日數ノ後七日ヲ以テ施行ノ期限トナス但官報到達日數ハ明治十六年五月二十六日第十四號布達ニ依ル

第十一條 天災時變ニ依リ官報到達日數内ニ到達セサルトキハ其到達ノ翌日ヨリ起算ス

第十二條 北海道及沖繩縣ハ官報到達日數ヲ定メス現ニ道廳又ハ縣廳ニ到達シタル翌日ヨリ起算ス

島地ハ所轄郡役所ニ官報ノ到達シタル翌日ヨリ起算ス

第十三條 法律命令ノ發布ノ當日ヨリ施行セシムルコトヲ要シ又ハ特ニ施行ノ日ヲ掲ケタルモノハ第十條第十一條第十二條ノ例ニ依ラス

第三 印璽

第十四條 國璽御璽ハ内大臣之ヲ尙藏ス

國璽御璽ハ親署ノ後内大臣之ヲ鈐ス

第十五條 法律勅令ハ親署ノ後御璽ヲ鈐ス

第十六條 國書條約批准外國派遣官吏委任狀在留各國領事證認狀及三等以上勳章ノ勳記ハ親署ノ後國璽ヲ鈐ス

四等以下勳章ノ勳記ハ國璽ヲ鈐ス

第十七條 勅任官ノ任命ハ其辭令書ニ御璽ヲ鈐シ奏任官ノ任命ハ其奏騰書ニ御璽ヲ鈐ス

●北海道ニ施行セサル法律規則從前ノ通

明治十五年二月 布告第九號

今般北海道ニ函館札幌根室ノ三縣ヲ被置候處法律規則ノ從前北海道ニ施行セサルモノハ當分ノ内仍ホ從前ノ通タルヘシ

●官報到達日數

明治十六年五月 舊太政官達第十四號

今般第十七號ヲ以テ布告達施行ヲ改定シタルニ付到達日數左ノ通之ヲ定ム

●參照  
明治十九年一月第  
一號ヲ以テ三縣ヲ  
廢シ北海道ニ置ク

●參照  
明治十六年五月布  
告第十七號ヲ以テ



從前令スル所ノ布告件ヲ改メ更ニ布告件ヲ施行期限ヲ定ム

到達日數	府縣	到達日數	府縣	到達日數	府縣
四日	京都府	四日	山口縣	四日	大坂府
即日	神奈川縣	即日	兵庫縣	四日	兵庫縣
十一日	長崎縣	新瀉縣	五日	五日	新瀉縣
即日	埼玉縣	群馬縣	即日	即日	群馬縣
即日	千葉縣	茨城縣	二日	二日	茨城縣
二日	栃木縣	三重縣	四日	四日	三重縣
三日	愛知縣	静岡縣	二日	二日	静岡縣
二日	山梨縣	滋賀縣	四日	四日	滋賀縣
四日	岐阜縣	長野縣	四日	四日	長野縣
五日	宮城縣	福島縣	四日	四日	福島縣
七日	岩手縣	青森縣	十日	十日	青森縣
五日	山形縣	秋田縣	八日	八日	秋田縣
八日	福井縣	石川縣	七日	七日	石川縣
六日	富山縣	鳥取縣	七日	七日	鳥取縣
八日	島根縣	岡山縣	六日	六日	岡山縣

廣島縣 七日 山口縣 八日  
 和歌山縣 六日 德島縣 六日  
 愛媛縣 九日 高知縣 八日  
 福岡縣 九日 大分縣 十一日  
 佐賀縣 十一日 熊本縣 十一日  
 宮崎縣 十一日 鹿兒島縣 十二日

但富山佐賀宮崎ノ三縣ハ開廳ノ日マテ舊管廳ノ到達日數ニ依ル  
 右布達候事

●官報到達日數追加 明治二十一年十二月 閣令第二十二號

官報到達日數奈良縣ハ大坂府ニ香川縣ハ愛媛縣ニ同シ

●府縣ノ事務稟請ヲ要セス處分シテ後報告スヘキ條件

明治十九年三月 內務省令第一號

府 縣 沖繩縣 除ケ

自今左ニ掲ル條件ハ稟請ヲ要セス處分シテ後報告スヘシ但報告期限ハ別ニ之ヲ定ム



- 一 恤救規則心得第八條一家數人救助ノ事
- 一 國縣道道幅取擴ノ事
- 一 社寺由緒アル地所建物處分ノ事
- 一 社寺創立再興等建設延期ノ事
- 一 地租改正以前ヨリ人民ノ埋葬シ來リタル官有墓地ヲ民有墓地ニ組替ル事
- 一 耕宅地ニ非サル民有地ヲ斃牛馬捨場ニ選定シ及之ヲ廢スル事
- 一 廢合神社跡地ヲ明治八年乙第百十三號達ニ準シ處分スル事
- 一 民設ノ用惡水路堤塘溜池井溝ヲ官有地ニ組換並ニ明治九年乙第八十一號達同十六年乙第四十五號達ニ依リ代地ヲ下ケ渡ス事
- 一 官有市街地ヲ明治十三年太政官第六號達ニ依リ公立小學校公立中學校公立專門學校敷地ニ附與スル事
- 一 人民ノ願ニ依リ土地建物ノ寄附ヲ許可シ其土地ヲ官有ニ組替ル事
- 一 官有ノ湖沼池等埋立ノ事
- 一 但工事ノ一町歩以上ニ涉ルモノハ此限ニアラス
- 一 素地相當代價ノ既定セル開墾地ヲ拂下ル事
- 一 但河川ノ寄洲川沿ニ係ル地所ハ此限ニアラス

- 一 土石砂利ヲ掘取及拂下ル事
  - 一 但修路治水ニ害アルヘキモノハ此限ニアラス
  - 一 地方税ノ經濟ニ於テ土地建物ヲ買上及拂下ル事
  - 一 阿片賣買特許藥舖鑑札下付ノ事
  - 一 阿片製造鑑札下付ノ事
  - 一 劇藥配伍ノ賣藥許否ノ事
  - 一 避病院開設ノ事
  - 一 檢疫委員設置ノ事
  - 一 養魚其他殖産ノ爲メ官有池沼ヲ貸渡ス事
  - 一 社寺境内一時貸下ノ事
  - 一 府縣官舎ノ内官宅警察署郡區役所等建築ノ事
- 上申規則改定
- 明治十九年四月  
陸軍省令乙第四十九號
- 明治九年三月達第四十一號達上申規則左ノ通改定ス
- 上申規則
- 第一條 鎮臺并各局麻長官ヨリ陸軍大臣へ進呈スル文書ヲ分テ「進」「伺」「願」ノ三種



トス

其一 「進」トハ可否ノ指令ヲ仰カス其事項ヲ陸軍大臣ニ上申シ本省ノ決議ニ係ル條件ニシテ其結文「申進候也」ト認ム

其二 「伺」トハ陸軍大臣ノ指令ヲ請フヘキ條件ニシテ其結文「相伺候也」ト認ム

其三 「願」トハ長官以下自己ノ身上ニ係ル事件ヲ陸軍大臣ニ上願スルモノニシテ其結文「奉願候也」ト認ム

第二條 「進」伺「ハ料紙美濃判野紙ヲ用ヒ副書ニ及ハス尤土地并家屋ノ圖面及金穀被服ニ係ル計算書等ハ二通差出スヘシ「願」ハ自用ノ野紙ヲ用ヒ副書ニ及ハス但結婚願書恩給願書等別段ノ定メアルモノハ此限リニアラス

第三條 「進」伺「願」ノ文書ハ本文ノ前行ニ二字下リニテ何々事件ノ大趣意ヲ摘記スノ儀ニ付申進「伺」願「ト記載スヘシ又書キ起シハ總テ前一行ノ餘白ヲ存シ置クヘシ

第四條 「進」伺「願」ノ文書ヲ進呈スルニ至急ノ事項ヲ除ク外東京ハ日々午後第一時迄ニ出スヘシ但土曜日ハ午前十時ヲ限リトス

第五條 「進」伺「願」ノ文書中至急ヲ要スル件ハ野紙欄外ニ「至急」ノ二字ヲ朱書ス可シ此等ノ文書ニハ至急ノ事由並着手ノ時日ヲ追書ニ副伸ス可シ尤各所管ノ不注意等ヨリ時日差迫リタルハ「至急」トスルノ限リニ非ス

●上申經伺事項ノ内並事務施行上照會手續等ノ項目

明治十九年三月 陸軍省達第四號

上申經伺事項之内並ニ事務施行上照會手續等左項目之通相心得可シ

一 陸軍省中各局主任ノ事務施行ニ就テハ其局長ヨリ大臣並總務局長ヘ書面之開申往復ノ事項ハ勿論上申經伺之事項モ可成丈ケ之ヲ省略シ口陳キ以テ相濟セ後證ヲ要スルモノハ其事由之箇條書ニ決印ヲ請フヘシ然レトモ金穀出納等別ニ方法アルモノハ此限リニアラス

一 各所管ニ於テモ其所轄内ノ事務ハ前項ニ準シ施行スヘシ

一 下士卒再役ハ其年度ニ於テ可聞届人員ヲ豫テ本省主任ノ局ヘ協議ヲ遂ケ其期ニ至リ所管長官限リ聞届其旨報告スヘシ但シ本省各局ノ下士ハ大臣ノ決ヲ請フヘシ

一 下士卒家事故障ニ依リ現役免除豫備役ニ編入或ハ歸休等ハ其所管長官ニ於テ事實調査ノ上決行スヘシ但シ下士ノ内砲工兵監護及諸工長并會計軍醫獸醫部下士等其本管アルモノハ其本管ニ於テ取計フヘシ

一 諸規則條例等質義ニ涉ル件其他事務施行上問合セニ係ル者ハ其主任局課長ヘ直ニ照會スヘシ其照會ヲ受ケタル主任課ニ於テ速ニ決答シ若シ照會ヲ受ケタル事務課長

●上申經伺事項ノ内並事務施行上照會手續等ノ項目

正 陸軍省令乙第百四十五號  
 三 明治十九年十月  
 三 陸軍省令乙第百四十五號  
 本 陸軍省令乙第百四十五號  
 左 陸軍省令乙第百四十五號  
 下 陸軍省令乙第百四十五號



度ニ於テ本官ノ職務ニ關シテ其ノ責任ヲ負フニ當リ其ノ職務ノ範圍外ニ涉ルモノハ局長ノ決ヲ乞ヒ又ハ其手續ヲ整理スヘシ  
一事務施行上各所管互ニ署名往復照會ヲ得ル職名ハ左ノ如シ  
總務局長 同次長 同課長 制規課長  
本省各局長 同次長 同課長 各官廳長次官  
一各所管ニ於テ所轄官吏轉職等之節赴任出發期日ニ至リ病氣事故等ニ依リ延期出願スルトキハ其長官限リ聞届其旨報告スヘシ  
但舊事務引繼等之爲メ不得止事故アリテ出發期日ヲ延ハスヘキトキハ舊所管ヨリ新所管ヘ協議之上取計フヘシ

●新ニ發スル省令訓令ト抵触スル從前ノ令達等ハ廢棄

トス 明治二十年七月 海軍省訓令第七十七號

海軍一般 北海道廳 府縣

省令ヲ發スルトキハ其發布前ニ發セルモノニシテ之ニ抵触スル省令訓令乙丙號達其他ノ諸達指令ハ總テ廢棄トス  
訓令ヲ發スルトキハ其發布前ニ發セルモノニシテ之ニ抵触スル訓令乙丙號達其他ノ

諸達指令ハ總テ廢棄トス

●公文、文書差出及番號點付方

明治二十一年十一月 海軍省達第三百二十五號

自今大臣親展書類ヲ除クノ外軍務局艦政局會計局ノ主務ニ屬スル事件ノ文書ハ主務各局ヲ經由シ差出シ其他ハ大臣官房ニ差出スヘシ  
所屬長ヨリ所管長官又ハ海軍大臣ニ差出ス公文及所管長官ヨリ海軍大臣ニ差出ス文書ニハ大臣親展書類ヲ除クノ外總テ一貫ノ番號ヲ付スヘシ又所管長官其部下ノ長ヨリ差出ス書面ヲ取次クトキ其應ニ於テ番號ヲ點付スヘカラス

●大藏省ノ主務ニ關スル廳府縣令ハ發布ノ都度報告セ

シム 明治二十一年一月 大藏省訓令第三號

當省ノ主務ニ關係アル廳府縣令ハ今後發布ノ都度當省ニ報告スヘシ

●法律布令ノ質問

明治十三年六月 舊太政官達第三十五號

官省院使

明治十年十月第七十五號ヲ以テ法律布令上疑問ノ儀相達置候處右ハ相廢シ今般更ニ左



ノ通相定候條此旨相達候事

一法律布令上疑義アルトキハ其旨趣ヲ詳記シ該長官ヨリ法制部ニ質問スヘシ

一各府縣ヨリ各廳ニ伺出タル事件前項ノ疑義ニ屬スルモノハ法制部ニ移牒シ其回答ヲ得テ後チ指令スヘシ

但既ニ回答ヲ得タルモノト同一ノ事件ハ更ニ移牒スルニ及ハスト雖モ苟モ異義ニ涉ルモノハ必ス移牒スヘシ

●法律布令執行上疑義

明治十三年六月 舊太政官達第三十六號

府 縣

明治十年<sup>十</sup>第七十號達相廢候條自今法律布令執行上疑義アルトキハ其主管ノ上司ニ伺出ヘシ此旨相達候事

但別紙ノ通官省院使ニ相達候條此旨心得ヘシ

●法律布令上疑問ノ件

明治十三年十月 司法省達丁第十九號

各檢事

法律布令上疑問ノ儀ニ付別紙ノ通御達有之候條此旨可相心得事 (別紙)

法律布令疑問ノ儀ニ付檢事ヨリ伺出タルモノハ各府縣ヨリ伺出タルモノト同様ニ可取計此旨相達候事 司法省

●内訓條例

明治十四年六月 司法省達丙第十九號

警視廳府縣

内訓條例別紙ノ通大審院諸裁判所ニ相達置候處其(廳府縣)ニ於テモ法律上ノ疑義ニ付テハ該達ニ照依シ内訓ヲ請フコトヲ得ヘシ此旨相達候事 (別紙)

大審院長諸裁判所長各檢事

今般内訓條例別紙ノ通相定候條此旨及内達候事 内訓條例

第一條 凡内訓ハ司法卿ト各裁判所<sup>裁判官</sup>トノ間ニ於テ用フル所ノ内規ニシテ專ラ情實疎通事理伸暢ノ爲ニ設クルモノナリ故ニ此條例ニ從フモノハ尋常伺指令ノ効力アラサルモノトス

但伺指令ハ各其職務ノ權限ニヨリ發令スルモノナリ該條例ハ職權ニ不拘唯其注



意ヲ要スル爲ニ發スルモノナルニヨリ必シモ准據セサルヘカラサルノ効力アラ  
ストス

第二條 凡民刑上疑問疑獄且裁判百般ノ事情其注意ヲ要スルモノハ總テ此條例ニ從  
フ可シ

第三條 凡此條例ニ從テ裁判所ヨリ司法卿ニ請フモノハ末文内訓ヲ請フト書シ尋常  
伺文ニ殊別スヘシ

第四條 凡此條例ニ從テ司法卿ヨリ各裁判所ヘ致スモノハ末文内訓ニ及ト書シ尋常  
ノ指令ニ殊別ス

第五條 凡裁判所ニ於テ尋常ノ伺トシテ出スモノト雖モ司法卿ニ於テ内訓トナスヘ  
ク見込ムトキハ末文内訓ニ及トシ又内訓ヲ請フトシテ出スモ指令トナスヘシト見  
込ムトキハ末文指令ニ及トナシ還付ス必シモ原文ヲ改作セシムルヲ要セス簡便ニ  
從フテ以テ旨トスレハナリ

第六條 内訓ハ指令ノ効力ナシト雖モ其從フヘカラサルモノハ其事理ヲ詳悉シ再ヒ  
之ヲ請ヒ反覆數回妨ケナキヲ以テ其定ムル所ヲ待ツヘシ亦事理申暢ノ意ナリ

●諸伺上申請訓書等ハ副本ヲ差出スニ及ハス

明治二十一年九月  
閣令第十六號

各官廳

諸伺上申請訓書等ハ自今副本ヲ差出スニ及ハス

●刑法中官廳、官署及官吏等ヲ公署公吏等ニ適用

明治二十三年十月  
法律第百號

朕公署、公吏並公署ノ印、文書及免狀鑑札ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此  
法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス  
刑法中官廳、官署ニ關スル條項ハ公署ニ適用シ官吏ニ關スル條項ハ公吏ニ適用シ官  
ノ印、文書及免狀、鑑札ニ關スル條項ハ公署ノ印、文書及免狀鑑札ニ適用ス

●法例 明治二十三年十月  
法律第九十七號

朕法例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行スヘキ  
コトヲ命ス

法例

第一條 法律ハ公布アリタル日ヨリ滿二十日ノ後ハ之ヲ遵守ス可キモノトス但法律

本項ハ誤植ニ付更  
ニ第五十一類刑事  
ノ部ニ掲出ス



ニ特別ノ規定アルモノハ此限ニ在ラス  
 第二條 法律ハ既往ニ遡ル效力ヲ有セス  
 第三條 人ノ身分及ヒ能力ハ其本國法ニ從フ  
 親屬ノ關係及ヒ其關係ヨリ生スル權利義務ニ付テモ亦同シ  
 第四條 動産不動産ハ其所在地ノ法律ニ從フ  
 然レトモ相續及ヒ遺贈ニ付テハ被相續人及ヒ遺贈者ノ本國法ニ從フ  
 第五條 外國ニ於テ爲シタル合意ニ付テハ當事者ノ明示又ハ默示ノ意思ニ從ヒテ何  
 レノ國ノ法律ヲ適用ス可キヤヲ定ム  
 當事者ノ意思分明ナラサル場合ニ於テハ同國人ナルトキハ其本國法ヲ適用シ又同  
 國人ニ非サルトキハ事實上合意ニ最大ノ關係ヲ有スル地ノ法律ヲ適用ス  
 第六條 外國人カ日本ニ於テ日本人ト合意ヲ爲ストキハ外國人ノ能力ニ付テハ其本  
 國法ト日本法トノ中ニテ合意ノ成立ニ最モ有益ナル法律ヲ適用ス  
 第七條 不當ノ利得、不正ノ損害及ヒ法律上ノ管理ハ其原因ノ生シタル地ノ法律ニ  
 從フ  
 第八條 本國法ヲ適用ス可キ諸般ノ場合ニ於テ何レノ國民分限ヲモ有セサル者又ハ  
 地方ニ依リ法律ヲ異ニスル國ノ人民ハ其住所ノ法律ニ從フ若シ住所知レサルトキ

ハ其居所ノ法律ニ從フ  
 日本人ト外國人トノ分限ヲ有スル者ハ日本法律ニ從ヒ又ニ簡以上ノ外國國民分限  
 ヲ有スル者ハ最後ニ之ヲ取得シタル國ノ法律ニ從フ  
 第九條 公正證書及ヒ私署證書ノ方式ハ之ヲ作ル國ノ法律ニ從フ但一人又ハ同國人  
 ナル數人ノ作ル私署證書ニ付テハ其本國法ニ從フコトヲ得  
 第十條 要式ノ合意又ハ行爲ト雖モ之ヲ爲ス國ノ方式ニ從フトキハ方式上有效トス  
 但故意ヲ以テ日本法律ヲ脱シタルトキハ此限ニ在ラス  
 第十一條 外國ニ於テ其國ノ方式ニ依リテ作リタル證書ハ不動産物權ヲ移轉スル行  
 爲ニ係ルトキハ其不動産所在地ノ地方裁判所長又他ノ行爲ニ係ルトキハ當事者ノ  
 住所又ハ居所ノ地方裁判所長其證書ノ適法ナルコトヲ檢認シタル上ニ非サレハ日  
 本ニ於テ其効用ヲ致サシムルコトヲ得ス  
 第十二條 第三者ノ利益ノ爲メニ設定スル公示ノ方式ハ不動産ニ係ルトキハ其所在  
 地ノ法律、他ノ場合ニ於テハ其原因ノ生シタル國ノ法律ニ從フ  
 第十三條 訴訟手續ハ其訴訟ヲ爲ス國ノ法律ニ從フ  
 裁判及ヒ合意ノ執行方法ハ其執行ヲ爲ス國ノ法律ニ從フ  
 第十四條 刑法其他公法ノ事項ニ關シ及ヒ公ノ秩序又ハ善良ノ風俗ニ關スルトキ



ハ行爲ノ地、當事者ノ國民分限及ヒ財産ノ性質ノ如何ヲ問ハス日本法律ヲ適用ス  
 第十五條 公ノ秩序又ハ善良ノ風俗ニ關スル法律ニ牴觸シ又ハ其適用ヲ免カレント  
 スル合意又ハ行爲ハ不成立トス  
 第十六條 身分又ハ能力ヲ規定スル法律ヲ免カレ、合意又ハ行爲ハ無効トス  
 第十七條 判事ハ法律ニ不明、不備又ハ欠缺アルヲ口實トシテ裁判ヲ爲スヲ拒絕ス  
 ルコトヲ得ス

明治十八年三月  
 内閣達第七十六號  
 ナ以テ文書局ヲ廢  
 シ官報局ヲ置ク

●明治十六年  
 官報發行ニ付  
 心得條件第四  
 條ハ但書追加  
 明治十八年  
 五月  
 舊太政官達第  
 十九號  
 官省院府縣

明治十六年五月  
 官省院府縣  
 第二十二號達第四  
 條ハ左ノ但書追加  
 候條此旨相違候事  
 者ハ其代價ヲ本官  
 廳ニ前納シ本官廳  
 ハ之ヲ逕遞局ニ送  
 付スヘシ  
 ●明治十六年  
 太政官第二十  
 二號及十八年  
 第十九號(官  
 報發行條件)

第十七類

官報

官報發行

明治十六年五月  
 舊太政官達第二十二號

官省院府縣

今般太政官ニ於テ官報ヲ發行候ニ付左ノ條件相違候但シ發行ノ期日ハ追テ可相違事  
 第一條 太政官中ニ文書局ヲ置キ官報編輯ノ事ヲ管掌セシム  
 第二條 官報ハ別紙ニ記シタル事項ヲ掲載スヘキニ付各官廳ニ於テ主任ヲ定メ官報  
 ニ掲載スヘキ書類ヲ取纏メ文書局ニ當テ送付スヘシ  
 第三條 各般ノ事項一時ニ掲載スルコト能ハサルトキハ其緩急ヲ量リ順次ニ掲載シ  
 其大部ニ渉ル者ハ數日ニ分載スル等都テ文書局長ノ意見ニ任ス  
 第四條 官報ハ別記定價ヲ以テ逕遞局ニ於テ發賣セシムルニ付直チニ同局ニ就テ購  
 求スヘシ  
 第五條 各官廳ノ廣告ハ官報ヲ以テスヘシ但シ東京ヲ除キ其他ノ地方ハ本條ノ例ニ  
 依ラサルコトヲ得  
 第六條 官廳ノ廣告其官報ヲ以テスルノ外同時他ノ新聞紙ニ掲載スルハ各官廳ノ便



第四條及但書  
中ヲ改ム

明治十九年  
六月  
內閣令第十七號

明治十六年(五月)  
各省廳  
太政官第二十二號  
達第四條及明治十九  
八年(五月)第十九  
號達同但書中縣選  
局ヲ官報局ト改ム

明治十六年  
太政官第二十二號  
行條件(官報發  
七條中更正

明治十八年  
十二月  
內閣達第八十號

明治十六年(五月)  
各省廳  
太政官第二十二號  
達中左  
ノ通更正ス、第七  
條第一項警察署ノ  
下ニ郡區役所ノ

宜ニ任ス但其官報ヲ以テスル者ハ廣告料ヲ要セス  
第七條、左ニ掲クル者ハ官報ヲ購讀スヘキ義務ヲ有スルモノトス但各官廳ハ其定額  
ヲ以テ購求スヘシ

第一

省院廳府縣裁判所警察署  
參謀本部監軍本部鎮臺營所鎮守府憲兵本部及屯署  
官立學校

第二

上長官以上ノ武官奏任以上ノ文官及郡區長

官報

一 詔勅

二 賞勳

三 叙任

四 官令

布告

布達

四字ヲ加ヘ同第二  
項中「及郡區長」ノ  
四字ヲ刪ル

明治十六年  
太政官第二十二號  
行條件(官報發  
二號(官報發  
行條件)達中  
官報定價ノ項  
ニ但書追加

明治十八年  
十二月  
內閣達第七十號

明治十六年(五月)  
各省廳  
太政官第二十二號  
達中官報定價ノ項  
ニ左ノ但書ヲ追加  
ス、但一箇月分定  
價金七十五錢

明治二十一年  
十二月二十七  
日  
內閣訓令第幾號  
各官廳

明治十六年(五月)  
各省廳  
太政官第二十二號  
達官報定價ハ明治

五 達 公示ヲ妨ケサル官省院廳及東京府ノ達

六 告示 官省院廳及東京府ノ告示

七 官廳廣告

八 雜件

行幸行啓觀謁

參事院回答並審理

諸官廳伺指令

軍艦出入

官吏轉職出入等

雜事

九 外報

公使領事報告

外國新聞抄譯

十 說明正誤

學藝教育ニ關スル事項

十二 農工商業及山林ニ關スル事項



二十二年一月ヨリ  
一箇月金五拾錢一  
部金貳錢ト改ム

- 十三 統計報告
  - 十四 氣象報告
  - 十五 汽船出入
  - 十六 廣告
- 官報定價  
一壹部定價 配達郵送  
金三錢

●官報發行期日ヲ定ム

明治十六年六月  
舊太政官達第二十七號

官省院廳府縣

官報本年七月一日ヨリ發行候條此旨相達候事

●官報ニ記載ノ節目ハ官報局長ノ斟酌ニ任ス

明治十六年六月  
舊太政官達第二十九號

官省院廳府縣

本年五月第二十二號達中官報ニ記載スヘキ事項ハ其概目ヲ示スモノニ付實際施行ニ臨  
ミ其欄次節目ハ總テ文書局長ノ斟酌ニ任ス此旨相達候事

●明治十八年  
第十八號(銀  
行會社報告類  
官報ニ登載)  
布達中驛遞總  
官ヲ官報局長  
ト改ム

明治十九年  
六月  
關令第十八  
號  
明治十八年(八月)  
太政官第十八號布  
達中驛遞總官ヲ官  
報局長ト改ム

●銀行會社ノ報告類ニシテ法律規則若クハ其定款ニ  
因リ廣告ヲ要スルモノハ自今官報ニ掲載ヲ請フコ  
トヲ得

明治十八年八月  
舊太政官布達第十八號

銀行會社等ノ報告類ニシテ法律規則若クハ其定款ニ因リ廣告ヲ要スルモノハ自今官  
報ニ掲載ヲ請フコトヲ得但其取扱手續ハ驛遞總官ヨリ公告スヘシ

●官報登載ノ件各新聞ニ抄錄方

明治十六年六月  
舊太政官布達第二十一號

凡ソ官報ニ登載シタルモノハ新聞紙條例ニ依リ記載スルコトヲ得サル者ト雖モ各新  
聞紙ニ於テ其文ヲ抄錄スルコトヲ得  
官報ニ於テ新聞紙ニ記載シタル事項ノ誤ヲ正ストキハ新聞紙條例第二十九條ニ從ヒ  
正誤ノ全文ヲ登載スヘシ

●各廳官報ノ報告主任官ヲ精選セシム

明治十八年十二月  
內閣達第八十一號

省院廳府縣

官報ノ報告ヲ敏速精確ナラシムル爲メ其報告主任官ヲ精選シ常ニ官報局ト氣脈ヲ相



通シ事務ノ利便ヲ計ルヘシ

●官報購讀ノ義務ヲ有スル官吏官報代價納付方改定

明治二十三年三月  
內閣訓令第三號

各官廳

官報購讀ノ義務ヲ有スル官吏ニシテ官報局ヨリ直買スル官報ノ代價ハ從來所管ノ官廳へ前納ノ手續ノ處來ル四月一日以降ハ前月中ニ一箇月分ヲ(數月分ノ代價ヲ前納スルハ隨處トス)官報局へ納付スヘシ若シ之ヲ怠ル者アルトキハ官報局長直ニ其旨ヲ所管ノ長官ニ通知スヘシ

●官報賣捌代價送納取扱手續

明治十九年六月  
司法省訓令第八號

裁判所

官報賣捌代送納手續左ノ通取扱フモノトス

右訓令ス

一各官廳ニ於テ購讀スル官報代價ハ仕拂切符又ハ送金手形ヲ以テ東京郵便局へ送付スルモノトス

●官報賣捌代價送納手續中  
東京郵便局ヲ改ム  
官報局ト改ム  
明治十九年七月  
司法省訓令第十二號  
裁判所  
本年六月當省訓令第八號中(東京郵便局ト改ム)官報局ト改ム

一各官廳ニ於テ官報購讀義務者ヨリ前納スル該代價ハ所在國庫金取扱所へ預ケ入レ其預リ證書ヲ東京郵便局へ送付スルモノトス  
一前項官報購讀義務者ヨリ納付スルノ順序ハ各廳ニ於テ便宜徵收ノ方法ヲ定ムヘシ

●官報代ハ各控訴院ニ取纏メ送納セシム

明治十九年八月  
司法省令第十八號

裁判所

官報代ノ儀ハ當省訓令第八號ノ手續ヲ以テ取扱各控訴院ニ於テ取纏メ該院ヨリ官報局へ送納スル儀ト心得可シ

●官報賣捌代價送納方法

明治十九年六月  
遞信省令第十一號

北海道廳 府縣

官報賣捌代價送納ノ方法左ノ通相定ム  
一各官廳ニ於テ購讀スル官報代價ハ仕拂切符又ハ送金手形ヲ以テ東京郵便局へ送付スルモノトス  
一各官廳ニ於テ官報購讀義務者ヨリ前納スル該代價ハ所在國庫金取扱所へ預ケ入レ



其預リ證書ヲ東京郵便局へ送付スルモノトス  
一前項官報購讀義務者ヨリ納付スルノ順序ハ各廳ニ於テ便宜徵收ノ方法ヲ定ムヘシ

○第十八類

○曆

●年號改元ノ詔勅

明治元年  
九月八日

今般御即位御大禮被爲濟先例之通被爲改年號候就而ハ是迄吉凶之象兆ニ隨ヒ屢改號有之候得共自今御一代一號ニ被定候依之改慶應四年可爲明治元年旨被仰出候事  
詔體太乙而登位曆景命以改元洵聖代之典型而萬世之標準也朕雖否德幸賴祖宗之靈祇承鴻緒躬親萬機之政乃改元欲與海內億兆更始一新其改慶應四年爲明治元年自今以後革易舊制一世一元以爲永式主者施行

戊辰九月八日

●頒曆授時

明治二年  
四月

頒曆授時之儀ハ至重之典章ニ候處近來種々之類曆世上ニ流布候趣無謂事ニ候自今弘曆之外取扱候儀一切嚴禁被仰出候事

●改曆

明治五年十一月  
布告第三百三十七號



今般改曆ノ儀別紙 詔書ノ通被 仰出候條此旨相違候事

(別紙)

詔書寫

朕惟フニ我邦通行ノ曆タル太陰ノ朔望ヲ以テ月ヲ立テ太陽ノ躔度ニ合ス故ニ二三年間必ス閏月ヲ置カサルヲ得ス置閏ノ前後時ニ季候ノ早晚アリ終ニ推歩ノ差ヲ生スルニ至ル殊ニ中下段ニ掲ル所ノ如キハ率子妄誕無稽ニ屬シ人智ノ開達ヲ妨ルモノ少ナシトセス蓋シ太陽曆ハ太陽ノ躔度ニ從テ月ヲ立ツ日子多少ノ異アリト雖モ季候早晚ノ變ナク四歲毎ニ一日ノ閏ヲ置キ七千年ノ後僅ニ一日ノ差ヲ生スルニ過キス之ヲ太陰曆ニ比スレハ最モ精密ニシテ其便不便モ固ヨリ論ヲ俟タサルナリ依テ自今舊曆ヲ廢シ太陽曆ヲ用ヒ天下永世之ヲ遵行セシメノ百官有司其レ斯旨ヲ體セヨ

明治五年壬申十一月九日

一 今般太陰曆ヲ廢シ太陽曆御頒行相成候ニ付來ル十二月三日ヲ以テ明治六年一月一日ト被定候事

但新曆鏤板出來次第頒布候事

一 一ヶ年三百六十五日十二ヶ月ニ分テ四年毎ニ一日ノ閏ヲ置候事

一 時刻ノ儀是迄晝夜長短ニ隨ヒ十二時ニ相分テ候處今後改テ時辰儀時刻晝夜平分

二十四時ニ定メ子刻ヨリ午刻迄ヲ十二時ニ分テ午前幾時ト稱シ午刻ヨリ子刻迄ヲ十二時ニ分テ午後幾時ト稱候事

一 時鐘ノ儀來ル一月一日ヨリ右時刻ニ可改事

但是迄時辰儀時刻ヲ何字ト唱來候處以後何時ト可稱事

一 諸祭典等舊曆月日ヲ新曆月日ニ相當シ施行可致事

一月大	三十一日	其一日	同	閏年三百六十六日	四年毎ニ置之	十二月三日
二月小	二十八日	其一日	同	即舊曆壬申		正月四日
三月大	三十一日	其一日	同	癸酉		二月三日
四月小	三十日	其一日	同			三月五日
五月大	三十一日	其一日	同			四月七日
六月小	三十日	其一日	同			五月九日
七月大	三十一日	其一日	同			六月十一日
八月大	三十一日	其一日	同			閏六月九日
九月小	三十日	其一日	同			七月十日
十月大	三十一日	其一日	同			八月十日



十一月小 三十日 其一日 同 九月十二日  
 十二月大 三十一日 其一日 同 十月十二日

大小毎年替ルヲナシ

時刻表

午前		午後	
零時 <small>即午後十二時</small>	子半刻	一時	午半刻
四時	寅半刻	二時	未刻
八時	辰半刻	三時	未半刻
十二時	午刻	四時	申刻
		五時	申半刻
		六時	酉刻
		七時	酉半刻
		八時	戌刻
		九時	戌半刻
		十時	亥刻
		十一時	亥半刻
		十二時	子刻

右之通被定候事

●本曆略曆出版ノ件

明治十五年四月 舊太政官達第八號

本曆并略本曆ハ明治十六年曆ヨリ伊勢神宮ニ於テ頒布セシムヘシ  
 一枚摺略曆ハ明治十六年曆ヨリ何人ニ限ラス出版條例ニ準據シ出版スルコトヲ得  
 但明治九年十月内務省甲三拾九號布達ハ取消ス  
 右布達候事

●本初子午線經度計算方及標準時ヲ定ム

明治十九年七月 勅令第五十一號

朕本初子午線經度計算方及標準時ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
 一英國グリニツヤ天文臺子午儀ノ中心ヲ經過スル子午線ヲ以テ經度ノ本初子午線トス  
 一經度ハ本初子午線ヨリ起算シ東西各百八十度ニ至リ東經ヲ正トシ西經ヲ負トス  
 一明治二十一年一月一日ヨリ東經百三十五度ノ子午線ノ時ヲ以テ本邦一般ノ標準時ト定ム

●天象觀測及曆書調製管理替

明治二十一年十二月 勅令第八十一號

朕天象觀測及曆書調製ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム



天象觀測及曆書調製ハ自今文部大臣ヲシテ之ヲ管理セシム

●艦船航海中當朝直士官ヲシテ正午ノ經緯度ヲ測定セ

シム 明治二十三年二月

海軍省達第五十四號

艦船航海中朝直ニ當レル士官ハ正午ノ經緯度ヲ測定シ艦長ノ查閱ヲ受クヘシ  
前項ノ用ニ供スル測器ハ艦船備附定數内ノモノトス但供用中ハ航海長ニアラサル先  
任尉官ヲシテ保管ノ責ニ任セシム可シ

●第十九類

○休暇

●五節句ヲ廢シテ祝日ヲ定ム

明治六年一月  
布告第一號

今般改曆ニ付人日上巳端午七夕重陽ノ五節ヲ廢シ神武天皇即位日天長節ノ兩日ヲ以  
テ自今祝日ト被定候事

(參照)明治六年三月布告第九十一號

神武天皇御即位日紀元節ト被稱候事

●休暇日制定

明治六年一月  
布告第二號

自今休暇左ノ通被定候事

一月一日ヨリ三日迄

六月二十八日ヨリ三十日迄十二月二十九日ヨリ三十一日迄

毎月休暇是迄ノ通

但大ノ月三十一日ハ休暇ニ非ス



明治六年六月布告第二百二十一號  
本年第二號布告ノ内六月二十八日ヨリ三十日迄ノ休暇ハ取消シ候事  
明治九年三月達第二十七號(太政官)

院省使廳府縣  
從前一六日休暇ノ處來ル四月ヨリ日曜日ヲ以テ休暇ト被定候條此旨相達候事  
但土曜日ハ正午十二時ヨリ休暇タルヘキ事

●官員父母祭日賜暇  
明治六年九月  
達第三百十八號(太政官)

省使府縣

諸官員父母ノ祭日ニハ休暇ヲ賜リ候此旨相達候事

●祭日祝日ノ休暇日

明治六年十月  
布告第三百四十四號

年中祭日祝日等ノ休暇日左ノ通候條此旨布告候事

- 元始祭 一月三日
- 新年宴會 一月五日
- 孝明天皇祭 一月二十日

紀元節

二月十一日

神武天皇祭

四月三日

神嘗祭

九月十七日

天長節

十一月三日

新嘗祭

十一月廿三日

明治十一年六月達第二十三號(太政官)

官院省使府縣

明治六年(十月)第三百四十四號布告休暇日ハ左ノ春秋二季祭日ヲ被加候條此旨相達候事

春季皇靈祭  
秋季皇靈祭

春分日  
秋分日

明治十二年七月布告第二十七號

神嘗祭日自今十月十七日ニ改定候條此旨布告候事

●陸軍軍人軍屬喪服及父母祭日休務規則

明治十三年十月  
陸軍省達乙第六十五號



陸軍軍人軍屬喪服及父母祭日休務規則別冊之通改正候條此旨相達候事  
(別冊)

陸軍軍人軍屬喪服父母祭日休務規則

第一條 陸軍軍人軍屬遭喪ノ節ハ忌中休務表ニ掲クル日數ノ外休務ヲ許サス其日數滿レハ自カラ申報シテ除服本務ニ服スヘシ

第二條 本務繁劇ナル時ハ休務ノ日數未タ滿タスト雖モ其所管長官除服出務ヲ命スルヲ得ヘシ

第三條 諸生徒及ヒ軍隊附下士兵卒父母ノ喪ニ遭フ者ハ一日ノ休務ヲ許シ其餘ノ忌服ニ於テハ休務ヲ許スコトナシ

第四條 歸休兵及ヒ豫備役後備役ノ籍ニ在ル者忌服中ト雖トモ召集ノ時ニ當テハ直チニ除服其召集ニ應スヘシ

第五條 戰時若シハ非常戒嚴等ノ時ニ在テハ父母ノ喪ト雖トモ休務ヲ許サス

第六條 除服本務ニ服スル者ハ喪章ヲ除キ朝賀參拜等憚カルニ及ハス忌服中休務ヲ許サル者モ亦同シ

第七條 軍人軍屬父母ノ祭日ニハ休暇ヲ許ス然レトモ本務繁劇ナル時ハ之ヲ許サルコトアルヲ以テ祭日前其長官團隊長、所屬長ニ申請スヘシ

但諸生徒并ニ生兵ハ休暇ヲ許サス

第八條 戰時若シハ非常戒嚴等ノ時ニ在テハ父母祭日ニ當ルト雖モ休務ヲ許サス

陸軍軍人軍屬忌中休務表

一定	忌	休務	日數
五	日	十	五
三	日	十	日
二	日	七	日
十	日	五	日
十	日	四	日
五	日	二	日

備  
一定忌三日以下ノ忌服ニ於テハ休務ヲ許スコトナシ  
一訃音ヲ聞クノ日已ニ表面ノ休務日數ヲ若干日經過スルモハ殘ル日數ヲ休務スヘシ  
一訃音ヲ聞クノ日已ニ表面ノ日數全ク經過スルモノハ休務スルコトナシ  
考  
一父母ノ喪ニ限リ其訃音ヲ聞クノ日ヨリ表面ノ日數ヲ休務スヘシ



●司獄官署中休暇一般官員ト同様タラシム

明治十八年七月  
内務省達番外  
各 集 治 監

司獄官署中休暇ノ儀事務ノ都合ニ依リ賜暇限内休暇難相成モノハ壹ケ年ヲ通シ三十日間休暇差許來候處自今不相成候條渾テ一般官員同様署中ニ限ル儀ト可心得此旨相達候事

●巡查看守休暇概則ヲ定メ細目順序ハ適宜相定メ届出

明治十八年七月  
シム 内務省達番外

巡查看守休暇概則左ノ通相定候條其細目順序ハ適宜相定可届出此旨相達候事

但本文ニ牴觸スル從前ノ指令ハ取消候事  
巡查看守休暇概則

- 第一條 巡查看守ハ常ニ定員ノ充足ヲ要スルヲ以テ休暇ヲ許サ、ルヘキモノナレバ其勤務上差支ナキニ於テハ皆勤ノ者ニ限リ特ニ慰勞ノ爲メ休暇ヲ與ルコトヲ得
- 第二條 休暇ノ日數ハ左ノ割合ニ從フ

休暇日數

一ケ年間皆勤ノ者	三週間
半ケ年間皆勤ノ者	壹週間

第三條 非番父母祭日及職務上負傷者ノ欠勤ハ欠勤日數ニ算入セス

●巡查看守休暇概則ヲ定メ細目順序届出ノ件

明治十八年七月  
内務省達番外  
集治監 假留監

看守休暇概則左之通相定候條其細目順序ハ適宜相定可届出此旨相達候事  
但本文ニ牴觸スル從前ノ指令ハ取消候事

(看守休暇概則ハ前項番外達巡查看守休暇概則ニ同シ)

●再役志願者賜暇給與法ヲ廢シ再役志願者賜暇規則ヲ

定ム  
明治十八年七月  
海軍省達丙第四十二號

明治十五年十二月十二日 丙第百拾四號達再役志願者賜暇給與法相廢シ再役志願者賜暇規則左



ノ通相定ム此旨相達候事

再役志願者賜暇規則

第一條 海軍下士服役規則第四條及ヒ海軍志願兵徵募規則第八條ニ依リ再役ヲ許ス者ハ其際再役年數一箇年ニ付往返日數ヲ除キ七日ノ割ヲ以テ所管長官ヨリ歸郷休暇ヲ許ス可シ但六十日ヲ超過スルコトヲ得ス

第二條 往返日數ハ各自郷里ノ遠近瀛船瀛車ノ便否等ニ因リ臨時適宜ニ之ヲ定ムルモノトス

第三條 休暇中ハ日給本給三分ノ二及ヒ食料金十五錢ヲ給ス但休暇日限外事故アリテ尙ホ滞在ヲ願フ者其日限外ノ滞在中ハ日給及ヒ食料ヲ給セス

第四條 往返旅中ハ日給本給三分ノ二及ヒ旅費一日十里計メ金四拾錢宛ヲ給シ瀛車瀛船ノ便アル路程六里以上ハ其里數ニ拘ハラヌ其下等賃金ヲ給ス但片道六里以上十里未滿及ヒ十里以上ノ端里數一里未滿ハ一切給セス

第五條 日給及ヒ食料ハ各艦船營等ニ於テ採上ケ之ヲ支給ス可シ

第六條 歸郷ノ旅費ハ各艦船營等ヨリ支給シ歸艦歸營等ノ旅費ハ各艦船營等ニ於テ本人管轄ノ地方廳ヘ委托シテ本人ノ居住地ノ戶長ヘ送付シ而シテ本人ヲシテ旅行

證ヲ示シ之ヲ受取ラシム但其委託金ニ付事故アル時ハ會計局ヘ照會ス可シ

●陸軍出仕文官請願休暇手續ヲ定ム

明治二十一年六月 陸軍省達第四百四十一號

陸軍出仕文官請願休暇ノ手續左ノ通定ム

但明治十八年達乙第四百十四號達ハ廢止ス

一 凡ソ陸軍出仕ノ文官歸省又ハ他行轉地療養其他事故アリテ休暇ヲ要スルトキハ左ノ項目ニ依ル

一 休暇日數高等官ハ往復ヲ除キ四週日判任官ハ三週日轉地療養ハ四週日以内ノ休暇ヲ請願スルコトヲ得但轉地療養日限内快復ニ至ラサル者及ヒ休暇中發病ノ者ハ延期ヲ願フコトヲ得

二 勅任官ノ休暇ハ陸軍大臣ヘ請願スヘシ

奏任官以下ノ休暇ハ各長官ニ於テ許可スヘシ但本省各局出仕ノ奏任官ハ其長總務局長ヨリ總務局長ノ認可ヲ得テ許可スヘシ

三 凡ソ休暇ノ願ハ其要スル旨趣及ヒ日數ヲ記載シ差出スヘシ

●陸軍出仕文官暑中休暇賜與方

明治二十一年六月 陸軍省達第四百四十二號



陸軍出任ノ文官暑中休暇賜與ノ儀左ノ通定ム

- 一 休暇日數ハ休暇期中ニ於テ二十日以内トス
- 二 毎局部課共一時ニ休暇スルヲ許サス總人員三分一以内タルヘシ
- 三 休暇日割等ハ豫メ其長官ノ認可ヲ受ケ休暇中他行スル者ハ其行先ヲ届出ヘシ
- 四 局部課等ノ都合ニ依リ二十日以内ノ日數ヲ數回ニ分チ休暇スルモ妨ケナシ
- 五 事務繁劇ノトキ若クハ臨時須要ノ件ヲ擔任スル者ニ在テハ休暇ヲ許可セサルコトアルヘシ
- 六 暑中休暇下賜及時期ハ年々内閣ヨリ官報ヲ以テ達相成筈ニ付自今當省ヨリハ別ニ達セス

●現役下士卒父母ノ重病看護ノタメ歸郷ヲ出願セルキ

許否方

明治二十二年八月  
海軍省達第三百十號

本年告示第十二號ニ依リ現役下士卒ノ父母ノ重病看護歸郷ヲ願出ツル者アルトキ艦團隊校及各廳長ハ往復ヲ除クノ外十四日以内ノ歸郷ヲ許可スヘシ但役務ノ爲メ必要ニシテ歸郷セシムル能ハサルトキハ許可セサルモ妨ナシ

●父母ノ重病ヲ看護セシムル爲海軍現役下士卒ノ歸郷

ヲ要スルトキ出願方

明治二十二年八月  
海軍省告示第十二號

父母ノ重病ヲ看護セシムル爲メ海軍現役下士卒ノ歸郷ヲ要スルトキハ親族若クハ近鄰戶主二人以上連署ノ願書ニ市町村長又ハ區長ノ證印ヲ受ケ醫師ノ診斷書ヲ添へ本人服務ノ艦團隊校廳ニ願出ツヘシ

●陸軍軍人休暇規則改正

明治二十三年六月  
陸軍省達第三百二十八號

陸軍軍人休暇規則別冊ノ通改正セラレ

(別冊)

陸軍軍人休暇規則

第一條 軍人ノ休暇ヲ分テ二トス

- 一 賜與休暇
  - 二 請願休暇
- 第二條 賜與休暇ハ左ノ如シ
- 一 夏期休暇
  - 二 慰勞休暇



三 褒賞休暇

第三條 夏期休暇ハ毎年七月上旬ヨリ九月下旬マテノ間ニ於テ勤務ニ差支ナキ者ニ之ヲ賜與ス其日數左ノ如シ

准士官以上

三週日以内

下士

二週日以内

軍隊又ハ學校學舍等教習ヲ主トスル官司ニ在テハ隊務又ハ教育上ノ都合ニ因リ前項ノ時期外ニ於テ休暇ヲ賜與スルコトヲ得此場合ニ在テハ豫メ陸軍大臣ノ認可ヲ受クヘキモノトス

第四條 夏期休暇ハ長官司ノ長團隊長ニ於テ部下掌務ノ緩急ヲ量リ便宜賜與スヘシ但場合ニ因リ部下本人ヨリ具申セシメテ許可スルモ妨ケナシ

第五條 此規則ニ於テ長官ト稱スルハ陸軍大臣參謀總長監軍近衛都督師團長ヲ云官司ノ長ト稱スルハ上長官以上ヲ以テ充ルル局部課官廨校舎ノ長官及參謀長ヲ云團隊長ト稱スルハ旅團長以下中隊長以上ノ各隊長ヲ云但少佐大尉相當官ヲ以テ充ルルニ在ル大尉同相當官ハ上長官ニ同シ

第六條 慰勞休暇ハ軍人演習等ノ爲メ山野ヲ跋涉シ又ハ新兵ノ教育ヲ完了シタル等其勞多キ者ニ臨時之ヲ賜與ス其賜與ノ權限左ノ如シ

長官司司ノ長及團隊長中隊長ヲ除ク 三日以内  
中隊長 一日

第七條 褒賞休暇ハ在營下士以下行狀方正勤務勉勵ニシテ且學術技藝ニ熟達シ他人ノ模範トナルヘキ者ニ臨時之ヲ賜與ス其賜與ノ權限左ノ如シ

團隊長 一箇月ニ一日

第八條 請願休暇ハ左ノ如シ

一 准士官以上ハ歸省又ハ轉地療養其他事故アリテ休暇ヲ要スル時本人ノ願ニ依リ之ヲ許可ス其日數ハ往復ヲ除キ四週日以内トス

二 下士以下ハ父母病氣又ハ死亡等ニテ歸郷ヲ要スル時親族ノ出願ニ依リ之ヲ許可ス其日數ハ往復ヲ除キ二週日以内トス

三 營外居住下士以下ニ在テハ前項ノ外醫師ノ診斷ニ依リ轉地療養ヲ要スル時本人ノ願ニ依リ之ヲ許可ス其日數ハ往復ヲ除キ四週日以内トス

四 在營下士以下ノ轉地療養ノ規則ハ別ニ定ムル所ニ依ル

第九條 將官並相當官ノ請願休暇ハ陸軍大臣ヨリ上奏裁可ヲ請フモノトス故ニ其願書ハ大臣ニ宛テ差出スヘシ但長官ノ下ニ在ル將官ハ該長官ヲ經由スヘシ

第十條 上長官司准士官ノ請願休暇ハ左ニ掲グル諸官之ヲ許可ス其權限左ノ如シ



第十九類 休暇

一四

長官  
官司令長タル將官  
及相當官旅團長  
官司令長及聯隊長  
獨立大隊長  
四週日以内  
三週日以内  
二週日以内

第十一條 上長官士官准士官休暇ヲ請願スルトキハ直屬ノ長へ願出ヘシ直屬ノ長ニシテ休暇許可ノ權ナ有スルモノハ其權限ニ由テ之ヲ許可シ其權ナキカ又ハ權限外ニ涉ル日數ナルトキハ順序ヲ經テ其權アル所屬上官ノ許可ヲ請ヒ其旨ヲ指令スヘシ

第十二條 下士以下ノ請願休暇ハ軍隊ニ在テハ旅團長聯隊長獨立大隊長官司令ニ在テハ官司令ノ長之ヲ許可スルノ權ナ有ス

第十三條 休暇賜與及許可ノ權限ニシテ前諸條ニ準スヘキモノ左ノ如シ

- 一 憲兵隊長ハ獨立大隊長ニ準シ憲兵分隊長ハ大隊長ニ準ス
- 二 警備隊司令官ハ獨立大隊長ニ準シ步兵砲兵隊長ハ中隊長ニ準ス
- 三 生徒隊教導隊ノ上長官タル隊長ハ獨立大隊長ニ準シ士官タル隊長ハ大隊長ニ準シ軍樂隊ノ隊長ハ中隊長ニ準ス
- 四 士官ヲ以テ充ル廠舎署部等ノ長ハ中隊長ニ準ス但特ニ休暇許可ノ權ヲ規定シタル者ハ各其規定ニ依ル

五 衛戍司令官ハ其軍隊ノ長タル權限ニ準ス

第十四條 各種ノ休暇ハ掌務繁劇ナル時ハ賜與又ハ許可セサルコトアルヘシ又歸省旅行中發病或ハ轉地療養中快復ニ至ラサル者ハ延期ヲ出願スルコトヲ得

第十五條 准士官以上ハ夏期休暇中並慰勞休暇中トモ便宜歸省旅行等ヲ爲スコトヲ得但豫メ其行先ヲ直屬ノ長へ届出ヘシ

下士ニ在テハ夏期休暇中ニ限リ官司令ノ長若シハ直屬ノ長又ハ團隊長ノ許可ヲ得テ旅行又ハ外泊ヲ爲スコトヲ得

第十六條 夏期休暇ハ其日數ヲ數回ニ分割シテ賜與スルコトヲ得

第十七條 在營ノ下士以下休暇ヲ得テ在營スル時ハ勤務演習ヲ休業セシメ朝食後ヨリ日夕點呼前マテ外出ヲ許可スルコトヲ得

第十八條 一部隊ニ休暇ヲ與ヘタル時ヲ除クノ外下士以下休暇ヲ得テ外出スル時ハ外出免許札ヲ携持セシムヘシ

第十九條 下士以下父母病氣又ハ死亡等ノ爲メ本人ノ歸郷ヲ願フ時ハ親族ニ於テ願書ヲ作り病氣ナレハ醫師ノ診断書ヲ添ヘ市町村長<sup>特別市制施行地ハ區長</sup>ノ與書證印ヲ受ケ本人所屬ノ軍隊又ハ官衙ニ差出シ之ヲ許可シタル時ハ其指令ヲ本人ニ下付スヘシ

第二十條 營外居住下士以下ニシテ轉地療養ノ爲メ休暇ヲ願フ時ハ願書ニ陸軍醫官

第十九類 休暇

一五



醫官アラサルノ診斷書ヲ添ヘ本人ヨリ所屬ノ長ヘ願出ヘシ  
 第二十一條 第十九條第二十條ノ請願ヲ受ケタルトキ隊長又ハ所屬ノ長ニシテ許可  
 ノ權ナキトキハ第十二條ニ掲グル所屬上官ノ許可ヲ請ヒ其旨ヲ指令スヘシ  
 第二十二條 下士以下休暇ヲ得テ旅行スル者ニハ左式ノ休暇免許證ヲ付シテ之ヲ携  
 帶セシメ服裝ハ略装トス

兵種隊號		官(卒職工) 姓名	
寸		四	
表		裏	
休暇免許證 該隊之印		一 此證書ハ表記ノ者ニ休暇ヲ 與フルノ證トス 一 休暇日數何日(往復日數何日) 一 何月何日何時何地出發何地 一 至リ何月何日何時マテニ 必ス何地ニ歸著スヘシ 年月日	
職官姓名印			

官司所屬ノ者ニ在テモ又之ニ準シテ調製付與スヘシ  
 第二十三條 下士以下休暇ヲ得テ歸郷又ハ旅行ノ者如何ナル事故ニ遭遇スルモ休暇

日數ヲ延ルコトヲ得ス然レトモ本人病氣ニテ出發シ難キ時又ハ轉地療養日限内快  
 復ニ至ラサルニ依リ延期ヲ請フ時ハ最初出願ノ手續ニ依リ更ニ出願シテ命ヲ待ツ  
 ヘシ

途中發病又ハ船待川留雪文等ニテ不得已休暇日數ヲ超過スル場合ニ在テハ地方醫  
 師ノ診斷書或ハ市町村長ノ證明書ヲ請ヒ歸著ノ上差出スヘシ

附則  
 第二十四條 市制町村制ヲ施行セサル地方ニ在テハ本規則中市町村長ノ事務ハ區戸  
 長ニ於テ取扱フモノトス

●陸軍軍人休暇規則改正ニ附キ下士兵卒ニ係ル取扱方

及出願手續 明治二十三年七月 陸軍省令第二十一號

今般陸軍軍人休暇規則改正セラレ候ニ付テハ下士兵卒ノ休暇ニ關シ地方ニ係ル取扱  
 及ヒ出願ノ手續等左ノ各項ニ據ル可シ  
 一 陸軍下士兵卒ノ父母病氣又ハ死亡等ノ爲メ本人ノ歸郷ヲ要スルトキハ往復ヲ除  
 キ二週日以内ノ休暇ヲ許ス其休暇ヲ願フトキハ親族ニ於テ願書ヲ作り病氣ナレハ  
 醫師ノ診斷




一 市町村長<sup>特別市制施行地ハ區長以下同シ</sup>ハ奥書證印ヲ受ケ本人所屬ノ軍隊又ハ官衙ヘ宛差出ス  
 一 前項ノ外下士ニ在テハ毎年二週日以内ノ休暇ヲ與ヘ歸郷又ハ旅行ヲ許スコトアリ又營外居住ノ下士兵卒ニハ轉地療養ヲ要スルトキ本人ノ願ニ依リ四週日以内ノ休暇ヲ許スコトアルヘシ  
 一 休暇ヲ得テ歸郷又ハ旅行中發病ノ爲メ出發シ難キトキハ延期ヲ願フコトヲ得其延期ヲ願フトキハ本人又ハ親族ニ於テ願書ヲ作り醫師ノ診斷書ヲ添ヘ市町村長ノ奥書證印ヲ受ケ本人所屬ノ軍隊又ハ官衙ヘ宛差出スヘシ  
 一 休暇ヲ得テ歸郷又ハ旅行ノ者如何ナル事故ニ遭遇スルモ前項ノ場合ヲ除ク外休暇日數ヲ延ハスコトヲ許サス  
 一 途中發病川留船待雲支等ニテ休暇日數ヲ超過スルトキハ醫師ノ診斷書或ハ市町村長ノ證明書ヲ請ヒ歸著ノ上差出スモノトス  
 一 休暇ヲ得テ歸郷又ハ旅行スル者ハ左式ノ休暇免許證ヲ携帯シ陸軍定制ノ服ヲ著ス

兵種隊號(所管)

一此證書ハ表記ノ者ニ休暇ヲ

六寸

四寸	表	四寸
官(兵卒職工)姓名	休暇免許證 	裏
職官姓名印	與フルノ證トス	一 休暇日數何日(往復日數何日) 一 何月何日何時何地出發何地 二 至リ何月何日何時マテニ 必ス何地ニ歸著スヘシ 年月日

一 市町村制ヲ實施セサル地方ニ在テハ市町村長ノ職務ハ區長又ハ戸長ニ於テ取扱ヘシ



第二十類

○建白、請願

●建白書呈出方

明治八年十一月  
布告第七十八號

諸建白書元老院へ可差出旨本年四月第六十八號ヲ以テ布告候處自今立法ニ關スルモノハ元老院へ其他ハ主任ノ廳へ可差出尤訴訟ニ涉ル事件ニ於テハ成規ノ手續ヲ示シ本人へ可下戻候條此旨布告候事  
但東京ノ外各地方ノ人民ハ管轄廳へ差出該廳ヨリ本文同様主任ノ廳へ轉送可致候事

●公益ニ關スル上書ハ渾テ建白トナス

明治十三年十二月  
布告第五十三號

凡ソ人民ノ上書一般ノ公益ニ關スルモノハ何等ノ名目ヲ以テスルニ拘ラス渾テ建白ト爲シ元老院ニ於テ取扱ヒ候條管轄廳ヲ經由シテ同院ニ差出スヘシ此旨布告候事

●請願書用紙

明治十六年一月  
內務省告示甲第二號

明治十五年十二月  
第五十八號布告ニ據リ請願スル書面ハ美濃紙ヲ用ヒ正副二通宛指出

參照  
明治八年四月布告  
第六十八號諸建白  
自今元老院へ可差  
出  
（明治二十三年十  
月勅令第二百五十  
五號ヲ以テ元老  
院ヲ廢止セラレシ  
トキ消滅ス）



スヘキ者トス但シ其書面ヲ却下スル場合ト雖モ副書ハ留置シテアルヘシ此旨告示候事

●建言ヲ名トシテ官吏ニ面謁口陳ヲ求メ抗論喧擾ニ涉

ル者處分方 明治二十年九月 內務省令第二號

凡ソ意見ヲ建言シ又ハ各自ノ利害ニ關シ請願スル者ハ明治十三年第五十三號布告及十五年第五十八號布告ニ依遵スヘキ處近來建言ヲ名トシ官吏ニ面謁口陳ヲ求メ從テ抗論喧擾ニ涉ル者アリ右等ハ何等ノ名義ヲ用ユルニ拘ラス其違犯者ハ總テ十五年第五十八號布告ニ依リ處分スヘシ

●訴願法制定請願規則廢止

明治二十三年十月 法律第百五號

朕訴願法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

訴願法

第一條 訴願ハ法律勅令ニ別段ノ規程アルモノヲ除ク外左ニ掲クル事件ニ付之ヲ提起スルコトヲ得

一 租稅及手数料ノ賦課ニ關スル事件

二 租稅滯納處分ニ關スル事件

三 營業免許ノ拒否又ハ取消ニ關スル事件

四 水利及土木ニ關スル事件

五 土地ノ官民有區分ニ關スル事件

六 地方警察ニ關スル事件

其他法律勅令ニ於テ特ニ訴願ヲ許シタル事件

第二條 訴願セントスル者ハ處分ヲ爲シタル行政廳ヲ經由シ直接上級行政廳ニ之ヲ提起スヘシ

訴願ノ裁決ヲ受ケタル後更ニ上級行政廳ニ訴願スルトキハ其裁決ヲ爲シタル行政廳ヲ經由スヘシ

國ノ行政ニ付此法律ニ依リ郡參事會又ハ市參事會ノ處分若クハ裁決ニ對シテ訴願セントスル者ハ其處分若クハ裁決ヲ爲シタル郡參事會又ハ市參事會ヲ經由シテ府縣參事會ニ之ヲ提起スヘシ

第三條 各省大臣ノ處分ニ對シ訴願セントスル者ハ其省ニ之ヲ提起スヘシ

第四條 裁判所ノ裁判各省ノ裁決及第二條第三項府縣參事會ノ裁決ヲ經タルモノハ其事件ニ付更ニ訴願スルコトヲ得ス



第五條 訴願ハ文書ヲ以テ之ヲ提起スヘシ

訴願書ノ侮辱誹毀ニ涉ルモノハ之ヲ受理セス

第六條 訴願書ハ其不服ノ要點理由要求及訴願人ノ身分職業住所年齢ヲ記載シ之ニ署名捺印スヘシ

訴願書ニハ證據書類ヲ添ヘ並下級行政廳ノ裁決ヲ經タルモノハ其裁決書ヲ添フヘシ

第七條 多數ノ人員共同シテ訴願セントスルトキハ其訴願書ニ各訴願人ノ身分職業住所年齢ヲ記載シ署名捺印シ其中ヨリ三名以下ノ總代人ヲ選ビ之ニ委任シ總代委任ノ正當ナルコトヲ證明スヘシ

法律ニ依リ法人ト認メラレタル者ハ其名ヲ以テ訴願ヲ提起スルコトヲ得

第八條 行政處分ヲ受ケタル後六十日ヲ經過シタルトキハ其處分ニ對シ訴願スルコトヲ得ス

行政廳ノ裁決ヲ經タル訴願ニシテ其裁決ヲ受ケタル後三十日ヲ經過シタルモノハ更ニ上級行政廳ニ訴願スルコトヲ得ス

行政廳ニ於テ宥恕スヘキ事由アリト認ムルトキハ期限經過後ニ於テモ仍之ヲ受理スルコトヲ得

第九條 法律勅令ニ依リ訴願ヲ提起スヘカラサルモノナルカ又ハ適法ノ手續ニ違背スルモノナルトキハ之ヲ却下ス

其訴願書ノ方式ヲ缺クニ止マルモノハ期限ヲ指定シテ還付スヘシ

第十條 訴願書ハ郵便ヲ以テ之ヲ差出スコトヲ得

郵便遞送ノ日數ハ第八條ノ訴願期限内ニ之ヲ算入セス

第十二條 第二條第一項ノ場合ニ於テ訴願書ノ經由ニ當レル行政廳ハ訴願書ヲ受取リタル日ヨリ十日以内ニ辯明書及必要文書ヲ添ヘ上級行政廳ニ之ヲ發送スヘシ

第二條第二項ノ場合ニ於テ訴願書ノ經由ニ當レル行政廳ハ訴願書ヲ受取リタル日ヨリ三日以内ニ上級行政廳ニ之ヲ發送スヘシ

第二條第三項ノ場合ニ於テ訴願書ヲ發送スルトキ亦前二項ノ例ニ依ルヘシ

第十二條 訴願ハ法律勅令ニ別段ノ規程アルモノヲ除ク外行政處分ノ執行ヲ停止セス但行政廳ハ其職權ニ依リ又ハ訴願人ノ願ニ依リ必要ナリト認ムルトキハ其執行

ヲ停止スルコトヲ得

第十三條 訴願ハ口頭審問ヲ爲サス其文書ニ就キ之ヲ裁決ス但行政廳ニ於テ必要ナリト認ムルトキハ口頭審問ヲ爲スコトヲ得

第十四條 訴願ノ裁決ハ文書ヲ以テ之ヲ爲シ其理由ヲ付スヘシ訴願ヲ却下スルトキ



亦同

第十五條 請願ノ裁決書ハ其處分ヲ爲シタル行政廳ヲ經由シテ之ヲ請願人ニ交付ス  
ヘシ請願書ヲ却下スルトキ亦同シ

第十六條 上級行政廳ニ於テ爲シタル裁決ハ下級行政廳ヲ羈束ス

第十七條 請願ノ手續ニ關シ他ノ法律勅令ニ別段ノ規程アルモノハ各其規程ニ依ル

附則

第十八條 明治十五年<sup>十二月</sup>第五十八號布告請願規則ハ此法律施行ノ日ヨリ廢止ス

第十九條 此法律施行ノ前請願規則ニ依リ受理シタル請願ハ仍其規則ニ依リ之ヲ處分ス

請願規則ニ依リ下級行政廳ノ指令ヲ受ケタル者請願スルヲ得ヘキ場合ニ於テ更ニ  
請願セントスルトキハ此法律ニ從ヒ其上級行政廳ニ之ヲ提起スヘシ

第二十條 第八條ノ訴願期限ハ此法律施行ノ前行政處分ヲ受ケ又ハ請願規則ニ依リ  
指令ヲ受ケタル事件ニシテ其處分又ハ指令ヲ受ケタル日ヨリ滿五年ヲ經過セサル  
モノニ對シテハ此法律施行ノ日ヨリ之ヲ起算ス

第二十一條 行政廳ニ呈出スル請願ハ此法律ニ依ルノ限ニ在テス  
(參照) 明治十五年十二月布告第五十八號

請願規則左ノ通制定ス

請願規則

第一條 人民各自ノ利害ニ關シ行政上ノ處分ヲ請願セントスル者ハ左ノ條規ニ依ル  
ヘシ

第二條 郡區長及戶長職務内ノ事件ハ郡區長戶長ニ請願ス可シ郡區長戶長ノ指令ニ  
服セサル者ハ府知事縣令ニ請願シ府知事縣令ノ指令ニ服セサル者ハ主務卿ニ請願  
シ主務卿ノ指令ニ服セサル者ハ太政官ニ請願スルコトヲ得

府知事縣令警視總監職務内ノ事件ハ府知事縣令警視總監ニ請願スヘシ府知事縣令  
警視總監ノ指令ニ服セサル者ハ主務卿ニ請願シ主務卿ノ指令ニ服セサル者ハ太政  
官ニ請願スルコトヲ得

各省卿職務内ノ事件ハ其卿ニ請願スヘシ其指令ニ服セサル者ハ太政官ニ請願スル  
コトヲ得

第三條 凡ソ請願スル者ハ書面ヲ以テスヘシ口陳スルコトヲ許サス官署ノ求メニ應  
ジテ開陳スルハ此限ニアラス

第四條 請願書ハ請願人自ラ署名捺印シ族籍住所ヲ記シ戶長ニ請願スル者ヲ除ク外  
住所戶長ノ奥印ヲ受クヘシ其連名ヲ以テ請願スル者ハ各人自ラ署名捺印シ族籍住



所ヲ記シ其總代又ハ請願發起人アルトキハ其由ヲ肩書スヘシ戸長ノ與印ヲ受クルハ前ノ例ニ同シ

第五條 府縣郡區總代又ハ結社總代ノ名ヲ以テ請願スルコトヲ得ス但成法ニ制定セラレタル會社ハ此限ニ在ラス

第六條 請願書ヲ上呈スルニハ代人ヲ以テスルコトヲ許サス數人連名スル者ハ請願人中ニ於テ三名以下ノ總代人ヲ選ビ之ニ委託スヘシ

第七條 請願書ハ郵便ヲ以テ上呈スルコトヲ得

第八條 上司ニ呈スル請願書ニハ其經歷スル所ノ官署ノ指令書ヲ添フヘシ

第九條 請願書ノ郵達ヲ得タル各省若シ其主務ニ非サルトキハ直ニ之ヲ主務省ニ移シ其由ヲ請願人ニ通知スヘシ

第十條 太政官ニ於テ請願ヲ裁可スルトキハ主務省ニ付シテ處分セシム

第十一條 太政官ノ裁令ヲ經タル者ハ更ニ請願スルコトヲ得ス又裁判所ニ訴フルコトヲ得ス

第十二條 請願ヲ名トシテ行政處分ヲ拒ムコトヲ得ス

第十三條 凡ソ事ノ建白ニ屬スヘキ者ハ人民各自ノ利害ニ係ルヲ以テ請願スト雖モ受理セス

第十四條 行政處分ノ既ニ五年ヲ經タル者ハ請願ヲ受理セス

第十五條 請願人第二條ノ順序ヲ經ス及第三條第四條第五條第六條第八條第十條ノ規程ニ循ハサル者ハ受理セス

第十六條 請願書ニ侮辱誹毀ノ語ヲ用ヒ及第二條ニ示ス所ノ官署ノ外ニ向ヒ請願スル者ハ受理セス

第十七條 條規ニ違ヒ受理セラレサルノ請願ヲ以テ強テ受理ヲ請フ者ハ十一日以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス其連名請願スル者ハ情ヲ知ラサル者ヲ除ク外各人均ク罪ヲ論ス其發起人ハ一月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス若シ請願人ノ外發唆者アルトキハ發起人ト同ク罪ヲ論ス

第十八條 請願人官吏ニ對シ抗論シ喧擾ニ涉ル者ハ十一日以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

其侮辱ニ涉ル者ハ刑法ニ依テ處分ス

第十九條 請願書ハ新聞紙其他ノ文書ヲ以テ公行スルコトヲ許サス犯ス者罪前條第一項ニ同シ

第二十條 請願ニ由リ人ヲ誣告スル者ハ刑法ニ依テ處分ス



右奉 勅旨布告候事

○第二十一類 出版、版權

●新聞紙

○出版、版權

●出版條例改正

明治二十年十二月  
勅令第七十六號

朕出版條例改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

出版條例

第一條 凡ソ機械含密其他何等ノ方法ヲ以テスルヲ問ハス文書圖書ヲ印刷シテ之ヲ發賣シ又ハ頒布スルヲ出版ト云ヒ其文書ヲ著述シ又ハ編纂シ若クハ圖書ヲ作為スル者ヲ著作家ト云ヒ發賣頒布ヲ擔當スル者ヲ發行者ト云ヒ印刷ヲ擔當スル者ヲ印刷者ト云フ

第二條 新聞紙又ハ時々ニ發行スル雜誌ヲ除クノ外文書圖書ノ出版ハ總テ此條例ニ依ルヘシ但雜誌コシテ專ラ學術技藝ニ關スル事項ヲ記載スルモノハ内務大臣ノ許可ヲ得テ此條例ニ依ルコトヲ得

第三條 文書圖書ヲ出版スルトキハ發行ノ日ヨリ到達シ得ヘキ日數ヲ除キ十日前製本三部ヲ添ヘ内務省ヘ届出ヘシ

第四條 官廳ニ於テ文書圖書ヲ出版スルトキハ其官廳ヨリ發行前製本三部ヲ内務省



ニ送付スヘシ

第五條 出版届ハ著作權者又ハ其相續者及發行者連印ニテ之ヲ差出スヘシ但非賣品ハ著作權者ノミニテ届出ルコトヲ得著作權者又ハ其相續者ヲ知ルヘカラサルトキハ其由ヲ記シ發行者ヨリ差出スヘシ

學校會社協會等ニ於テ著作ノ名義ヲ以テ出版スル文書圖書ノ届ハ其學校會社等ヲ代表スル者發行者ト連印シテ之ヲ差出スヘシ

第六條 文書圖書ノ發行者ハ文書圖書ノ販賣ヲ以テ營業トスル者ニ限ル但著作權者又ハ其相續者ハ發行者ヲ兼スルコトヲ得

第七條 文書圖書ヲ印刷スル者ハ其發行ト否トヲ問ハス印刷ノ年月日及印刷者ノ氏名住所ヲ記載シ其發行ニ係ルモノハ發行者ノ氏名住所ヲ併セテ記載スヘシ

第八條 社則塾則引札諸藝ノ番付普通ノ書式アル諸種ノ用紙又ハ證書ノ類ハ第三條第六條ニ據ルヲ要セズ

第九條 文書圖書ノ冊號ヲ逐ヒ順次ニ出版スル者ハ其都度第三條ノ手續ヲ爲スヘシ但雜誌ノ類ニ在テハ内務大臣ノ許可ヲ經テ其手續ヲ省略スルコトヲ得

第十條 一タヒ出版届ヲ爲シタル文書圖書ノ再版ハ出版届ヲ要セズト雖モ若シ改正増減シ又ハ註解附録繪圖等ヲ加ヘザルモノハ仍ホ第三條ニ依ルヘシ

第十一條 演說者クハ講義ヲ筆記シテ一部ノ書ト爲ストキハ演說者若クハ講義者ヲ以テ著作權者トス但演說者若クハ講義者ノ許諾ヲ經シテ出版シタルモノニ關シテハ其演說者若クハ講義者ハ著作權ノ責ニ任セズ

他人ノ講義又ハ公然ナラサル演說ハ其講義者又ハ演說者ノ許諾ヲ經ルニ非レハ其筆記ヲ出版スルコトヲ得ズ但本項ニ違フ者ハ版權條例ニ依リ其責ニ任セシム

第十二條 數人ノ著作權者若クハ數人ノ講義演說ヲ編纂シテ一部ノ書ト爲スモノハ編纂者ヲ著作權者ト見做スヘシ

前條第一項ノ但書及第二項ハ本條ニ適用スヘシ

第十三條 翻譯ハ翻譯者ヲ以テ著作權者ト見做スヘシ但翻譯トハ漢文ヲ延譯スルモノヲモ包含ス

第十四條 學校會社協會等ニ於テ著作ノ名義ヲ以テ出版スル文書圖書ハ其出版届ヲナス者ヲ以テ著作權者ト見做スヘシ

第十五條 公ニセサル官ノ文書及上書建白請願書ハ當該官廳ノ許可ヲ得ルニ非サレハ詳略ニ拘ラス之ヲ出版スルコトヲ得ズ  
官廳ノ議事及法律ニ依リ傍聽ヲ禁シタル公會ノ議事ハ詳略ニ拘ラス之ヲ出版スルコトヲ得ズ



第十六條 治安ヲ妨害シ又ハ風俗ヲ壞亂スルモノト認ムル文書圖書ヲ出版シタルトキハ内務大臣ニ於テ其發賣頒布ヲ禁シ其刻版及印本ヲ差押ユルコトヲ得

第十七條 外國ニ於テ印刷シタル文書圖書ニシテ治安ヲ妨害シ又ハ風俗ヲ壞亂スルモノト認ムルトキハ内務大臣ハ其文書圖書ノ内國ニ於ケル發賣頒布ヲ禁シ其印本ヲ差押フルコトヲ得

第十八條 軍事ノ機密ニ關スル事項ヲ記載スル文書圖書ヲ出版スルコトヲ得ス

第十九條 重罪輕罪ノ豫審ニ關スル事項ハ公判ニ付セサル以前ニ於テ之ヲ出版スルコトヲ得ス

第二十條 刑律ニ觸レタル罪犯ヲ曲庇スルノ論說ヲ出版スルコトヲ得ス

刑事被告人又ハ刑律ニ觸レタル犯罪人ヲ救護シ又ハ賞恤スル爲ニスル文書ヲ出版スルコトヲ得ス

第二十一條 第三條ノ届出ヲ爲サシテ文書圖書ヲ出版シタル者ハ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十二條 發行者自己ノ氏名住所又ハ印刷者ノ氏名住所又ハ出版ノ年月日ヲ記載セサル文書圖書ヲ發行シタルトキハ貳圓以上五拾圓以下ノ罰金ニ處シ其之ヲ記載スルモ實ヲ以テセサルモノハ一月以上六月以下ノ輕禁錮又ハ五圓以上百圓以下ノ

罰金ニ處ス

第六條ヲ犯ス者罰前項ニ同シ

第二十三條 印刷者其氏名住所ヲ其印刷スル所ノ文書圖書ニ記載セス若クハ記載スト雖モ實ヲ以テセサルモノハ罰前條ニ同シ

第二十四條 政體ヲ變壞シ朝憲ヲ紊亂セントスルノ文書ヲ出版シタルトキハ著作發行者印刷者共犯ヲ以テ論シ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ五十圓以上三百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

圖書ニシテ其目的前項ニ同キモノハ罰前項ニ同シ

第二十五條 猥褻ノ文書圖書ヲ出版シタルトキハ著作發行者共犯ヲ以テ論シ一月以上六月以下ノ輕禁錮又ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十六條 文書圖書ヲ寫真トナシ因テ第十八條第二十四條第二十五條ヲ犯ス者ハ各本條ニ依テ處分ス

第二十七條 本條例ニ依リ出版ヲ禁セラレタル文書圖書ヲ出版シタルトキハ著作發行者共犯ヲ以テ論シ一月以上二年以下ノ輕禁錮又ハ二十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス

其發賣頒布ヲ禁セラレタル文書圖書ヲ發賣頒布スルトキハ發行者又ハ發賣頒布者



罰前項ニ同シ但其未タ發賣頒布セサル文書圖書ハ之ヲ沒收ス

第二十八條 第二十四條第二十五條第二十七條ノ場合ニ於テ刻版及印本ハ檢察官ニ於テ假ニ之ヲ差押フルコトヲ得差押フル所ノ刻版及印本ハ裁判ノ確定ヲ待テ無罪ナレハ本主ニ還付シ有罪ナレハ沒收ス

第二十九條 前條ノ差押ヲ爲ストキハ製本ノ體裁ニヨリ其差押フヘキ部分ト他ノ部分ト分割シ得ルニ於テハ之ヲ分割スルコトアルヘシ

第三十條 他人ノ講義演說ヲ筆記若クハ編纂シ又ハ他人ノ著作ヲ編纂シタル文書圖書ヲ出版シ第二十四條第二十五條ヲ犯シタル場合ニ於テ講義者演說者若クハ著作者ニシテ其出版ヲ承諾シタルモノナルトキハ筆記者若クハ編纂者ト同シク其罪ヲ論ス

第三十一條 文書圖書ヲ出版シ因テ誹毀ノ訴ヲ受ケタル場合ニ於テ其私行ニ涉ルモノヲ除クノ外裁判所ニ於テ其人ヲ害スルノ惡意ニ出テス專ラ公益ノ爲ニスルモノト認ムルトキハ被告人ニ事實ヲ證明スルコトヲ訴スコトヲ得若シ其證明ノ確立ヲ得タルトキハ誹毀ノ罪ヲ免ス其損害賠償ノ訴ヲ受ケタルトキモ亦同シ

第三十二條 此條例ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ自首減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用井ス

第三十三條 此條例ニ關スル公訴ノ期滿免除ハ二年トシ其犯罪ト認メラレタル文書圖書ヲ最後ニ發賣頒布シタル時ヨリ起算ス其發賣頒布セサルモノハ其最後ニ印刷シタル時ヨリ起算ス

第三十四條 文書圖書ヲ印刷スルトキハ直チニ發賣頒布セスト雖モ其目的發賣頒布ニ在ル者ハ總テ此條例ニ依ル

●版權條例 明治二十年十二月 勅令第七十七號

朕版權條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

版權條例

第一條 凡ソ文書圖書ヲ出版シテ其利益ヲ專有スルノ權ヲ版權ト云ヒ版權所有者ノ承諾ヲ經スシテ其文書圖書ヲ翻刻スルヲ僞版ト云フ

第二條 出版條例ニ依リ文書圖書ヲ出版スル者ハ總テ此條例ニ依リ其版權ノ保護ヲ受ルコトヲ得

第三條 版權ノ保護ヲ受ント欲スル者ハ發行前製本六部ノ定價ヲ添ヘ版權登錄ヲ內務省ニ願出ヘシ

第四條 官廳ニ於テ文書圖書ヲ出版シ版權ノ登錄ヲ得ント欲スルトキハ其由ヲ內務



省ニ通知スヘシ

第五條 版權登録ノ文書圖書ニハ其保護年限間ハ版權所有ノ四字ヲ記載スヘシ其記載セサル者ハ登録ノ効ヲ失フモノトス

第六條 内務省ニ於テハ版權登録簿ヲ備ヘ置キ登録ノ願出アル毎ニ之ヲ登録シ登録證書ヲ下付スヘシ

登録ヲ經タル文書圖書ハ内務省ニ於テ時々之ヲ官報ニ揭示スヘシ

第七條 版權ハ著作者ニ屬シ著作者死亡後ニ在テハ其相続者ニ屬スルモノトス

講義若クハ演説ヲ筆記シテ一部ノ書ト爲シタルモノ、版權ハ講義者若クハ演説者

ニ屬シ若シ筆記者ニ於テ講義者若クハ演説者ノ許諾ヲ經テ出版スルトキハ筆記者

ニ屬シ筆記者死亡後ニ在テハ其相続者ニ屬スルモノトス

翻譯書ノ版權ハ翻譯者ニ屬シ翻譯者死亡後ニ在テハ其相続者ニ屬スルモノトス

官廳學校會社協會等ニ於テ著作ノ名義ヲ以テ出版スル文書圖書ノ版權ハ其廳學校

等ニ屬スルモノトス

數人ノ著作若クハ數人ノ講義演説ヲ編纂シタル文書圖書ノ版權ハ編纂者ニ屬シ編

纂者死亡後ニ在テハ其相続者ニ屬スルモノトス但編纂者ト原著者講義者演説者

又ハ其相続者トノ關係ハ相互ノ約束ニ依ル

第八條 版權ハ制限ヲ附シ若クハ附セスシテ賣渡シ讓渡スコトヲ得

第九條 版權登録證書ヲ毀損又ハ紛失シタルトキハ事由ヲ記シ其再度下付ヲ内務省

ニ願出ルコトヲ得但手数料トシテ金五拾錢ヲ納ムヘシ

第十條 版權保護ノ年限ハ著作者ノ終身ニ五年ヲ加ヘタルモノトス若シ版權登録ノ

月ヨリ死亡ノ月マテヲ計算シ之ニ五年ヲ加ヘ仍ホ三十五年ニ足ラサル時ハ版權登

録ノ月ヨリ三十五年トス

數人ノ合著ニ係ルモノ、版權年限ハ最終ニ死亡シタル者ニ據リテ計算ス

官廳又ハ學校會社協會等ニ於テ著作ノ名義ヲ以テ出版スル文書圖書並著作者死亡

ノ後ニ出版スル文書圖書ノ版權年限ハ版權登録ノ月ヨリ計算シ三十五年トス

第十一條 冊號ヲ逐ヒ順次ニ出版スル文書圖書ノ版權年限ハ各號毎ニ其出版ノ月ヨ

リ起算ス但共都度第三條ノ手續ヲナスヘシ

雜誌ノ類ニ在テハ内務大臣ノ許可ヲ得テ第三條ノ手續ヲ省略スルコトヲ得

第十二條 版權ノ保護ハ其文書圖書ヲ改正増減シ又ハ註解附録繪圖等ヲ加ヘ又ハ製

本ノ式ヲ改メ又ハ冊數ヲ分合スルカ爲メ變更スルコトナカルヘシ

第十三條 特ニ世ニ有益ナル文書圖書ニシテ版權年限間ノ利益其著作出版ノ勞力ト

費用トナ償ハサルノ事情アルモノニハ版權所有者ノ願出ニ依リ内務大臣ニ於テ仍



十年間版權保護ヲ期限ヲ延ハスコトアルヘシ

第十四條 文書圖書ノ版權年限中所有者死亡シ他人ニ於テ其版權相續者ナキコトヲ確信シ之ヲ出版セント欲スルトキハ其由ヲ官報及東京ノ四社以上ノ重ナル新聞紙並其所有者居住地ノ新聞紙ニ七日以上廣告シ最終ノ廣告日ヨリ六箇月内ニ版權相續者ノ出テサルトキハ内務大臣ノ許可ヲ受テ之ヲ出版シ版權ヲ繼續スルコトヲ得 著作者又ハ相續者ヲ知ルヘカラサル著作ニシテ未タ出版セサルモノ亦前項ノ手續ニヨリ出版シ版權ノ保護ヲ受リルコトヲ得

第十五條 新聞紙又ハ雜誌ニ於テ二號以上ニ涉リ記載シタル論說記事又ハ小説ハ其編輯者ノ承諾ヲ得ルニアラサレハ刊行ノ月ヨリ二年内ニ之ヲ編纂シテ一部ノ書ト爲シ出版スルコトヲ得ス 其二年ヲ經ルト雖モ已ニ一部ノ書ト爲シ版權登錄ヲ經タルモノハ原文ニ就テ更ニ編纂スルコトヲ得ス

第十六條 版權所有ノ文書圖書ヲ僞版シタル者ハ其版權所有者ニ對シ損害賠償ノ責ニ任スヘシ其寫本ヲ發賣シテ版權ヲ犯ス者亦同シ

第十七條 僞版ノ訴アリタルトキ裁判官ハ出訴者ノ情願アルニ於テハ假ニ其發賣頒布ヲ差止ムルコトヲ得但審理ノ未僞版ニアラスト判決セラレタルトキハ出訴者ニ

於テ其差止ヨリ生ズル損害賠償ノ責ニ任スヘシ

第十八條 僞版ニ關スル損害賠償ノ責ハ僞版者ノ相續者ニ及ブモノトス

第十九條 版權所有者ノ承諾ヲ經スシテ版權所有ノ文書圖書ヲ翻譯シ増減シ註解附錄繪畫等ヲ加ヘ若シハ其未タ完結セサル部分ヲ續成シテ出版スル者及本條例第十五條ニ違フ者ハ僞版ヲ以テ論ス

他人ノ講義又ハ演說ヲ筆記シ其許諾ヲ經スシテ出版スル者亦前項ニ同シ

第二十條 翻譯書ノ版權ハ其翻譯者ニ屬スト雖モ其原書ニ就キ別ニ翻譯スル者ニ向ヒ僞版ノ訴ヲ爲スコトヲ得ズ但其既ニ出版スル所ノ翻譯ヲ剽竊シタルコトヲ證明スルモノハ此限ニアラス

第二十一條 世人ヲ欺瞞スル爲メ故ラニ版權所有ノ文書圖書ノ題號ヲ冒シ或ハ摸擬シ又ハ氏名社號屋號等ノ類似シタル者ヲ湊合シテ他人ノ版權ヲ妨害スル者ハ僞版ヲ以テ論ス

第二十二條 著作者又ハ其相續者ノ承諾ヲ經スシテ未タ出版セサル文書圖書ヲ出版シ又ハ非賣ノ文書圖書ヲ翻刻スル者亦僞版ヲ以テ論ス

第二十三條 文書圖書ヲ寫眞ト爲シ因テ其版權ヲ犯ス者ハ僞版ヲ以テ論ス

第二十四條 内國ニテ版權所有ノ文書圖書ヲ外國ニ於テ僞版シタルモノヲ輸入販賣



スル者ハ僞版ヲ以テ論ス

第二十五條 僞版ノ訴アリテ其僞版タルヤ否ヲ決シ難キトキハ其訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テ三名以上ノ鑑定者ヲ選ビ之ヲ鑑定セシムルコトアルヘシ

第二十六條 僞版ニ關スル損害賠償ノ責ハ其原書ノ版權年限終ルノ後三年ヲ以テ期滿得免ノ期トナス

第二十七條 僞版者及情ヲ知ルノ印刷者販賣者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮若シハ二十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス但被害者ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

僞版ニ係ル刻版及印本ハ其何人ノ手ニ在ルヲ問ハス之ヲ沒收シ其既ニ販賣シタルモノハ其賣得金ヲ沒收シテ併セテ被害者ニ下付ス

第二十八條 版權ヲ所有セサル文書圖書ト雖モ之ヲ改竄シテ著作者ノ意ヲ害シ又ハ其表題ヲ改メ又ハ著作者ノ氏名ヲ隱匿シ又ハ他人ノ著作ト詐稱シテ翻刻スルヲ得ス違フ者ハ二圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス但著作者又ハ發行者ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第二十九條 第三條ノ手續ヲナサスシテ版權所有ノ字ヲ記載シタル文書圖書ヲ出版スル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十條 此條例ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ自首減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヰス

第三十一條 此條例ニ關スル公訴ノ期滿免除ハ二年トシ其犯罪ト認メラレタル文書圖書ヲ最後ニ發賣頒布シタル時ヨリ起算ス其發賣頒布セサルモノハ其最後ニ印刷シタル時ヨリ起算ス

第三十二條 現行ノ出版條例ニ據リ免許ヲ得タル版權ノ年限ハ現行條例ニ據リ計算スルモノトス

● 脚本樂譜條例

明治二十年十二月 勅令第七十八號

朕脚本樂譜條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

脚本樂譜條例

第一條 演劇脚本及樂譜ハ出版條例及版權條例ニ據リ之ヲ出版シ及版權ヲ所有スルコトヲ得

第二條 演劇脚本若シハ樂譜ヲ出版シテ版權ヲ所有スル者ハ版權年限中ハ其興行權(即チ利益ノ爲メ公衆ノ前ニ演スルノ權)ヲ併セ有スルコトヲ得但興行權ヲ有セシトスルトキハ其脚本又ハ樂譜ニ興行權所有ノ五字ヲ記載スヘシ

第三條 演劇脚本及樂譜ノ興行權ハ制限ヲ付シ若シハ付セズシテ之ヲ賣渡シ讓渡スコトヲ得



第四條 演劇脚本若シハ樂譜ノ興行權ヲ犯シタル者ハ興行權所有者ニ對シ損害賠償ノ責ニ任スヘシ著作權者又ハ其相續者ノ承諾ヲ經スルテ未タ出版セサル脚本若シハ樂譜ヲ興行スル者亦同シ

第五條 興行ニ關スル損害賠償ノ責ハ其興行權ヲ犯シタル最終ノ月ヨリ一年ヲ以テ期滿得免ノ期トナス

●寫眞版權條例改正

明治二十年十二月 勅令第七十九號

朕寫眞版權條例改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

寫眞版權條例

第一條 凡ソ光線ト藥品トノ作用ニヨリ人物器物景色其他物象ノ眞形ヲ寫シタルモノヲ寫眞ト云ヒ寫眞ヲ發行シテ其利益ヲ專有スルノ權ヲ寫眞版權ト云フ

第二條 寫眞版權ハ寫眞師ニ屬シ寫眞師死亡後ニ在テハ其相續者ニ屬スルモノトス但他人ノ囑托ニ係ルモノ、寫眞版權ハ囑托者ニ屬シ囑托者死亡後ニ在テハ其相續者ニ屬スルモノトス

囑托ニ係ル寫眞ノ種板ニシテ現存スルモノハ版權所有者ニ於テ之ヲ寫眞師ヨリ受取ルコトヲ得ルモノトス

第三條 寫眞版權ノ保護ヲ受メト欲スル者ハ發行前寫眞一版ニ付見本二葉及六葉ノ定價ヲ添ヘ版權登錄ヲ内務省ニ願出ヘシ但人物ノ寫眞ハ登錄ヲ待タズシテ其保護ヲ受ケルモノトス

第四條 版權登錄ノ寫眞コハ其保護年限間ハ版權所有者ノ氏名住所版權登錄ノ年月ヲ記載スヘシ其記載セサル者ハ登錄ノ効ヲ失フモノトス

第五條 内務省ニ於テハ寫眞版權登錄ヲ備ヘ置キ登錄ノ願出アリタルトキハ之ヲ登錄シ登錄證書ヲ下付スヘシ

寫眞版權登錄證書ノ取扱ハ總テ文書圖書ノ版權登錄證書ニ準スルモノトス

第六條 寫眞版權保護ノ年限ハ登錄ノ月ヨリ十年トス

第七條 寫眞版權ハ制限ヲ付シ若シハ付セズルテ賣渡シ讓渡スコトヲ得第八條 版權ノ保護ヲ受ル寫眞ハ之ヲ覆寫シ若クハ機械又ハ舍密ノ作用ニヨリ多數ヲ複製シ得ヘキ方法ヲ以テ寫眞術ト類似ノ模寫ヲ爲シ及寫眞師ニ於テ本人又ハ其相續者ノ承諾ヲ受メシテ囑托ニ係ル寫眞ヲ複製スルコトヲ得ス

第九條 第三條ノ手續ヲナサズシテ版權登錄ヲ詐稱シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十條 第八條ニ違フ者ハ版權條例ニ據リ偽版ヲ以テ論シ二十圓以上二百圓以下ノ



罰金ニ處シ及損害賠償ノ責ニ任セシム

損害賠償ノ責ハ其原寫眞ノ版權年限終ルノ後一年ヲ以テ期滿得免ノ期トス

第十一條 此條例ニ關スル公訴ノ期限ハ一年トシ其犯罪ト認メラレタル寫眞又ハ摸寫物作爲ノ時ヨリ起算シ其發賣セルモノハ最後ニ發賣シタル時ヨリ起算ス

第十二條 此條例ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ自首減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用サス

●出版條例版權條例脚本樂譜條例並ニ寫眞版權條例ニ

關スル願届手續等ヲ定ム

明治二十一年一月  
內務省令第一號

出版條例版權條例脚本樂譜條例並寫眞版權條例ニ關スル願届手續等左ノ通之ヲ定ム

第一條 凡願届書ニ署名スル者ハ各住所ヲ詳記シ實印ヲ捺シ內務大臣宛ニテ差出ス可シ

第二條 凡文書圖書ヲ印刷スル者ハ出版條例第七條ニ從ヒ其印刷竣功ノ年月日並住所氏名ヲ記載ス可シ

第三條 出版届ハ第一書式再二三版届ハ第二書式版權登錄願ハ第三書式寫眞版權登錄願ハ第四書式版權登錄再度下付願ハ第五書式ニ依ル可シ

第四條 専ラ學術技藝ノ雜誌コシテ出版條例第二條但書ニ從ヒ同條例ニ依ラント欲スル者並第九條但書ニ依リ届出ノ手續ヲ省略セシト欲スル者ハ第六書式ニ依ル可シ

第五條 版權條例第十一條第二項ニ依リ版權登錄願ノ手續ヲ省略セント欲スル者ハ第七書式ニ依リ豫メ二回以上出版ノ分隨意取東子版權登錄ヲ願出ルコトヲ得

第六條 外國ノ圖書ヲ翻譯シテ出版スル者ハ原書ノ題名著者ノ氏名出版ノ地名及年號ヲ原字ヲ以テ認メ届書ニ添付ス可シ

第七條 版權登錄料並登錄再度下付手数料東京ニ在テハ大藏省金庫局其他ノ地方ニ在テハ國庫金出納本支所ヘ預ケ入レ其預證書ヲ願書ニ添ヘ納付ス可シ

第八條 版權登錄願ヲ許可スルトキハ第八書式寫眞版權登錄願ヲ許可スルトキハ第九書式ノ證書ヲ下付ス可シ但毀損紛失等ニ依リ再度下付スルモノハ本證書ノ謄本ニ其事由並下付ノ年月日ヲ裏書シ內務省ノ印ヲ捺ス

第一書式 用紙美濃

出版御届

一書名 全何冊(枚) (又ハ何冊(枚)ノ内何冊(枚) 自第何號 至第何號)

右何誰著述(編纂、演說、講義、翻譯) 何々ノ事ヲ記載(論述)セシモノニテ今般出版



第二十一類 出版 版權

候條製本三部相添此段御届申上候也

年月日

道應何府何郡何町何番地

發行者 氏 名 印

同上

著作者(相續者)氏 名 印

内務大臣(爵)何誰殿

第二書式 用紙同上

再版御届

一書名 全何冊(枚)又ハ何冊(枚)ノ内何冊(枚)自第何號至第何號

右何誰著述(編纂、演說、講義、翻譯)ノ書ニシテ何年何月何日出版セシ處改正(増減、注解、附録、給圖等)相加ヘ今般再(三)版候條製本三部相添此段御届申上候也

年月日

道應何府何郡何町何番地

發行者 氏 名 印

同上

著作者(相續者)氏 名 印

内務大臣(爵)何誰殿

第三書式 用紙同上

版權登錄願

一書名 全何冊(枚)又ハ何冊(枚)ノ内何冊(枚)自第何號至第何號

右今般出版致候條版權登錄被下度六部ノ定價金何圓錢大藏省金庫局(何々國庫金出納本(支)所)預證書相添此段相願候也

年月日

道應何府何郡何町何番地

版權所有者ノ氏 名 印

内務大臣(爵)何誰殿

第四書式 用紙同上

寫真版權登錄願

一物象ノ名 何枚

右何々ノ真形ヲ寫シタルモノニテ今般發行致度候條版權登錄被下度見本二葉並六葉ノ定價金何圓錢大藏省金庫局(何々國庫金出納本(支)所)預證書相添此段相願候也

年月日

道應何府何郡何町何番地

版權所有者ノ氏 名 印

第二十一類 出版 版權



第五書式 用紙同上  
內務大臣(爵)何誰殿

(寫真)版權登錄證再度御下付願

(寫真)版權登錄證第何號

一書名(物象ノ名)全何冊(枚)又ハ何冊(枚)ノ内何冊(枚)ノ自第何號(至第何號)

右何年月日版權登錄御許可ヲ受タル處何々ニ依リ毀損(紛失)候條版權登錄證更ニ御下付被下度手数料金五拾錢大藏省金庫局(何々國庫金出納本(支)所)預證書相添此段相願候也

年月日  
道應何府何郡何町何番地  
版權所有者ノ氏 名 印

第六書式 用紙同上  
內務大臣(爵)何誰殿

學術(技藝)雜誌出版條例ニ依リ出版(並手續省略)願

一書名

右專ラ何々ノ學術(技藝)ニ關スル事項ヲ記載シ毎月何回(又ハ何々ノ日ヲ以テ)發行致スヘキモノニ候處出版條例ニ依リ出版(致シ且同條例第三條ノ日限ニ不拘其

出版ノ都度御届ニ不及發行前製本ノミ相納候様)致度此段相願候也  
年月日  
道應何府何郡何町何番地  
發行者 氏 名 印

同上  
編輯者 氏 名 印

第七書式 用紙同上  
內務大臣(爵)何誰殿

學術(技藝)雜誌版權登錄手續省略願

一書名

右出版條例ニ依リ出版致度旨今般(何年月日)御許可ヲ得候處自第何號至第何號何冊分一時版權登錄被下度各號六部ノ定價金何圓錢大藏省金庫局(何々國庫金出納本(支)所)預證書相添此段相願候也

年月日  
道應何府何郡何町何番地  
發行者 氏 名 印  
同上  
編輯者 氏 名 印



第八書式

内務大臣(爵)何誰殿

同上謄本裏書書式

△印ハ朱

△ 版權登錄之證	
印割 書名	何册
著作者	氏名
版權所有者	氏名
右第	號ヲ以テ版權登錄簿ニ登錄ス
明治	年 月 日
内務省 △ 印	

本證書毀損(紛失)再度下付願出ニ依リ此謄本ヲ下付ス	
△ 割 印	明治 年 月 日
内務省 △ 印	
但謄本ハ表面省名ノ下ニ押印セス	

第九書式

同上謄本裏書書式

△ 寫真版權登錄之證	
印割 物象ノ名	何枚
版權所有者	氏名
右第	號ヲ以テ寫真版權登錄簿ニ登錄ス
明治	年 月 日
内務省 △ 印	

本證書毀損(紛失)再度下付願出ニ依リ此謄本ヲ下付ス	
△ 割 印	明治 年 月 日
内務省 △ 印	
但謄本ハ表面省名ノ下ニ押印セス	

●舊出版條例ニ依リ版權免許ノ者願届及手数料納付方

明治二十一年四月  
内務省令第三號



第一條 舊出版條例ニ依リ版權免許ヲ得タル者其免許狀ヲ毀損又ハ紛失シタルトキハ其事由ヲ記シ證明書ノ下付ヲ内務省ニ願出ルコトヲ得但手数料トシテ金五十錢ヲ同省ニ納ム可シ

第二條 舊出版條例ニ依リ版權免許ヲ得未タ出版セサル圖書ニシテ自今出版ノモノハ其製本ニ何年月日版權免許ト記載シ改正出版條例第三條ニ依リ届出ヲナスト同時ニ舊出版條例第二十條ノ免許料ヲ内務省ニ納ムヘシ

第三條 第一條ノ手数料並第二條ノ免許料ハ本年內務省令第一號第七條ニ從ヒ大藏省金庫局又ハ國庫金出納本支所ノ預證書ヲ以テ之ヲ納ムヘシ

●舊出版條例ニ依リ版權免許ノ者願届及手数料免許料

納付方中改正追加 明治二十三年三月 內務省令第一號

明治二十一年內務省令第一號及第三號中左ノ如ク改正追加シ本年四月一日ヨリ施行ス

第七條 版權登錄料並登錄證再度下付手数料ハ現金ヲ願書ニ添ヘ納付スヘシ

現金ハ爲替ヲ以テ納付スルコトヲ得此場合ニ於テハ內務省總務局圖書課宛東京郵便電信局支拂ノ郵便爲替券ヲ願書ニ添ヘ納付スヘシ

前項ノ版權登錄料並手数料ヲ納付スルトキハ版權登錄願又ハ登錄證再度下付願ノ外ニ第八書式ニ準シ納付書ヲ差出スヘシ

版權登錄願

一書名 全何冊(枚)又ハ何冊(校)ノ内何冊(枚) 自第何號至第何號  
右今般出版致候條版權登錄被下度六部ノ定價金何圓錢(東京郵便電信局支拂ノ郵便爲替券)相添此段相願候也

年月日

道廳何府何郡何町何番地

版權所有者 氏

名 印

內務大臣(爵)何誰殿

第四第五及第七書式ハ前同斷  
左ノ書式ヲ追加ス

第八書式 用紙半紙堅半截

記

一金何圓錢也

右書名版權登錄(登錄證再度下付手数料)料トシテ相納候也







- 一日曜表甲子表庚申表己巳表
- 一二十四節氣及雜節
- 一新月滿月

一前各項ニ相當スル陰曆日干支及陰曆ノ朔日干支並之ニ相當スル陽曆日  
 以上ノ事項ハ帝國大學ニ於テ編纂スル所ノ曆ニ依ルヘシ但前各項規定ノ外本曆  
 略本曆ニ掲載セサル事項ヲ記入スルハ此限ニ在ラス

●文部省出版ノ圖書ヘ註解圖書傍訓等ヲ加ヘ出版スル

明治十二年二月  
 文部省布告第二號

文部省出版ノ圖書ヘ註解圖書傍訓等ヲ加ヘ又ハ本文ヲ増減シテ出版致候儀自今不相  
 成候尤原本ノ儘翻刻致シ候儀ハ可爲從前之通候條此旨布達候事

●文部省出版圖書翻刻誤刻ノモノ發賣差止方等

明治十四年三月  
 文部省布達第一號

文部省出版圖書中世上ニ於テ翻刻スル圖書ノ内誤刻有之モノ相見エ教育上ノ弊害ヲ  
 生スル不勘儀ニ付自今翻刻ノ圖書ハ當省ニ於テ検査ヲ遂ケ誤刻有之モノハ時宜ニヨ  
 リ其發賣ヲ可差止候條此旨豫メ布達候事

但本文翻刻圖書ハ検査ノ爲メ入用ニ付翻刻出來次第翻刻人ヨリ當省ヘ一部納本可  
 致候事

●定稅遞送ヲ認可シタル定時刊行物ノ休廢刊又ハ改題  
 届出ノ際當初認可ノ年月日ヲ附記セシム

明治二十年九月  
 遞信省告示第五百五十五號

定稅遞送ヲ認可シタル定時刊行物ノ休廢刊又ハ改題ノ義届出ノ際ハ當初其認可シタ  
 ル年月日ヲ之ニ附記スヘシ

○新聞紙

●新聞紙條例改正 明治二十年十二月  
 勅令第七十五號

朕新聞紙條例改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

新聞紙條例

- 第一條 新聞紙ヲ發行セントスル者ハ發行ノ日ヨリ二週日以前ニ發行地ノ管轄廳東京府ハ警視廳ニ經由シテ内務省ニ届出ヘシ
- 第二條 新聞紙發行ノ届書ニハ左ノ事項ヲ記載スヘシ
- 一 題號



- 二 記載ノ種類
- 三 發行ノ時期
- 四 發行所及印刷所
- 五 發行人編輯人及印刷人ノ氏名年齢  
編輯人ハ二人以上アルトキハ其主トシテ編輯事務ヲ擔當スル者タルヘシ但紙面ニ部門ヲ分チ其各部門ニ主任編輯人ヲ設クルコトヲ得
- 第三條 届出ヲ爲シタル後題號記載ノ種類又ハ發行人ヲ變更セントスルトキハ二週日以前ニ第一條手續ニ從ヒ届出ヘシ
- 發行ノ時期、發行所、印刷所、編輯人、印刷人ニ變更アリタルトキハ一週日以内ニ第一條ノ手續ニ從ヒ届出ヘシ
- 第四條 發行人死去シ又ハ法律上其資格ヲ失ヒタルトキハ一週日以内ニ發行人ヲ定メ第一條ノ手續ニ從ヒ届出ヘシ其届出チナスマテハ假發行人ノ名義ヲ以テ發行スルコトヲ得
- 第五條 發行ノ届出チナシタル日又ハ發行休止ノ日ヨリ五十日ヲ過キテ發行セサルトキハ其届出ノ効ヲ失フモノトス
- 第六條 内國人ニシテ滿二十歳以上ノ男子ニ非サレハ發行人印刷人トナルコトヲ得

- ス  
公權ヲ剝奪セラレタル者及公權ヲ停止セラレタル者其停止間發行人、編輯人、印刷人トナルコトヲ得ス
- 第七條 編輯人、印刷人ハ互ニ相兼ヌルコトヲ得ス
- 第八條 發行人ハ保證トシテ左ノ金額ヲ届書ト共ニ管轄廳東京府ハニ納ムヘシ  
一 東京ニ於テハ千圓  
一 京都大阪横濱兵庫神戸長崎ニ於テハ七百圓  
一 其他ノ地方ニ於テハ三百五十圓  
一 一月三回以下發行スルモノハ各前記ノ半額
- 保證金ハ時價ニ準シタル公債證書又ハ國立銀行ノ預手形ヲ以テ之ヲ納ムルヲ得
- 學術、技藝、統計、官令又ハ物價報告ニ關スル事項ノミナ記載スルモノハ本條ノ限ニアラス
- 第九條 保證金ハ新聞紙ノ發行ヲ廢止シ又ハ其發行ヲ禁止セラレタルトキハ之ヲ還付ス
- 第十條 第一條第三條第四條ノ届出ヲ爲サヌ又ハ保證金ヲ納ムヘキ新聞紙ニシテ保證金ヲ納メスシテ發行スルモノハ正當ノ届出チナシ又ハ保證金ヲ納ムルマテ警視



總監又ハ地方廳官ニ於テ其發行ヲ差止ヘシ

第十一條 新聞紙ハ每號ニ發行人、編輯人、印刷人ノ氏名發行所ヲ記載スヘシ  
發行人、印刷人ノ外何等ノ名義ヲ以テスルコト拘ラス新聞紙又ハ記載ノ條項ニ署名  
スル者ハ總テ編輯人ト共ニ其責ニ當ラシム

第十二條 新聞紙ハ其發行毎ニ先ツ内務省ニ二部管轄廳東京府ハ及管轄始審裁判所  
檢事局ニ各一部ヲ納ムヘシ

第十三條 新聞紙ニ記載シタル事項ノ錯誤ニ付キ其事項ニ關スル當人又ハ關係アル  
者ヨリ正誤又ハ正誤書辯駁書ノ掲載ヲ求メタルトキハ其求ヲ受ケタル後其次回又  
ハ第三回ノ發行ニ於テ正誤ヲナシ又ハ正誤書辯駁書ノ全文ヲ掲載スヘシ若シ正誤  
書辯駁書ノ字數原文ノ二倍ヲ超過スルトキハ其超過ノ字數ニ付其新聞社ノ定メタ  
ル普通廣告料ト同一ノ代價ヲ要求スルコトヲ得

正誤辯駁ハ原文ト同號ノ活字ヲ用ヒ同一欄内ノ首部ニ掲載スヘシ  
正誤辯駁ノ文章若シハ趣旨法律ニ觸ル、トキ又ハ之ヲ求ムル者其氏名住所ヲ明記  
セサルトキハ掲載スルヲ要セス

第十四條 官報又ハ他ノ新聞紙ヨリ抄録セシ事項ニシテ其官報又ハ新聞紙ニ於テ正  
誤又ハ正誤書辯駁書ヲ掲載シタルトキハ當人又ハ關係アル者ノ求ナシト雖モ其新

聞紙ヲ得タル後其次回又ハ第三回ノ發行ニ於テ正誤スヘキコト前條ノ例ニ依ル但  
廣告料ヲ要求スルコトヲ得ス

第十五條 新聞紙ニ記載シタル事項ニ付キ裁判ヲ受ケタルトキハ其新聞紙ノ次回發  
行ニ於テ宣告ノ全文ヲ掲載スヘシ

第十六條 重罪輕罪ノ豫審ニ關スル事項ハ公判ニ附セサル以前ニ於テ之ヲ記載スル  
コトヲ得ス傍聽ヲ禁シタル訴訟ニ關スル事項ハ之ヲ記載スルコトヲ得ス

第十七條 刑律ニ觸レタル罪犯ヲ曲庇スルノ論說ヲ記載スルコトヲ得ス  
刑事ノ被告人又ハ刑律ニ觸レタル犯罪人ヲ救護シ又ハ賞恤スル爲ニスル文書ヲ揭  
載スルコトヲ得ス

第十八條 公ニセサル官ノ文書及上書建白請願書ハ當該官廳ノ許可ヲ得ルニ非サレ  
ハ詳略ニ拘ラス之ヲ記載スルコトヲ得ス  
官廳ノ議事及法律ニ依リ傍聽ヲ禁シタル公會ノ議事ハ詳略ニ拘ラス之ヲ記載スル  
コトヲ得ス

第十九條 治安ヲ妨害シ又ハ風俗ヲ壞亂スルモノト認ムル新聞紙ハ内務大臣ニ於テ  
其發行ヲ禁止シ若クハ停止スルコトヲ得

第二十條 新聞紙ノ發行ヲ禁止シ若クハ停止シタルトキハ内務大臣ハ其新聞紙ノ發



賣頒布ヲ禁シ其新聞紙ヲ差押フルコトヲ得

第二十一條 外國ニ於テ發行シタル新聞紙ニシテ治安ヲ妨害シ又ハ風俗ヲ壞亂スルモノト認ムルトキハ内務大臣ハ其新聞紙ノ内國ニ於ケル發賣頒布ヲ禁シ其新聞紙ヲ差押フルコトヲ得

第二十二條 陸軍大臣海軍大臣ハ特ニ命令ヲ發シテ軍隊軍艦ノ進退又ハ軍機軍略ニ關スル事項ノ記載ヲ禁スルコトヲ得

第二十三條 新聞紙ニ記載シタル事項ニ付キ公訴ヲ起ストキハ檢察官ハ假ニ其新聞紙ヲ差押フルコトヲ得

裁判官ハ犯罪ノ情狀ニ依リ差押ヘタル新聞紙ヲ沒收スルコトヲ得

第二十四條 新聞紙ニ記載シタル事項ニ付キ訴訟ヲ起シタルトキ原告ニ於テ其新聞紙ニ署名シタル編輯人ハ實際主トシテ編輯事務ヲ擔當スル者ニアラスシテ他ニ主任編輯人アルコトヲ證明シタル場合ニ於テハ裁判官ハ其署名シタル編輯人及實際ノ主任編輯人ヲシテ共ニ其責ニ當ラシムヘシ

第二十五條 新聞紙ニ記載シタル事項ニ付キ誹毀ノ訴アル場合ニ於テ其私行ニ涉ルモノヲ除クノ外裁判所ニ於テ其人ヲ害スルノ惡意ニ出テス專ラ公益ノ爲ニスルモノト認ムルトキハ被告人ニ事實ヲ證明スルコトヲ許スコトヲ得若シ其證明ノ確立

ヲ得タルトキハ誹毀ノ罪ヲ免ス其損害賠償ノ訴ヲ受ケタルトキモ亦同シ

第二十六條 裁判確定ノ日ヨリ一週日以内ニ裁判費用及罰金ヲ完納セス又ハ損害ヲ賠償セサルトキハ保證金ヲ以テ之ニ充ツヘシ仍ホ足ラサルトキハ刑法徵收處分ニ依ル

保證金ヲ以テ裁判費用賠償及罰金ニ充テタルトキハ發行人ハ管轄廳東京府ハノ通知ヲ得タル日ヨリ一週日以内ニ其缺額ヲ完納スヘシ若シ完納セサルトキハ其之ヲ完納スルニ至ルマテ警視總監又ハ地方長官ニ於テ其發行ヲ差止ヘシ

第二十七條 第一條第三條第四條ノ届出ヲ爲サヌ又ハ第六條第七條第十一條第一項第十二條ヲ犯シ又ハ保證金ヲ納ムヘキ新聞紙ニシテ保證金ヲ納メスシテ發行シタルトキハ發行人ヲ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス但詐稱ノ罪ヲ犯スモノハ罰發行

人ニ同シ

第一條第三條第四條ノ届出ヲ爲スモ實ヲ以テセサルトキハ發行人一月以上六月以下ノ輕禁錮又ハ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第八條ノ末項ニ屬スル新聞紙ニシテ保證金ヲ納ムヘキ新聞紙ノ事項ヲ記載シタルトキハ編輯人罰前項ニ同シ



罰金ニ處ス  
 第二十九條 第十六條第十七條第十八條ニ違フトキハ編輯人チ一月以上六月以下ノ輕禁錮又ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス  
 第三十條 第二十一條ニ違ヒ發賣頒布チ爲ス者ハ罰前條ニ同シ  
 第三十一條 第二十二條ニ違フトキハ發行人編輯人チ一月以上二年以下ノ輕禁錮又ハ二十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス  
 第三十二條 政體チ變壞シ朝憲チ紊亂セントスルノ論說チ記載シタルトキハ發行人編輯人印刷人チ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ五十圓以上三百圓以下ノ罰金チ附加ス  
 本條チ犯ス者ハ其犯罪ノ用ニ供シタル器械チ沒收ス  
 第三十三條 猥褻ノ新聞紙チ發行スルトキハ發行人編輯人チ一月以上六月以下ノ輕禁錮又ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス  
 第三十四條 第十三條ノ場合ニ於テ私事ニ係ルモノハ被害者ノ告訴チ待テ其罪チ論ス  
 第三十五條 此條例チ犯シタル者ニハ刑法ノ自首減輕再犯加重數罪俱發ノ例チ用ヒス

第三十六條 此條例ニ關スル公訴ノ期滿免除ハ六箇月トス  
 第三十七條 時々ニ發行スル雜誌ノ類ハ出版條例ニ依ルモノチ除クノ外皆此條例ニ依ル

●新聞紙ニ關スル諸屆書式 明治二十一年一月 內務省告示第一號

新聞紙ニ關スル諸屆書式左ノ通相定ム  
 發行屆書式 但用紙美濃紙以下之ニ同シ

何新聞(雜誌)發行屆

- 一 題號 何新聞
- 一 記載ノ種類 政治、法律、農工商業等ノ類
- 一 發行ノ時期 毎日、毎週、毎月何回、一箇年何回ノ類
- 一 發行所 府縣國郡區町村番地何社社號チキモノハ月主ノ氏名
- 一 印刷所 同
- 一 發行人 住所 氏名

何年何月生本月何年何箇月



一編輯人

氏 名

何年何月生本月何年何箇月

各部門ニ主任編輯人ヲ設クルトキハ茲ニ列記スヘシ

同

一印刷人

氏 名

何年何月生本月何年何箇月

右ハ新聞紙條例ヲ遵守シ年月日ヨリ發行政候ニ付保證金何圓(若クハ國立銀行ノヲ以テ)管轄廳へ納置候間此段御届申上候也

(保證金ヲ納ムルニ及ハサルモノ、例ハ左ノ如シ)

右ハ新聞紙條例ヲ遵守シ年月日ヨリ發行政候間此段御届申上候也

年 月 日

發行人

氏

名 印

內務大臣某殿

題號變更届書式

何新聞改題届

一何新聞

右年月日ヨリ改題候間此段御届申上候也

年 月 日

發行人

氏

名 印

內務大臣某殿

種類變更届書式

何新聞記載ノ種類變更届

一現今種類

政治、法律、農工商業其他何々

一變更種類

何々

右年月日ヨリ變更致候間此段御届申上候也

(保證金ヲ納メス發行シタルモノ更ニ保證金ヲ要スル種類ニ變更スルモノ、例ハ左ノ如シ)

右年月日ヨリ變更致候ニ付保證金何圓(若クハ國立銀行ノヲ以テ)管轄廳へ納置候間此段御届申上候也

(保證金ヲ納メ發行シタルモノ更ニ保證金ヲ要セサル種類ニ變更スルモノ、例ハ左ノ如シ)

右年月日ヨリ變更致候ニ付是迄納置候保證金御下渡之儀ハ管轄廳へ可申出候間此段御届申上候也

年 月 日

發行人

氏

名 印

內務大臣某殿



發行人變更屆書式

何新聞發行人變更屆

何新聞是迄何誰發行人ニ候處年月日ヨリ何誰ニ於テ新聞紙條例ヲ遵守シ發行致候ニ付此段御届申上候也

(發行人死去シ又ハ法律上資格ヲ失ヒタルモノノ例ハ左ノ如シ)

何新聞是迄何誰發行人ニ候處何月何日死去(若クハ法律上ノ資格ヲ失ヒ)候ニ付何誰假發行人ノ名義ヲ以テ引續發行致居候處年月日ヨリ何誰ニ於テ(以下前例)

舊發行人 氏 名 印

(發行人死去ノハ其遺族親戚等ト新發行人ト連署ス)

住所

新發行人 氏 名 印

內務大臣某殿

編輯人印刷人變更屆書式

何新聞編輯人(又ハ印刷人)變更屆

舊編輯人(又ハ舊印刷人) 氏 名

住所

新編輯人(又ハ新印刷人) 氏 名

何年何月生本月何年何箇月

右之通年月日ヨリ變更致候間此段御届申上候也

年 月 日

發行人 氏 名 印

內務大臣某殿

時期變更屆書式

何新聞發行時期變更屆

一何年何月何日發行、第何號マテハ隔日 若クハ毎月一回

一何年何月何日發行、第何號ヨリ改メ毎日 又ハ何々 若クハ每週

右之通變更致候間此段御届申上候也

年 月 日

發行人 氏 名 印

內務大臣某殿

發行所變更屆書式

何新聞發行所變更屆

一舊發行所

一新發行所

何社 社主ノ氏名

府縣國郡區町村番地

何社 社主ノ氏名







右之通年月日ヨリ變更致候間此段御届申上候也

年月日

發行人

氏

名印

內務大臣某殿

○豫約諸君へ特別廣告

明治元年以降現ニ行ハル、所ノ法律規則ハ無數ニシテ其必要ト不必要トナ問ハス細大洩サス悉皆之ヲ集輯セントスルハ非常ノ大部トナリ當ニ搜索ニ大ナル不便ヲ來タスノミナラス徒ラニ莫大ノ費用ヲ要シ到底企テ及フ可キノ業ニ非ラス依テ本書ハ現行ノ法規中ニテ常ニ官民ニ於テ必要アル可シト思料スルモノヲ參酌類輯スルトナシタルヲ以テ無數ノ法規或ハ多少ノ脱漏ヲ免カレズ幸ニ本書ハ抜き差自在ノ仕法ナルヲ以テ將來必要法規ノ脱漏ヲ發見スル毎ニ追加トシテ毎月刊行ノ法規綴中ニ差加ヘ御送付致シ漸々相補ヒ以テ數年ノ後ニ至テ完全無欠ノ書ト爲サンコトヲ期ス尤モ右追加ヲ差加ヘ候トモ代價ハ矢張一ヶ月金貳拾五錢ニテ別ニ増額ヲ請求セス然レモ右追加ノ分ヲ四綴ノ内ヘ追加スルトキハ書冊浩濶ニ涉リ閱讀ニ不便ヲ來タス可キニ付追加ノ分ヲ綴込ム可キ一綴ヲ増加シ都合五綴トナシ其追加ノ一綴ハ豫メ表紙ノミヲ御送付致置キ追加ノ法規ヲ漸次御送付スルニ從テ之ニ御綴込ヲ相願候トニ致度候得共此迄廣告ノ外ニ右追加用ノ表紙實費額金拾五錢ニ相成御迷惑ニモ可有之候間此表紙ニ限り別ニ御申込無之限リハ差出シ不申候將又凡例圖面中ニ有之候差込臺（實費上等金三拾錢下等金二拾錢）モ随分木板竹針ニテ差支無之候間是又別段御申込無之分ハ差出シ不申候若御入用之諸君ハ早々御一報可被下候但表紙差込臺及遞送費共前金ニテ御送付被下度此段豫メ御了承被下度奉願候也

追申毎月刊行法規綴ノ紙數ハ其月發布ニ係ル法律規則ノ多少ニ依リ多寡アルヲ以テ紙數ノ多キ月



モアリ又紙數ノ極メテ少キ月モアル可シ故ニ此代金チ一ヶ月金貳拾五錢ト定メタルハ數月ノ平均ヲ取テ割合チ立テタルモノナレハ此段モ豫メ御了承アラシクナセ

●本編ハ豫定ノ如ク臺本チ四綴三分ツト雖モ漸新定ノ法規綴込ニ至テ其活潑チ厭ハル、者ハ之ヲ幾干ニ分綴スルモ自在也其法タル各類ノ目次本文共紙丁チ區分シアルヲ以テ何レノ類ト雖モ意ノ如ク分綴セラレサルモノナシ而テ其表紙ハ御申込ニ依リ一冊分代金拾五錢ヲ以テ幾冊ニテモ御需ニ應フヘシ但金字記入ノ都合モ有之ニ付必第何綴ト御注文ヲ乞若此御記入ナキモノハ第五綴第六綴ノ順序チ逐テ記入スヘシ此段豫メ拜告ス

### 特別盟告

本綴發行ノ主意ツルヤ一時刊行ノ書籍ト異ナリ永久繼續ヲ以テ其目的トナシタルモノナレハ政府カ法規ノ改廢チ止メサル限リハ本編モ亦廢絶スル事ナシ然ルニ往々本業ノ中止廢絶チ懸念セラレ豫約者ナキニアラヌ蓋創業ノ故ヲ以テ此疑チ懷カル、モ自然ノ人情ナラン然リト雖モ本社ハ其内部ニ確乎不變ノ締約アツテ縱令編者中ニ如何ナル事故チ生スルモ之ニ代テ編輯印行チ擔任スヘキ確法ヲ設ケタレハ將來幾年月チ經過シ何等ノ時運ニ遭遇スルモ斷シテ廢絶セズ此段豫メ購讀各位ニ稟告ス

## 各新聞評

### ●時事新報

(明治二十四年三月廿三日)  
第貳千九百六十七號

●現行法規綴 此書は明治元年より同二十三年に至る現行の法規に係る分を臺本とし二十四年以降新定改廢の分は毎月一回印刷して之を豫約者に頒ち其の都度これを臺本中適宜の分類に綴込み又は綴替をなすの趣向にて一種の新工風と云ふ可し其第一綴は此度發兌したるが製本印刷ともに申分なし委細は廣告に就て知る可し(京橋區彌左衛門町現行法規綴編輯所發行)

### ●郵便報知新聞

(明治二十四年三月廿二日)  
第千五百三十號

### 現行法規綴 第一綴

林 陸夫 編纂  
木澤成肅 編纂

現行法規綴編輯所

各般の法律規則益出て、益密に善記家と雖も新舊相較し彼此並へ備ふるに非ずんば甚だ理會を爲し難き者わり本篇は此患を救はんり爲に編輯せられたる者にして最初に皇室に關する範例制典を掲げ次で憲法を掲げ次で帝國議會に關する法例規則を録し又た官制及官等俸給旅費給與の制を掲げり而して其編纂せんとする所は實に五十四類の多きあり今唯た其五類あるを網羅したるに過ぎず續々版成り愈完結を告げたるの日は官民の共に其惠に浴すべき者蓋し少小に非るへし且つ頗る製本に意を



用ひ異日新律例發布の時に當り自由に之れを改廢更置するを得るか如く爲したるには殊に甚だ佩服すへしと爲すなり

### ○東京日々新聞

(明治廿四年三月廿六日)  
第五千八百二十五號

●現行法規綴第一綴 今度京橋區彌左工門町現行法規綴編輯所より豫約にて出版せし同書は明治元年より昨廿三年迄に發行せし現行の法律規則書を部類を分ちて搜索に便にし且つ六千餘頁の紙數なるを新意匠にてクロス綴革付の表紙に鳩目を打ち革紐を以て綴りたる杯面白し是は豫約者へは廿四年一月より發行なりたる法規を毎月配布して綴り込むの便を量れるなり

### ○東京新報

(明治廿四年三月廿四日)  
第七百十五號

#### 現行法規綴

(京橋區彌左衛門町十五番地)  
現行法規綴編輯所發行

本書は明治元年より同二十三年に至る現行の法規中より官民共に必要なるもの、みを類別纂輯して四綴の臺本となし廿四年以降の分へ毎月一回發兌し猶必要の法規にして脱漏ある時は號を逐て發行するの豫約方法にて此度其第一綴を發兌せり製本美麗にして抜差し自在全編を五十四類に分ち法規の廢止加除文句の改正等の如きハ舊法規文の上欄に改廢文及年月日等を掲載し一目之れを搜ぐるに便ならしむ其體裁の如きも近頃發兌法規編纂書中頗る其宜しきを得たるもの、如し

### ○名古屋金城新報

(明治二十四年三月二十一日)  
第一千五百四號

●現行法規綴第一版の發兌 現行の法律を詳知し置すべきは今更云ふを俟たざれ共改廢差替等の面倒は容易に精密の手續を費すこと能はざる爲めに終世充分の搜索をなす事を得ざるの感あらしむるに今度當名古屋市長者町三丁目第九十七番戸に出張所を設けたる現行法規編輯所に於ては表題の如く現行法規綴第一版を發兌せり第一憲法等を卷首に置き一般の法律規則を編輯せしものにて逐次第四綴まで出版し其後毎月改廢の分は差替をなすの便利を附け製本の如きハ極めて美麗簡便なるものなり紙數と製本の美麗と編輯の用意周到なる割合に代價は極めて廉なり苟しくも世事に著目する者は勿論諸役場等には一本を備附置くべき必要の書物と云ふへし委細は本紙の廣告欄にあり

### ○名古屋扶桑新聞

(明治二十四年三月八日)  
第一千百三十四號

●現行法規綴(第一綴) 林陸夫、木澤成甫兩氏の編纂宮城浩藏氏の校閲に係る現行法規綴は明治元年より全二十三年に至る現行の法規中官民共に必要なるものを類別編纂し項上欄に改廢文及年月日等も詳細に掲載し又二十四年以後の分は毎月一回豫約の方法にて發兌し猶樞要の法規にして脱漏ある時は號を逐て發兌する事とし又臺本を四綴となし其第一綴は愈々發兌になりたるが頁數一千六百六十餘頁あり冊中を五類に類ち第一類は皇室に關する一切の詔勅法令を集輯し第二類は帝國



用ひ異日新律例發布の時に當り自由に之れを改廢更置するを得るか如く爲したるには殊に甚だ佩服すへしと爲すなり

### ○東京日々新聞

(明治廿四年三月廿六日)  
第五千八百二十五號

●現行法規綴第一綴 今度京橋區彌左工門町現行法規綴編輯所より豫約にて出版せし同書は明治元年より昨廿三年迄に發行せし現行の法律規則書を部類を分ちて搜索に便にし且つ六千餘頁の紙數なるを新意匠にてクローズ綴革付の表紙に鳩目を打ち革紐を以て綴りたる杯面白し是は豫約者へは廿四年一月より發行なりたる法規を毎月配布して綴り込むの便を量れるなり

### ○東京新報

(明治廿四年三月廿四日)  
第七百十五號

#### 現行法規綴

(京橋區彌左衛門町十五番地)  
現行法規綴編輯所發行

本書は明治元年より同二十三年に至る現行の法規中より官民共に必要なるものゝみを類別纂輯して四綴の臺本となし廿四年以降の分は毎月一回發兌し猶必要の法規にして脱漏ある時は號を逐て發行するの豫約方法にて此度其第一綴を發兌せり製本美麗にして拔差し自在全編を五十四類に分ち法規の廢止加除文句の改正等の如きは舊法規文の上欄に改廢文及年月日等を掲載し一目之れを搜ぐるに便ならしむ其體裁の如きも近頃發兌法規編纂書中頗る其宜しきを得たるものゝ如し

### ○名古屋金城新報

(明治二十四年三月二十一日)  
第一千五百四號

●現行法規綴第一版の發兌 現行の法律を詳知し置すべきは今更云ふを俟たざれ共改廢差替等の面倒は容易に精密の手續を費すこと能はざる爲めに終世充分の搜索をなす事を得ざるの感あらしむるに今度當名古屋市上長者町三丁目第九十七番戸に出張所を設けたる現行法規編輯所に於ては表題の如く現行法規綴第一版を發兌せり第一憲法等を巻首に置き一般の法律規則を編輯せしものにて逐次第四綴まで出版し其後毎月改廢の分は差替をなすの便利を附け製本の如きは極めて美麗簡便なるものなり紙數と製本の美麗と編輯の用意周到なる割合に代價は極めて廉なり苟しくも世事に着目する者は勿論諸役場等には一本を備附置くべき必要の書物と云ふへし委細は本紙の廣告欄にあり

### ○名古屋扶桑新聞

(明治二十四年三月八日)  
第一千百三十四號

●現行法規綴(第一綴) 林陸夫、木澤成甫兩氏の編纂宮城浩藏氏の校閱に係る現行法規綴は明治元年より全二十三年に至る現行の法規中官民共に必要なるものを類別編纂し項上欄に改廢文及年月日等も詳細に掲載し又二十四年以後の分は毎月一回豫約の方法にて發兌し猶樞要の法規にして脱漏ある時は號を逐て發刊する事とし又臺本を四綴となし其第一綴は愈々發刊になりたるが頁數一千六百六十餘頁あり冊中を五類に類ち第一類は皇室に關する一切の詔勅法令を編輯し第二類は帝國



憲法第三類は帝國議會第四類は各省廳官制服務第五類は官等俸給旅費給與と區分したる者にて司法省刑事局長河津祐之氏の序文あり頗る好体裁なり又製本は普通の和洋本とは大に趣きを異にし前後に皮表紙を附け革紐を以て綴り新發明の針を添へ今後發布となる法令は右針にて順次自在に綴込む思考にて至極便利にして諸役場は勿論公務の諸議員及世事に著目する者には缺くべからざる良書なり該書籍發行所ハ東京々橋區彌左衛門町拾五番地現行法規綴編輯所並に常名古屋市上長者町三丁目丁九十七番戸の同出張所也

● 名古屋新愛知

(明治二十四年四月五日) 第七百八十一號

● 現行法規綴 過日も記載したる東京彌左衛門町十五番地及本市上長者町三丁目丁九十七番戸出張所より發兌したる現行法規綴は今回其第一綴を發行したるが新定改廢の抜差一種の新工夫にて自在に之を加除し得へく製本も奇麗にて印刷亦鮮明なり官民の便益鮮少ならざるへし第二綴の發行四五日の内に在りと云ふ

明治二十四年四月十日印刷  
明治二十四年四月十一日出版

編纂者

林 陸 夫

愛知縣名古屋市富士塚町甲六十番戸寄留

全

木 澤 成 肅

東京市京橋區彌左衛門町十五番地

發行者

近 藤 英 一 郎

愛知縣名古屋市上長者町三丁目丁九十七番地寄留

全

池 田 謙 吉

愛知縣名古屋市富士塚町甲六十番戸寄留

印刷者

稻 村 爲 胤



發行所

東京市京橋區綱左衛門町拾五番地

現行法規綴編輯所

愛知縣名古屋市長者町丁九十七番戶

出張所

愛知縣名古屋市本町四丁目

愛知印刷會社

印行所

東京市日本橋區新大阪町十番地

書肆 小林喜右衛門

大阪市東區本町四丁目

書肆 岡島眞七

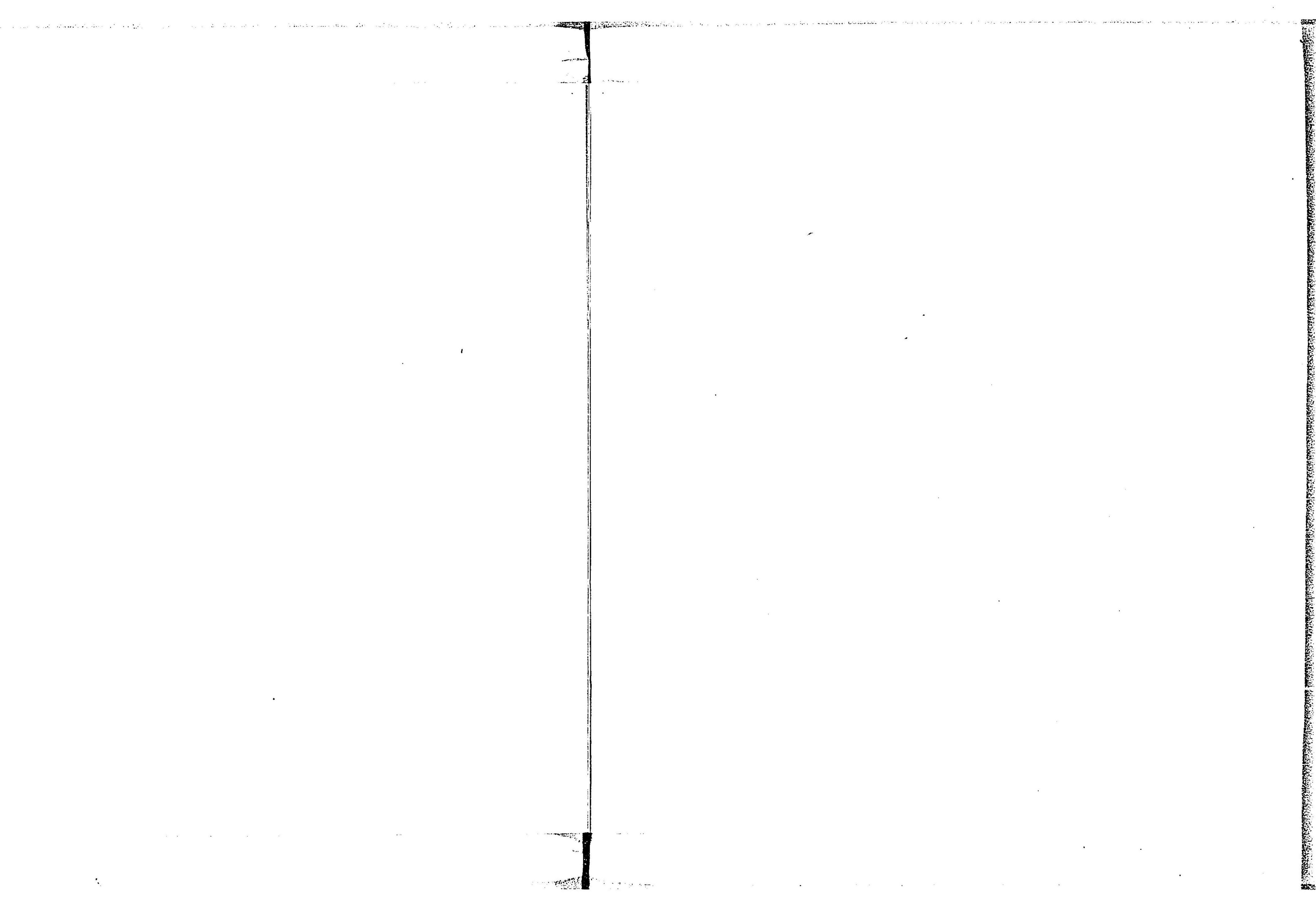
全

愛知縣名古屋市玉屋町三丁目

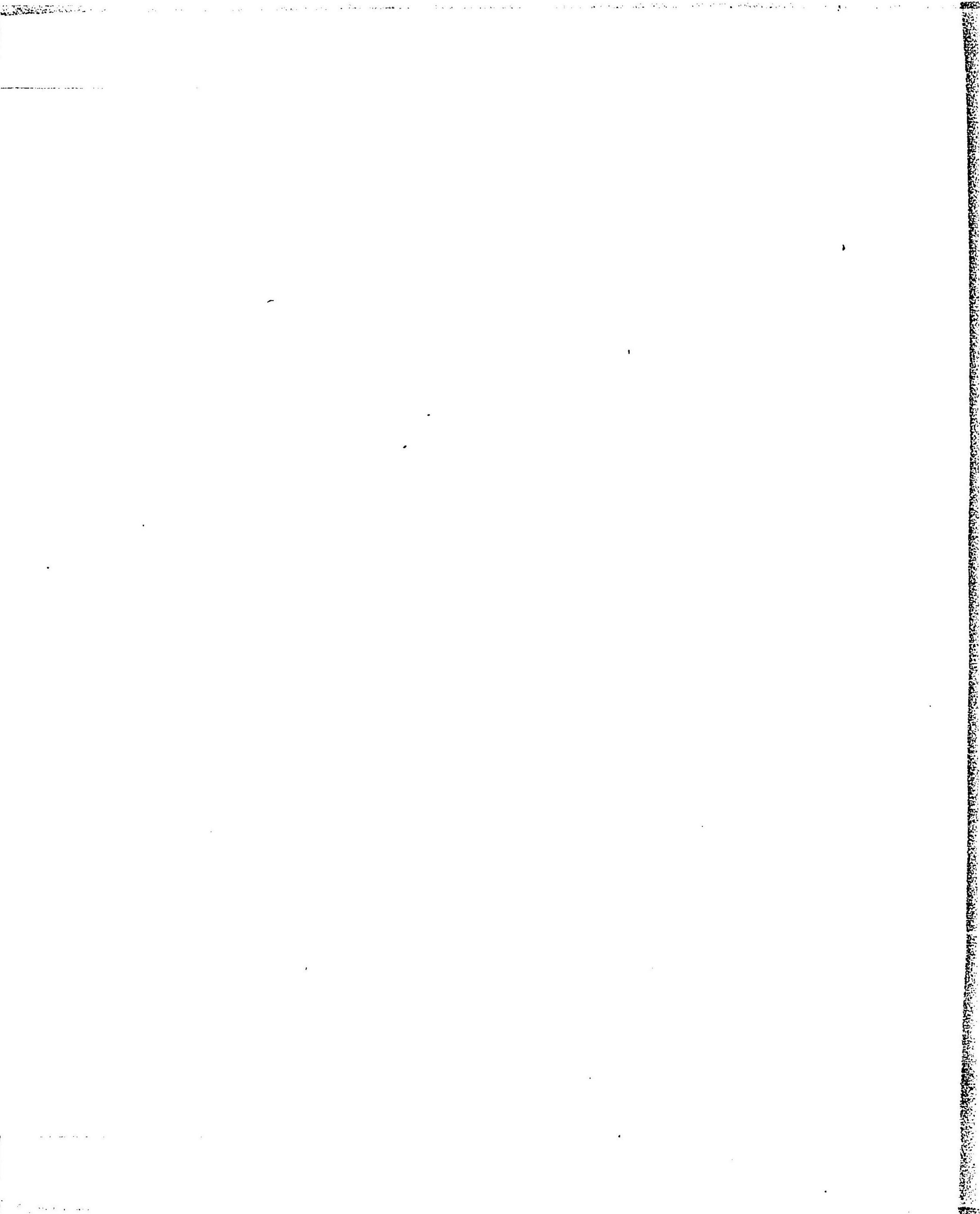
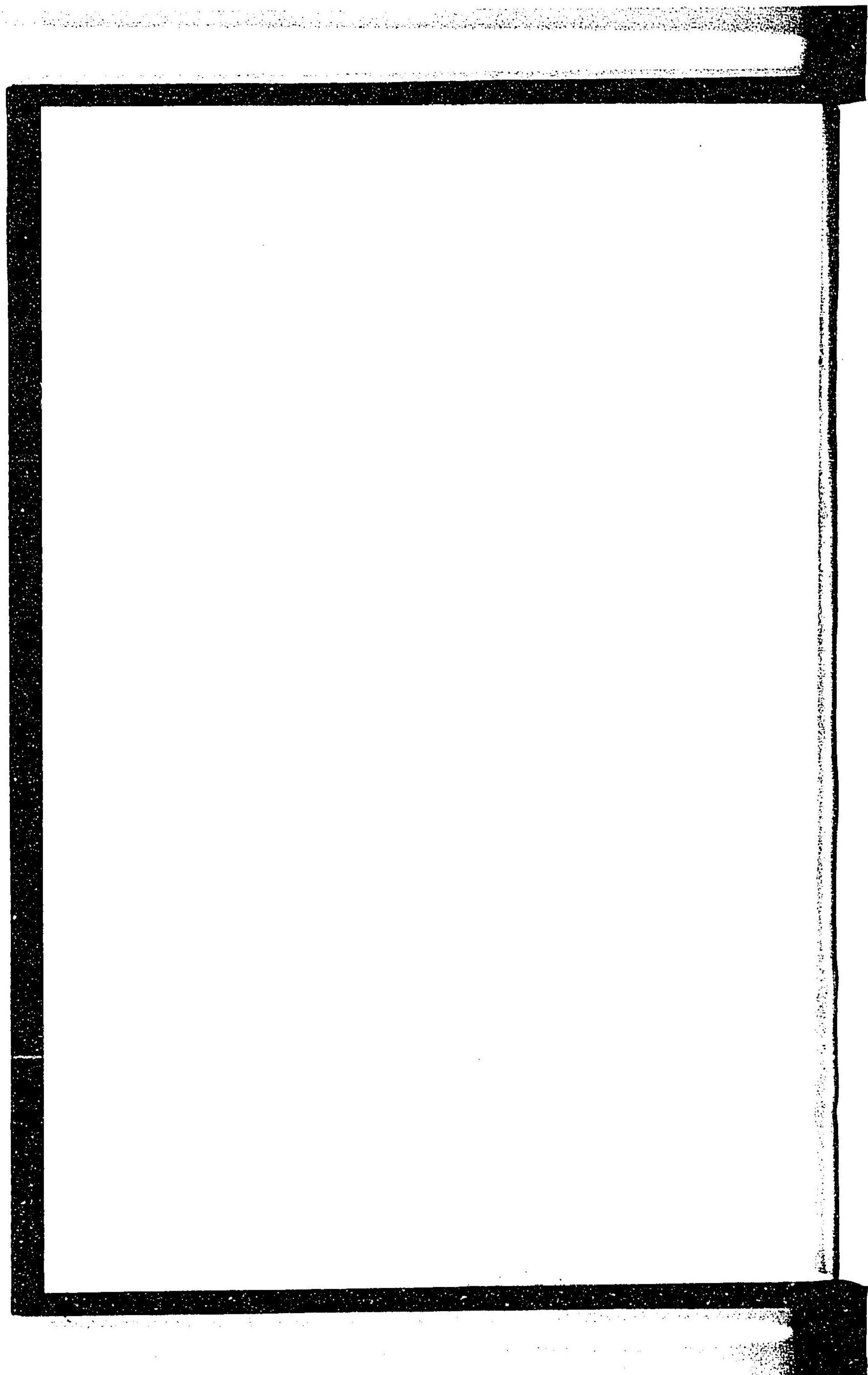
書肆 片野東四郎

全

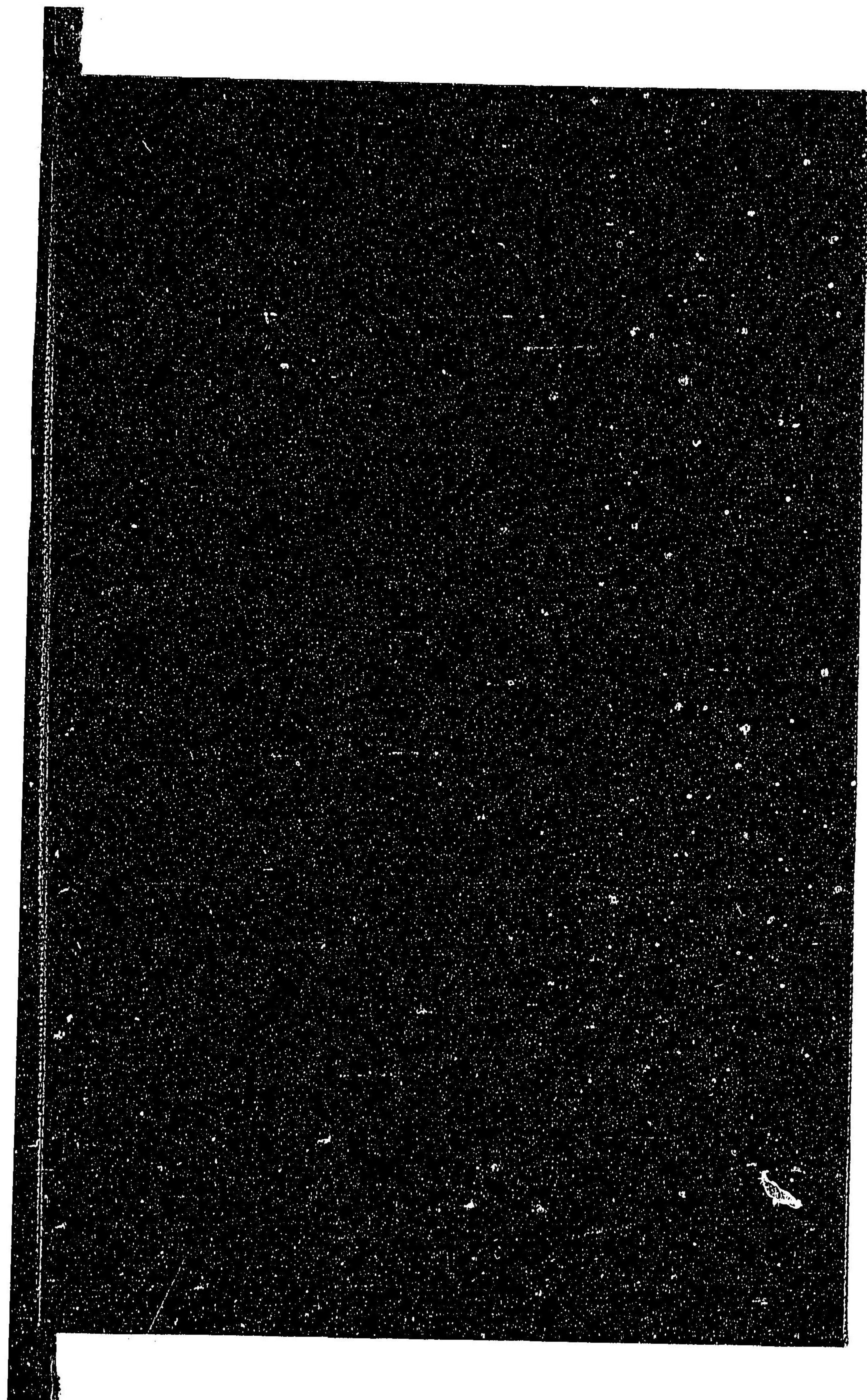














030943-002-3

CZ-5-024

現行法規綴

木沢 成肅

林 陸夫 / 編

M24

BBC-0292





